三重県埋蔵文化財調査報告　92-4

西出遺跡・井之広遺跡

１９９０・３

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、平成元年度農業基盤整備事業地内における埋蔵文化財のうち、美里村中南部地区（西出遺跡）と嬉野町中郷地区（井之広遺跡）の発掘調査結果を第4分冊としてまとめたものである。

2　調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他を県農林水産部の負担による。

3　調査体制は下記によった。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

調査協力　　三重県農林水産部農村整備課・同部耕地課、津農林水産事務所、松阪農林事務所

美里村土地改良協議会、嬉野中郷土地改良区

美里村教育委員会・嬉野町教育委員会

4　調査に至る経緯と経過ならびに調査面積、期間等は第1分冊に明記してあるので参照されたい。

5　現地調査は、西出遺跡が調査第1課主事　服部久士・堀田隆長および同併任主事　山岡裕、井之広遺跡が同じく調査第1課主事　小林秀および同併任主事福田哲也を調査担当者として実施した。

6　各遺跡の遺物整理は各調査担当者があたり、管理指導課がこれを補佐した。

7　本書の編集は、調査第1課第1係長倉田直純の指導のもと調査第1課で行い、文末に執筆者名を記して文責を明記した。

8　度会町教育委員会　奥義次氏には、出土遺物についてご教示を得た。記して感謝の意を表したい。

9　図面における方位は、磁北を用いた。

10　本書で用いた遺構略表示記号は下記による。

ＳＢ：掘立柱建物、ＳＨ；竪穴住居、ＳＤ；溝、ＳＫ；土坑・焼土坑・屋外炉、ＳＺ；不明遺構

11　本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

12　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

Ⅰ　美里村三郷　西出遺跡
　1　位置と環境　1
　2　遺構　5
　3　遺物　11
　4　まとめ　31
Ⅱ　嬉野町釜生田　井之広遺跡
　1　位置と環境　35
　2　遺構　39
　3　遺物　42
　4　まとめ　47

図版目次

Ⅰ　西出遺跡
　第 1図　遺跡位置図（1:50,000）　2
　第 2図　遺跡周辺地形図（1:10,000）　3
　第 3図　調査区位置図(1:2,000)　3
　第 4図　調査区土層図　4
　第 5図　7層上面「遺構」略図（1:200）　4
　第 6図　縄文時代遺構実測図（1:200）　6
　第 7図　中世遺構実測図（1:200）　7
　第 8図　縄文時代遺構個別図1（1:80）　9
　第 9図　縄文時代遺構個別図2（1:80）　10
　第10図　ＳＢ1実測図（1:100）　11
　第11図　出土遺物（1）　12
　第12図　出土遺物（2）　13
　第13図　出土遺物（3）　14
　第14図　出土遺物（4）　16
　第15図　出土遺物（5）　18
　第16図　出土遺物（6）　20
　第17図　出土遺物（7）　21
　第18図　出土遺物（8）　22
　第19図　出土遺物（9）　24
　第20図　出土遺物（10）　25
　第21図　出土遺物（11）　26
　第22図　出土遺物（12）　27
　第23図　出土遺物（13）　28
　第24図　出土遺物（14）　29
　第25図　出土遺物（15）　30

Ⅰ　井之広遺跡
　第 1図　遺跡位置図（1:50,000）　36
　第 2図　遺跡周辺地形図（1:5,000）　37
　第 3図　調査区位置図（1:2,000）　37
　第 4図　遺構実測図（1:300）　38
　第 5図　調査区土層図　40
　第 6図　ＳＫ10実測図（1:20）　40
　第 7図　ＳＫ14実測図（1:40）　41
　第 8図　ＳＨ15実測図（1:40）　41

第 9図　SH16実測図（1:40）　41
第10図　SH19実測図（1:40）　41
第11図　出土遺物（1）　43
第12図　出土遺物（2）　45
第13図　出土遺物（3）　46

表 目 次

Ⅰ 西出遺跡
第 1表　西出遺跡遺構計測表　34

Ⅱ 井之広遺跡
第 1表　井之広遺跡遺構計測表　39

写 真 目 次

Ⅰ 西出遺跡
PL 1　遺跡遠景（南から）、調査区全景（北から）
PL 2　調査区全景（完掘後、西から）、調査風景
PL 3　SH11・12（北から）、SB1（北から）
PL 4　SH5～8（北から）、SH11・12（東から）
PL 5　出土遺物

Ⅱ 井之広遺跡
PL 6　遺跡の立地（東から）、完掘状況（東から）
PL 7　SH2・4、SK3（東から）、SK1・5・6（北から）
PL 8　SK10（左）とSH9他（東から）、SK10（北東から）
PL 9　SH16（南から）、SH18・20、SK14・19（東から）

Ⅰ　安芸郡美里村　西出遺跡

1　位置と環境

歴史的環境

西出遺跡(1)は、三重県安芸郡美里村大字三郷字西出に所在する。

布引山系（山地）は、伊勢と伊賀を隔てる山塊で、山並みの間には伊勢と伊賀を結ぶ幾つかの峠が所在している。このうち、伊勢－伊賀間を最短距離で結ぶのが長野峠で、上野城下町（上野市）から山田（阿山郡大山田村）を抜け、安濃津城下町（津市）へ至る伊賀街道（現在の県道津・上野線）が通る。この長野峠は、伊賀側へは服部川（木津川支流）、伊勢側へは長野川（雲出川支流）を流す分水嶺の位置も占め、西出遺跡が所在する美里村は布引山系の伊勢側の山麓に位置して伊賀街道と長野川に沿って発展してきた。

西出遺跡を含む長野川上流域では、これまであまり縄文時代の遺跡は知られておらず、弥生・古墳時代の遺跡・遺物も長野川下流域の久居市との境界付近、あるいは津市との境界となる岩田川最上流部で若干の弥生～古墳時代遺跡や後期古墳が知られている程度であった。

本地域が本格的に発展するのは中世に入ってからで、東出前遺跡(3)や白樫遺跡(10)、高添遺跡(11)、ひとつ丘陵を挟んで神ノ宅遺跡(23)などで鎌倉～室町期の集落や遺物の出土が確認されている。そして、中世後期には、中勢地域を支配した長野氏の居城、国指定史跡・長野城(2)が長野川上流部に築かれた。

しかし、今回の西出遺跡の調査で縄文時代早期の集落の存在が明らかになったことによって、現在知られている遺跡は乏しいものの、縄文時代早期に遡る遺跡が今後発見される可能性が考えられる。そういう視点で見てみると、長野峠を越えた伊賀側の大山田村上阿波でも大川式の押型文土器を出土した平松代遺跡[1]の存在が知られており、「獣道」的ではあっても後世の長野峠に相当するルートが縄文時代早期にはすでに知られていた可能性がある。西出遺跡では、後述のように二上山産サヌカイトと想定される安山岩質の石鏃も出土しており、これら物品類の伝播経路としても注目される。

遺跡立地と周辺地形

西出遺跡の南側を流れる長野川は、長野峠より流れ出た本流(長野川)と、支流の南長野川が合流し、狭い谷筋を蛇行しながら東流し、久居市戸木町で榊原川と合流した後、伊勢平野に出て雲出川に合流、伊勢湾に注ぐ。

西出遺跡は、長野川と南長野川の合流点の下流、約600mに位置し、長野川の蛇行によって長野川北岸（左岸）に形成された、南西側に開けた標高98m程の台形状の河岸段丘上に立地する。この台形状部分の広さは、仮に北側丘陵裾部を台形下底と考えると、下底800m、上底（川沿いの張出し先端）300m、高さ300m弱程度となる。長野川は、この「台形状」段丘の下底を除く三方を回り込むように流れる。

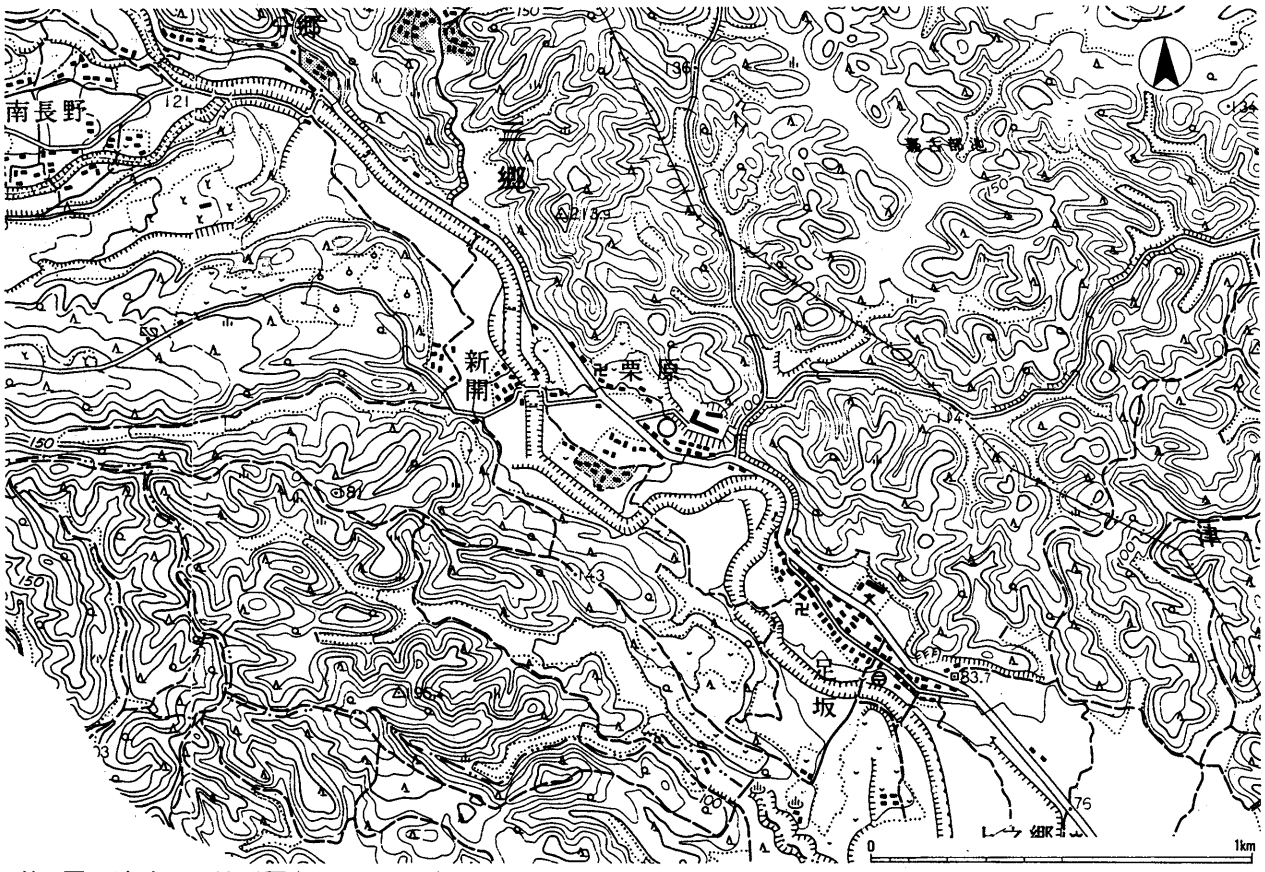
蛇行する長野川の流路からみれば、この場所は防御面側に相当し、大局的には背後（北東側）に丘陵を控え、南側の長野川に向かって緩やかに傾斜しつつ広がる地形ということになる。つまり、調査地は、西側から東側にかけて、また北側から南側にかけて緩やかに低くなっていて、その最底部のところに長野川が位置する、ということになる。こうした遺跡立地の特徴は、縄文集落の立地としては、まことに一般的なあり方を示すもので、縄文集落の占地として特に違和感を覚えるものではない。

ただし、調査前の現地表面は、調査区の南北でさほど変わらず、客土と思われる旧耕作土によって上面をほぼ均質な高さに調整している。このことは、中世期以降の耕地拡大の流れと大局的には対応するのであろうが、具体的な整地年代の特定には至らなかった。　（穂積裕昌）

註1　田阪仁「Ⅳ　阿山郡大山田村平松代遺跡（２ＪＨＤ）」『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1985

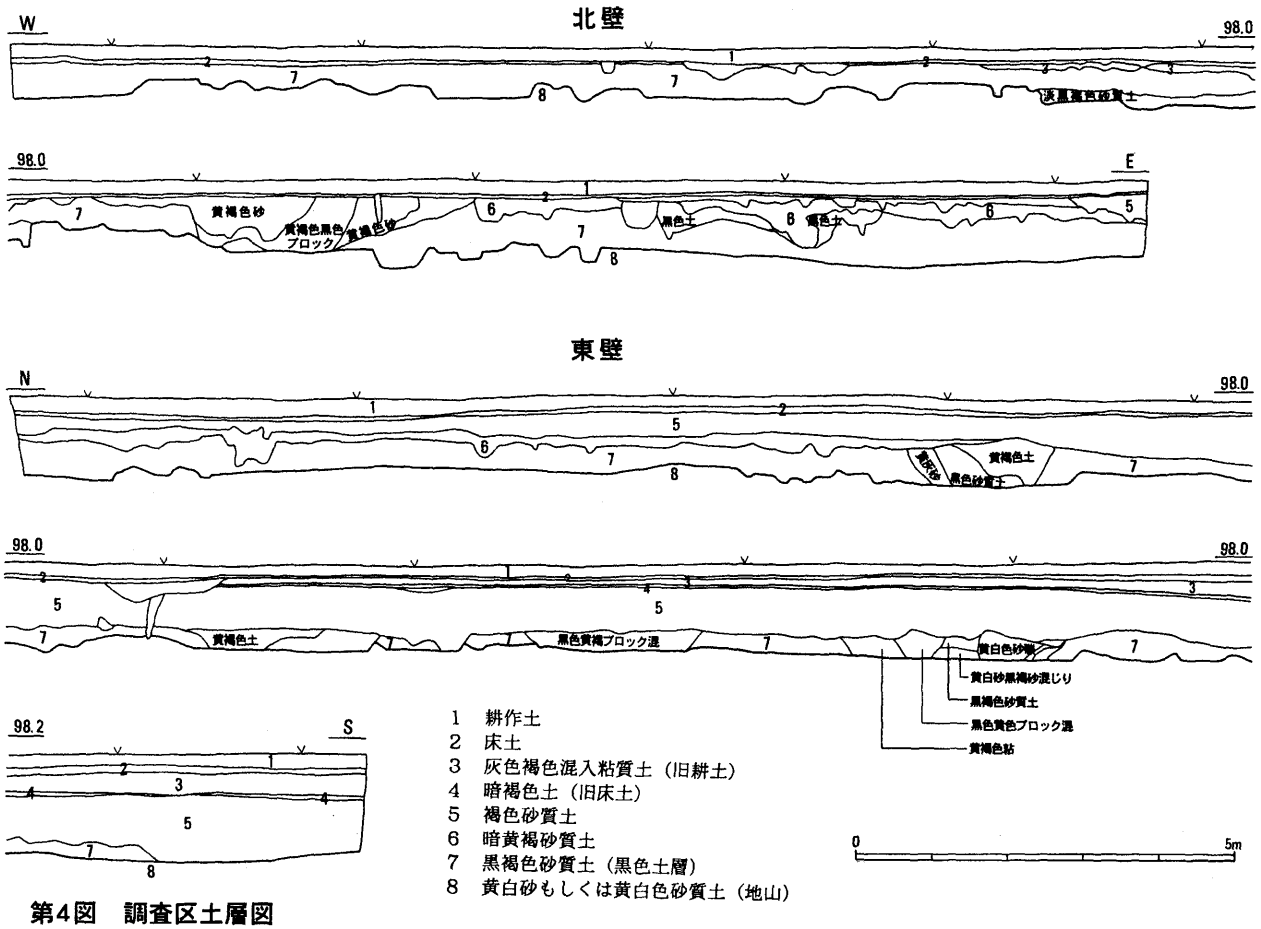
1 西出遺跡	9 舞谷遺跡	17 野田遺跡	25 浜ノ田遺跡
2 長野城跡	10 白樫遺跡	18 前川原遺跡	26 榊原城跡
3 東出前遺跡	11 高添遺跡	19 大垣内遺跡	27 坪ノ貫遺跡
4 三郷B遺跡	12 上ノ郷遺跡	20 井面遺跡	28 下村五間田遺跡
5 三郷A遺跡	13 長田遺跡	21 家所城跡	29 湯出谷遺跡
6 足坂古墳	14 北出遺跡	22 西田遺跡	30 下川原遺跡
7 今峯城跡	15 柊川遺跡	23 神ノ宅遺跡	31 入田遺跡
8 中ノ垣内遺跡	16 稲初垣内南遺跡	24 薬王寺遺跡	32 上出遺跡

第1図　遺跡位置図(1:50,000)　[国土地理院1:25,000「津西部」「大仰」「佐田」「二本木」より]

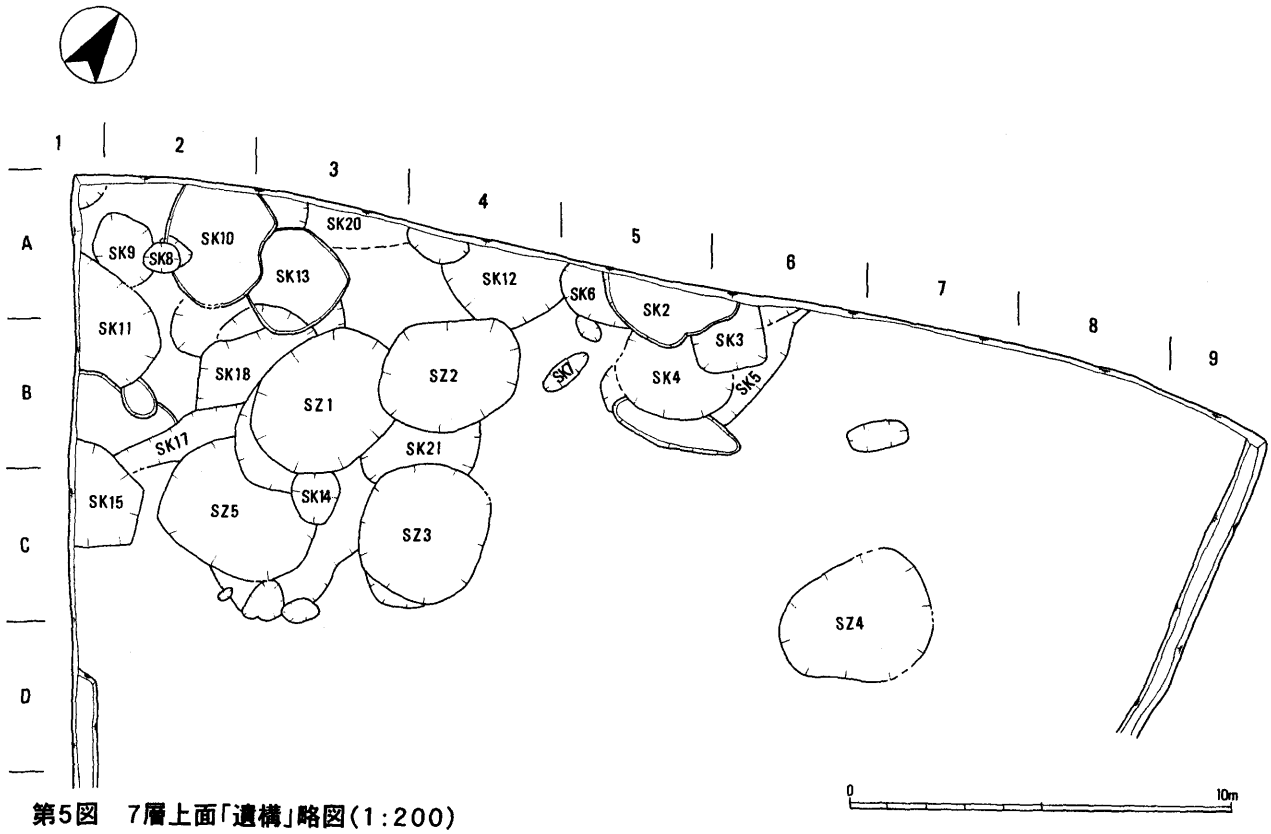


第2図　遺跡周辺地形図(1:10,000)

第3図　調査区位置図(1:2,000)



第4図　調査区土層図



第5図　7層上面「遺構」略図(1:200)

2　遺構

1　基本層序

調査区の基本層序は、以下のとおりである。

1層　耕作土
2層　床土
3層　灰色褐色混入粘質土（旧耕作土）
4層　暗褐色土（旧床土）
5層　灰褐色砂質土
6層　暗黄褐色砂質土
7層　黒褐色砂質土（遺物取り上げに際しては「黒色土」と表記）
8層　黄白砂もしくは黄白色砂質土（地山）

土層図でも明らかなように、現地表面の高さはほぼ調査区全体がフラットとなるが、水田面を形成するために高さを調整したもので、堆積でみれば調査区西北部（A－1付近）が最も薄く、東南隅が最も厚い。つまり、原地表としては、東北側から東南側へ向かって低くなる地形が考えられる。そして、具体的には5層および6層が水田面形成のために持ち運ばれた客土である可能性がある（ただし、遺物報告では、この5層及び6層出土遺物を中心に「包含層」出土遺物として措定した）。

7層は、多少混入と思われる時期の遺物も含むが、ほぼ縄文時代早期遺物の単純包含層で、押型文土器が多数出土した。

遺構検出は、7層上面と地山である8層上面で試みた。7層上面では中世前期の遺構面を、また8層上面では縄文時代早期の単純遺構面を確認した。

なお、7層上面を精査するなかで、縄文時代遺物を多く包含する落ち込み状のものを調査区北側で多数確認した。当初、これらを遺構とみなし、それぞれ竪穴住居・土坑として把握したが、遺構の掘り込み自体や、ベースとなる7層の出土遺物と「遺構」出土遺物の年代幅などから、「遺構」として認定するには極めて不安定なものであることが判明した。従って、本報告にあたっては、一応、遺構名称としては踏襲しているが（竪穴住居1～5としたものは遺構番号そのままで遺構名のみ不明遺構に変更、SH1～5→SZ1～5）、ともに遺構としての実体性には疑問の残るものである。

2　7層上面縄文時代「遺構」

前述のように、遺構としての実体性に疑問の残る一群で、SZ1～5・SK2～21が相当する。個々行った「遺構」の断面確認では、かろうじて掘り込み様のものを認識したものもあるが、遺構埋土とするのか、染みや汚れ、ないしは風倒木に類するものなのか判然としない。後述のように中世遺構はこの面で把握しているが、7層の土質自体が「黒色土」を基調としていたため遺構検出は大変な困難を要し、現地調査に課題を残した。

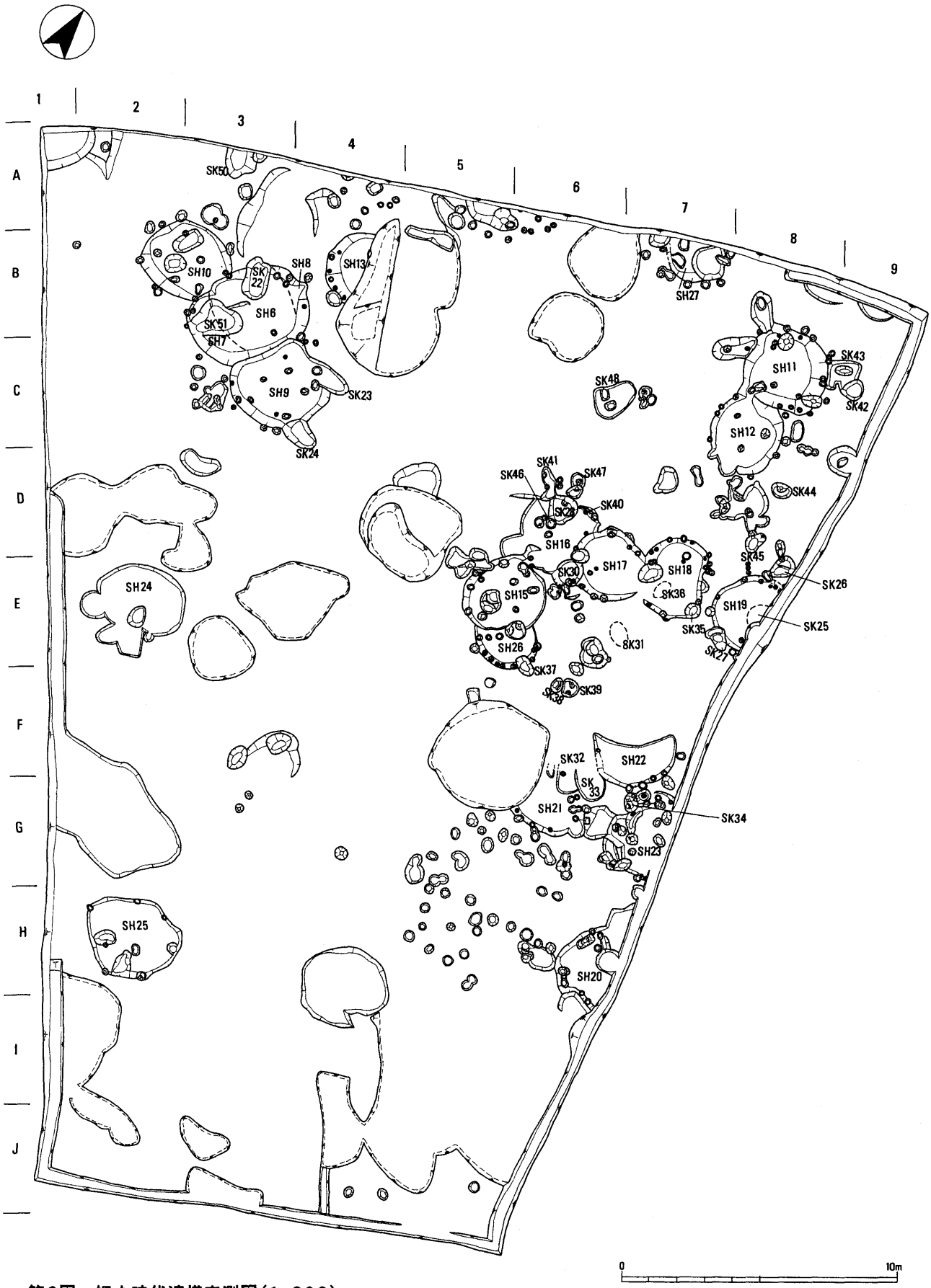
以上のようなことから、ここでは、把握した7層上面の「縄文遺構群」を、たんに7層中に含まれていた遺物取り上げの任意単位的なものとして扱った。ただし、現地調査において把握した7層上面の縄文時代「遺構」の内容は、後述の「遺物」の項目でも明らかなように、個々の遺構出土遺物に一括性は全くない。従って、ここでは、個々の説明は略し、略則図の提示に留める。一応、確認規模等は、遺構計測表に記した。

3　8層上面縄文時代遺構

7層を取り外した後、いわゆる「地山」となる8層上面で検出した遺構群である。検出面の土質が砂質土を基本としていたため、検出ラインは不安定で判然としなかった。そのため、遺構検出はかなり削り込んで行い、本来の遺構掘り込み面は遺構を確認したレベルよりかなり上方にあったことが想定される。この点、亀山市大鼻遺跡[1]の縄文時代早期竪穴住居が粘質土上に掘り込まれ、安定したプランが確認できたことに比べて不利な条件下にあったことは否めない。しかし、遺構としての安定性は大鼻遺跡の遺構には及ばないが、地山自体の色調は淡色系であったため、削り込みを加えて上層部（7層「黒色土」）の影響を除去すれば、検出ライン自体の安定性は相応に保障されているものと考えている。ただし、「遺物」の項で触れるが出土遺物の一括性に乏しい遺構が多く、遺構の評価自体は厳密に扱う必要がある。

確認した遺構には、竪穴住居21基・土坑（焼土坑含む）30基がある。以下、遺構規模等は遺構計測表に譲り、代表的な遺構を中心に簡単に解説を加えたい。

SH6～10他　相互に重複する竪穴住居で、SH6の重複のためSH7・8の規模は不明である。いずれの住居も、住居床面は船底形を呈し、外側へ向かって



第6図　縄文時代遺構実測図(1:200)

第7図　中世遺構実測図(1:200)

緩やかに立ち上がっていく。ＳＨ10では、壁柱かと思われる小穴が住居外周に沿って巡るとともに、床面には主柱穴かと思われるピットが４本確認できた。この４本がＳＨ10に伴うものとすると、主柱穴＋壁柱式の竪穴住居ということになる。なお、西出遺跡８層上面で確認できた竪穴住居の多くは、壁柱が住居プラン外周の内側に存在するのに対し、ＳＨ10ではでは外側となるが、これは遺構検出の過程でＳＨ10の上面を掘り下げすぎてプランが浅くなったことによる可能性もある。

ＳＫ22～24・51　ＳＨ６～10と切り合い関係になる土坑群で、いずれも竪穴住居に後続する。このうち、ＳＫ22とＳＫ51はいわゆる焼土坑で、床面が焼けている。ＳＫ22が楕円形、ＳＫ51が歪な三角形状を示し、側面がオーバーハング(2)するほどの遺存状況は示さないが、ＳＫ51では三角形状の頂点部分の一角に礫を伴っている。

ＳＨ11～12　相互の切り合い関係の把握は不明瞭である。ＳＨ11は、外周内側に壁柱と推定される小穴が巡り、またＳＫ43などの土坑との重複関係をもつが、明瞭にＳＨ11に伴う土坑は確認できなかった。ＳＨ12の平面プランは、楕円形である。

ＳＨ13　風倒木のため東半を欠くが、残存した西側は検出ライン内側に壁柱列を巡らせている。住居外縁部の南側１／４しか確認できないが、壁柱はほぼ一定間隔で穿たれている。円形プランに近い住居形状が復元されよう。

ＳＨ15～18・26他　相互に重複する竪穴住居と土坑の一群で、現地調査で把握した切り合い関係は遺構一覧表に掲載した。これら竪穴住居のプランは、円形を指向するものが多いが、ＳＨ18は楕円形状を採る。竪穴住居に重複する土坑は、ＳＨ28やＳＫ30、35などいずれも基本的には竪穴住居に後出する。竪穴住居のうち、ＳＨ18やＳＨ26では壁柱穴が明瞭で、ＳＨ15やＳＨ17でも壁柱と思われる小穴が存在しており、本来的には壁柱式の竪穴住居であったようだ。第９図中の断面図で示したが、例えばＳＨ19の壁柱は、床面側縁から下外方へ向かって穴が穿たれていることが確認できる。なお、これら竪穴住居では、明瞭な主柱穴は認められなかった。

ＳＨ19　住居東半は調査区外となる。ＳＫ27に先行するが、ＳＫ25との関係は不明である。壁柱らしきのもあるが、住居外周を全周するには至らない。

ＳＨ20　住居東半は調査区外となる。壁柱状のものも認められるが、本遺構の周辺には性格不明の小穴が多く、これらが本遺構に伴うかどうか確定できない。重複する土坑状のものは風倒木である。

ＳＨ21～23他　風倒木などとの重複のため、遺構検出面の安定性に欠き、この部分はいずれも明瞭な検出ラインを押さえられなかった。ＳＨ20については東半部は調査区外となる。ＳＫ32～33も、北半分を欠く。ＳＨ22もプランが歪なことも、北半を欠くためであろう。ただし、部分的ではあるものの、ＳＨ21やＳＨ22では、確認数こそ少ないが住居外周に壁柱穴が確認できた。ＳＨ21とＳＨ23の間には、ＳＫ34以外にも土坑状の落ち込みが存在するが、出土遺物がなく、遺構として捉えるには至らなかった。

ＳＨ24　壁柱や主柱穴は確認できなかったが、住居床面に若干の礫を伴う土坑状の掘り込みを確認した。異なる時期の重複の可能性もあるが、少なくとも切り合い関係としては把握できなかった。

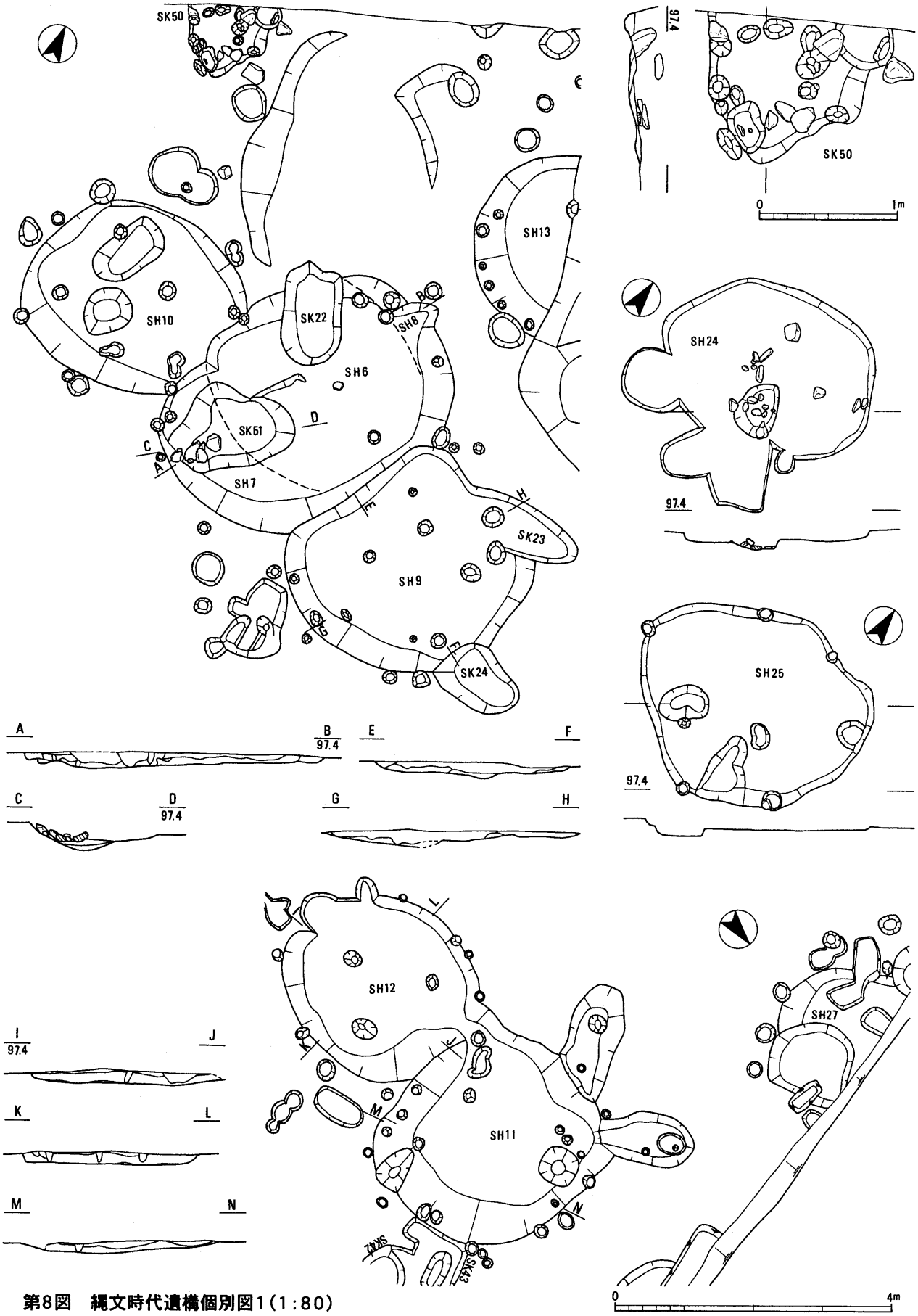
ＳＨ25　ＳＨ24同様、住居間の重複のない単独の竪穴住居で、灰茶色の埋土を有する。確認数は少ないが、住居外周に沿って壁柱状の小穴が存在する。南壁際に土坑状の落ち込みがあり、住居プラン内で完結することから、本住居に伴う土坑の可能性がある。

ＳＨ27　調査区の制約によって北半部を欠き、さらに性格不明の落ち込みとの重複のため特に西側のプランが不明瞭であるが、一応、竪穴住居として把握した。住居外周の南側を中心に壁柱状のピットがあるが、壁柱とするにはやや大きく、疑問も残る。

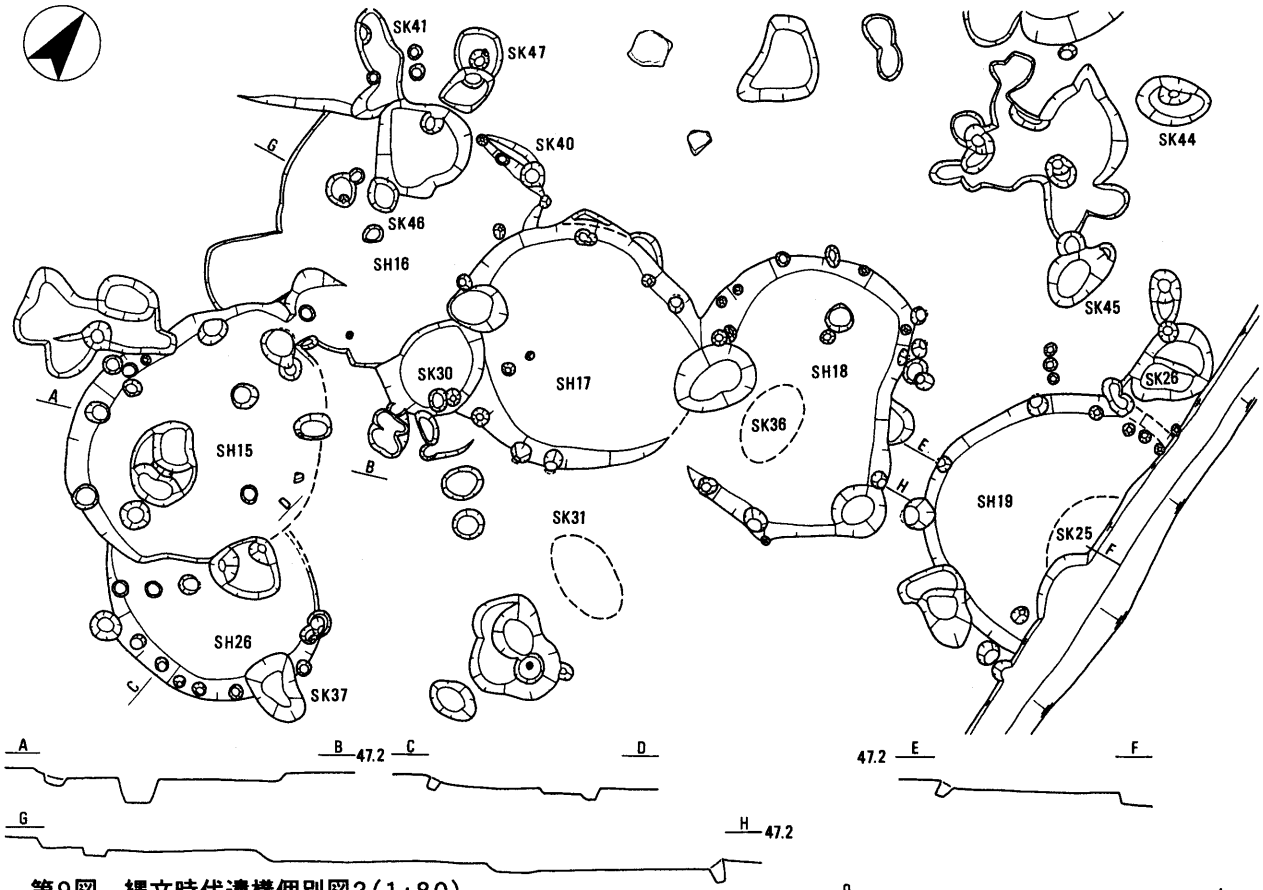
ＳＫ50　遺構の北半部が調査区外へ出るが、礫を伴う焼土坑である。やや歪な楕円形状を呈するものと推定される。検出面からの掘り込みはごく浅く、残存状況も悪いため、側縁部がオーバーハングしていたかどうかはわからない。遺構外周の小穴を礫が抜けた痕跡として捉えれば、本来は礫を中心とした遺構を形成していた可能性もある。

その他　以上で触れなかった個々の土坑は、遺構一覧を確認願いたい。それとは別に、グリッドＡ－５・６区南辺で確認できた小ピットについて触れておく。

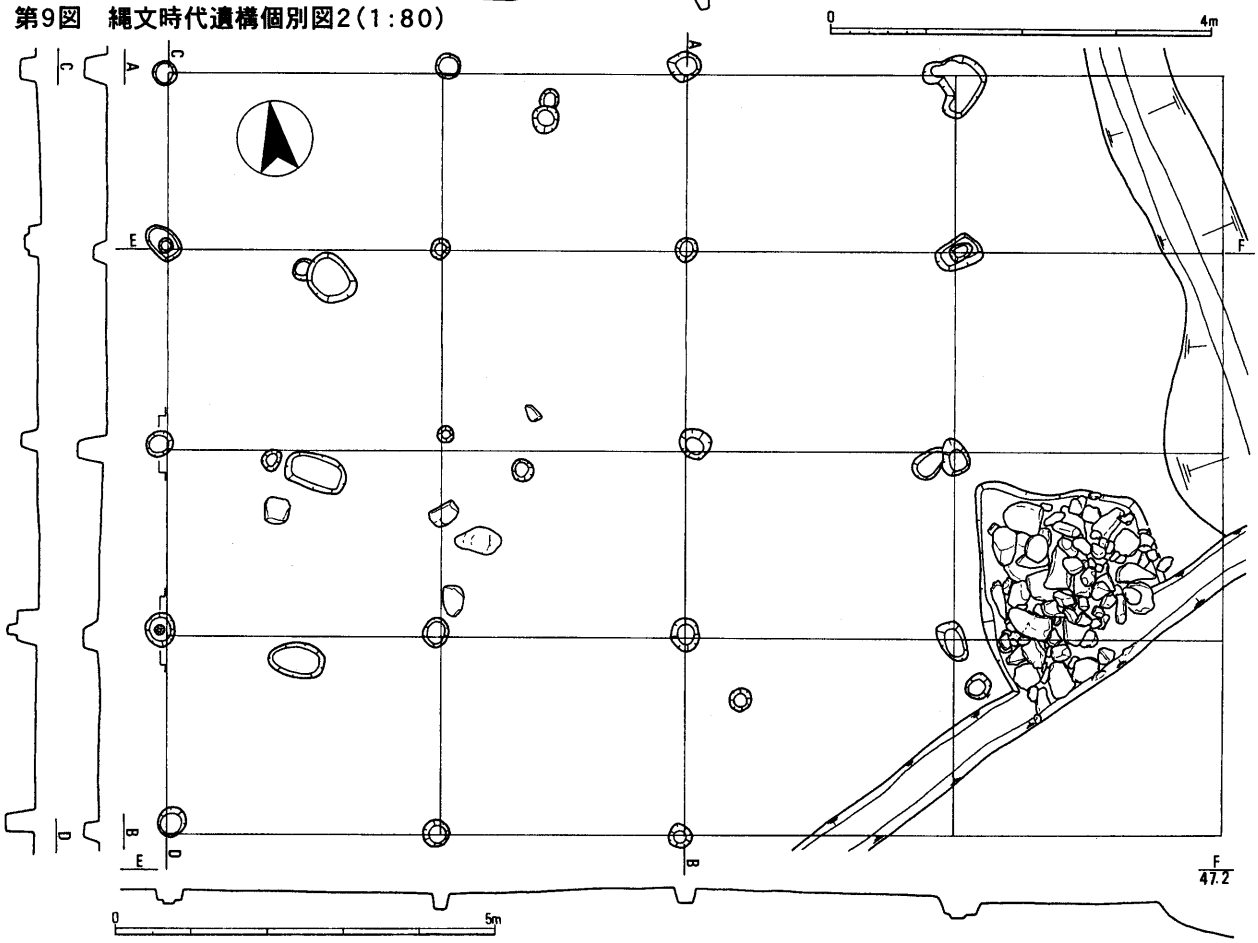
ここでは、竪穴住居と把握しうるほど明瞭なプラン



第8図　縄文時代遺構個別図1（1：80）



第9図　縄文時代遺構個別図2(1:80)



第10図　SB1実測図(1:100)

は確認できなかったが、小ピットがまとまって存在しており、見様によっては壁柱状のまとまりとして捉えることも可能である。ピットの規模も、ＳＨ13やＳＨ26など典型的な壁柱と考えられるものと共通性が高い。７層黒色土からの染み込みもあって、遺構検出はかなり削り込んでおり、その過程で壁柱部を除いて除去されてしまった可能性がある。

４　中世遺構

中世の遺構は、７層の黒色土上面で検出した。７層を掘り込み、埋土には６層に類似した黄色系の埋土が入り込んでいたため、遺構の把握としては容易であった。性格不明のピットや溝もあるが、出土遺物も相応に存在して安定した遺構としては掘立柱建物１棟と土坑が１基存在するのみである。

ＳＫ１　長径4m、短径2.2mの長楕円形の土坑である。縄文時代早期の混入遺物も含むが、埋土より鎌倉時代の遺物が出土している。

ＳＢ１　調査区の制約から東側を欠くが、調査区南東隅に存在する礫入りの土坑がいわゆる南東隅土坑と考えられるため、東西は現状より１間東側へ延びると判断できる。従って、本建物のプランは東西４間（推定14m弱）×南北４間（10m）の東西棟建物で、建物方位は、Ｎ10°Ｅとなる。南東隅土坑は、南側を欠くが、フラットの床面いっぱいに礫を充填しており、礫に挟み込まれた状態で土器が出土している。

なお、ＳＢ１西側柱列の内側に３個のピットが併行に並んでおり、ＳＢ１との関連は不明ながらピット内からは土器類も出土している。　（堀田隆長・穂積）

3　遺物

１　遺構出土縄文土器

遺構実態には乏しいが７層上面で「遺構」として取り上げた遺物と、８層上面で確認した遺構出土遺物[3]を扱う。

ＳＺ１出土遺物（１～54）　ごく少量の大鼻式を含みつつ、大川式と神宮寺式の押型文土器が多数出土しており、時期的な一括性はない。１は口唇部に縄文を回転させ、頸部に縄の側面圧痕と円棒状具の先端刺突をもつ。２も口唇に縄回転をもつが、口縁外面は押型文である。ともに、大鼻式から大川式への移行期の所産であろう。最も大型の破片である６は、頸部に棒状具の刺突列をもち、体部に格子状の市松文を縦回転させた大川式に相当しよう。ネガティブな楕円文（以下、「ネガ楕円文」と略）や粒の細かい格子目文をもつ32～54は、一部大川式の新しい段階を含む可能性もあるが大略は神宮寺式に相当しよう。

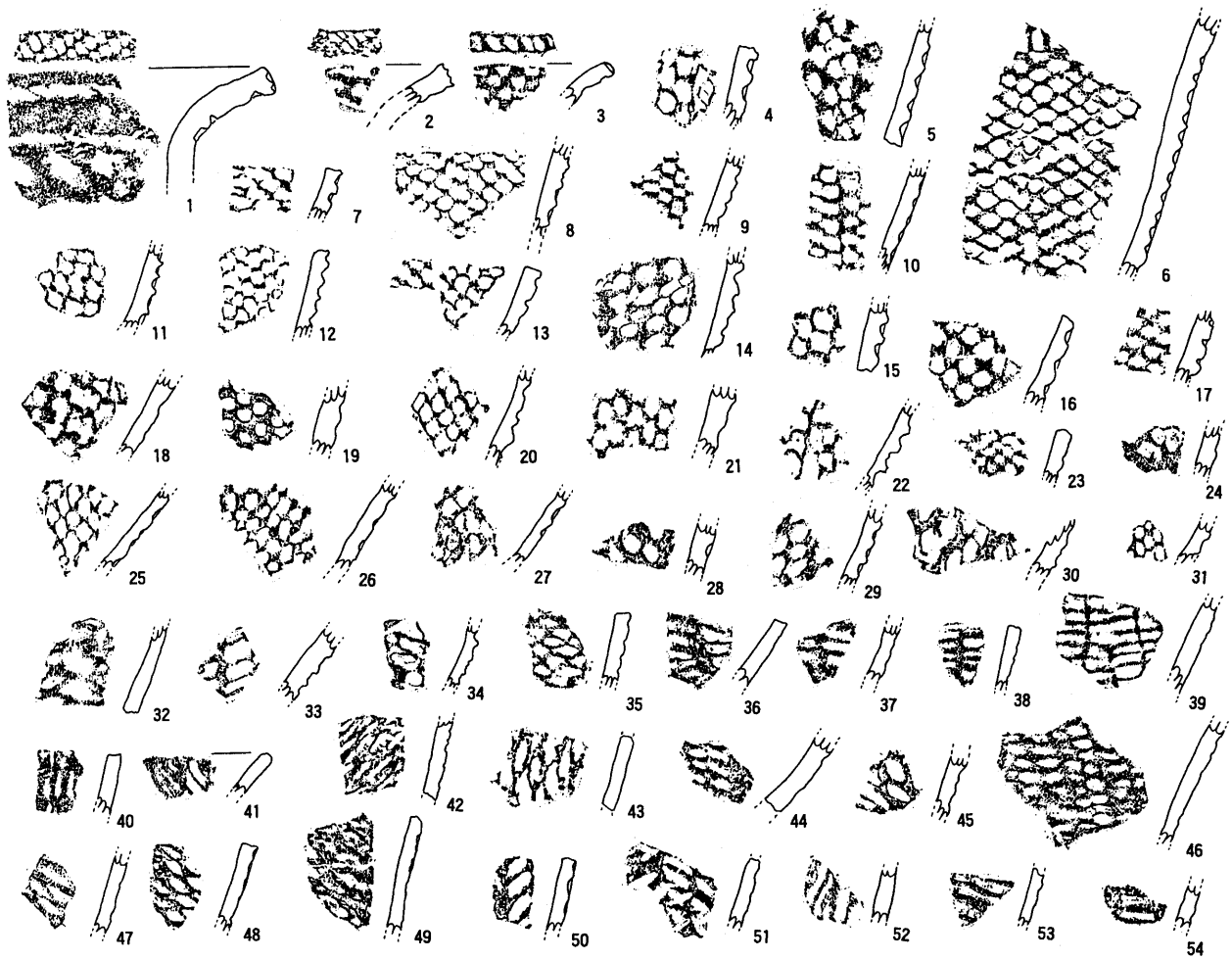
ＳＺ２出土遺物（55～90）　大川式や神宮寺式のみならず、高山寺式（90）まで含んでおり、一括性は全くない。高山寺式の90は、外面にポジティブな楕円文を施し、内面に斜行沈線をもつ。

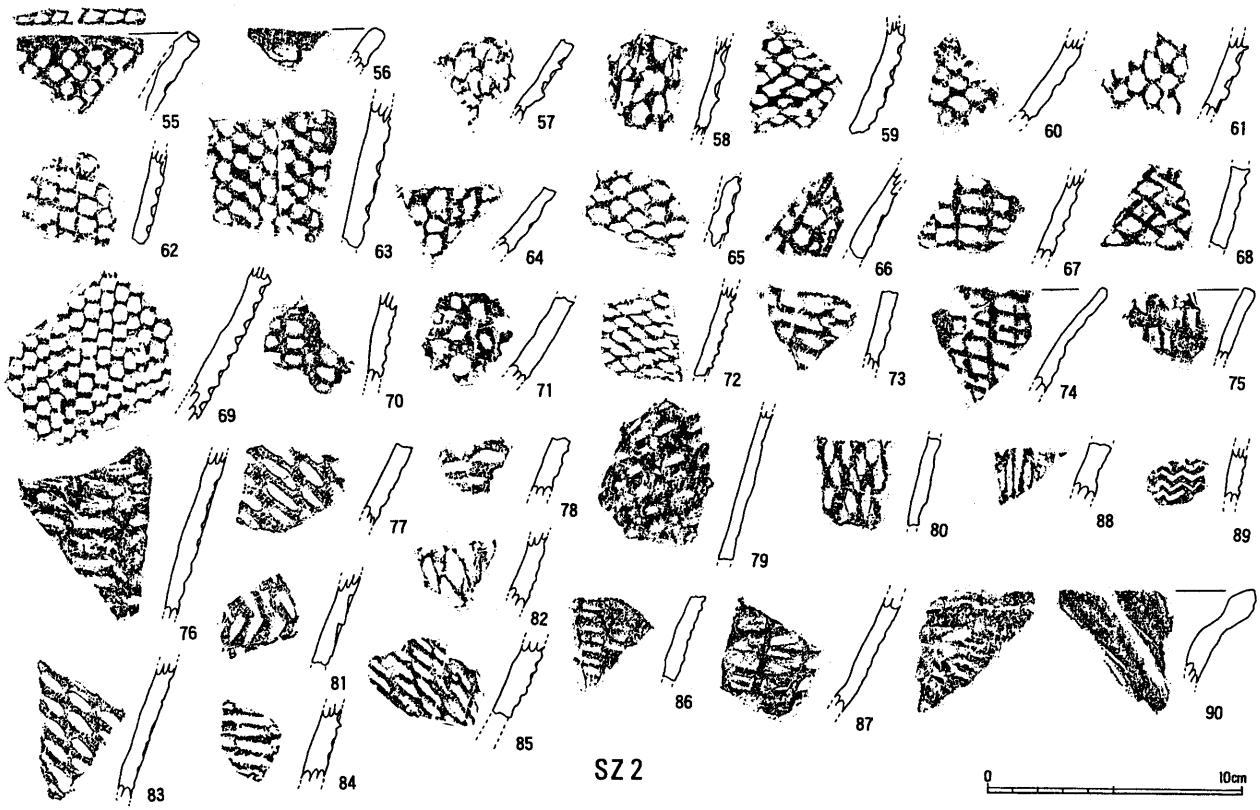
ＳＺ３出土遺物（91～103）　口縁部片のうち、93は口唇に縄回転を有するが口縁外面は円棒状具の刺突である。同様に91も口縁外面に縄回転文、頸部に棒状刺突と縄と円棒状具、それに押型文を併用した土器である。一方、92は典型的な大川式で、斜格子文の縦施文を施す102などは神宮寺式の胴部破片であろう。底部を残す103は、膨らみの少ない器形で、体下半部が無文部となる。

ＳＺ４出土遺物（104～141）　大川式を中心に、神宮寺式も含んでおり、一括性はない。122までは大川式、126以降は神宮寺式に大略比定でき、123～125はいずれとも決しがたい。最も大形の口縁部破片である116は、口唇を刻み、口縁外面に長楕円文を横回転し、頸部に２段の棒状刺突を施す。口縁外面の長楕円文は、一見棒状沈文のようにも見えるあまり例を見ない長大な原体を用いている。神宮寺式は、126や129で典型的にみられるように、口縁部から胴部まで横施文を介在させることなく縦回転させるものが目立ち、全体的に新しい段階の神宮寺式が中心である。

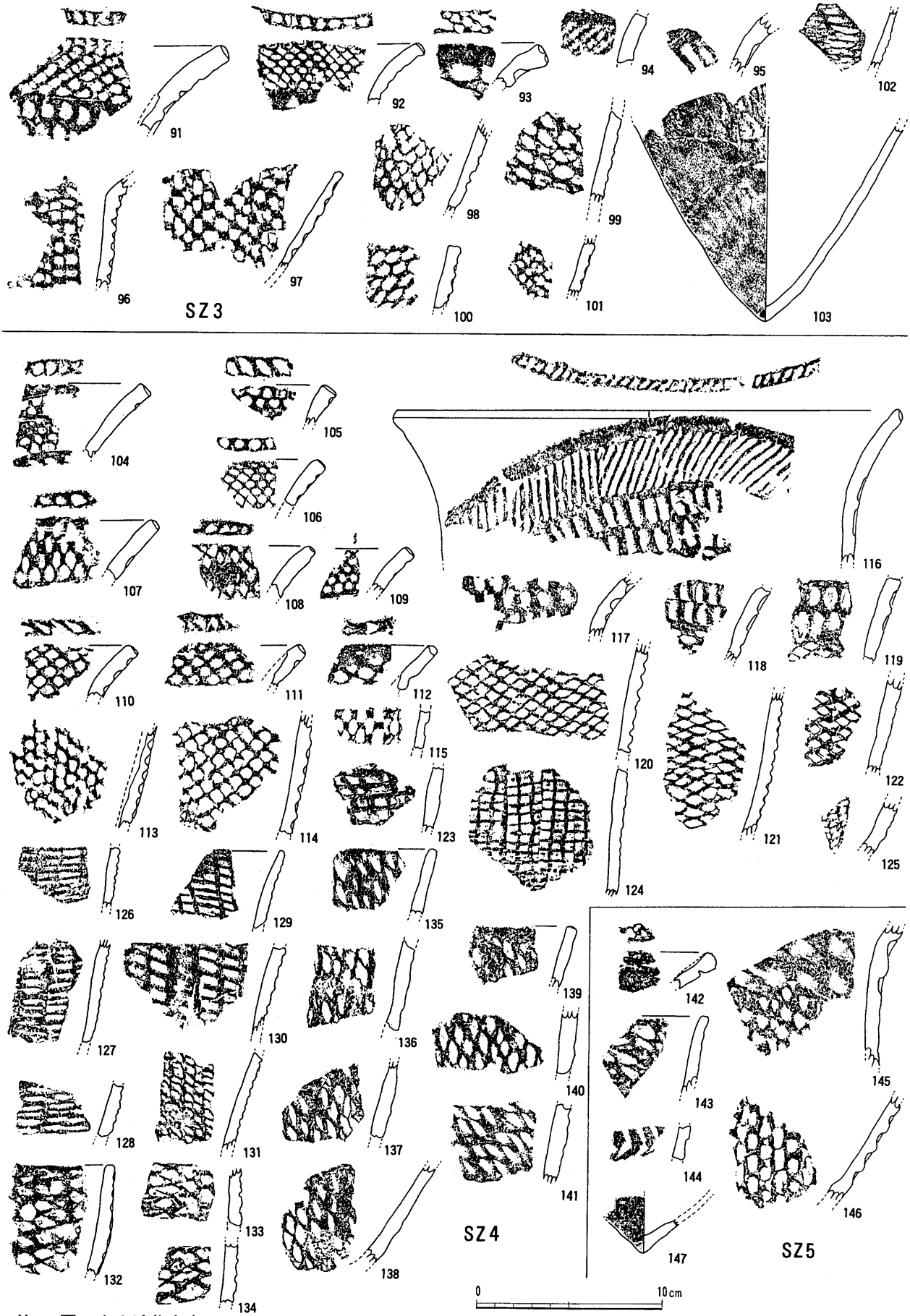
ＳＺ５出土遺物（142～147）　大鼻式(142)と神宮寺式(143)の口縁部、大川式の頸部(144～145)がある。市松文を施した胴部(146)は、大鼻式もしくは大川式であろう。

ＳＨ６出土遺物（148～155）　148は頸部文様帯に縄の先端刺突と回転を上下に施し、また大鼻式特有の器形を示すが、口縁外面に市松文の横施文を施している。頸部に縄の回転や刺突？を施す149や150も大鼻式に比定できよう。市松文を施した胴部片(152・154)は大鼻式もしくは大川式、正格子文(151・153)は大川式、浅い格子文(155)は神宮寺式であろう。

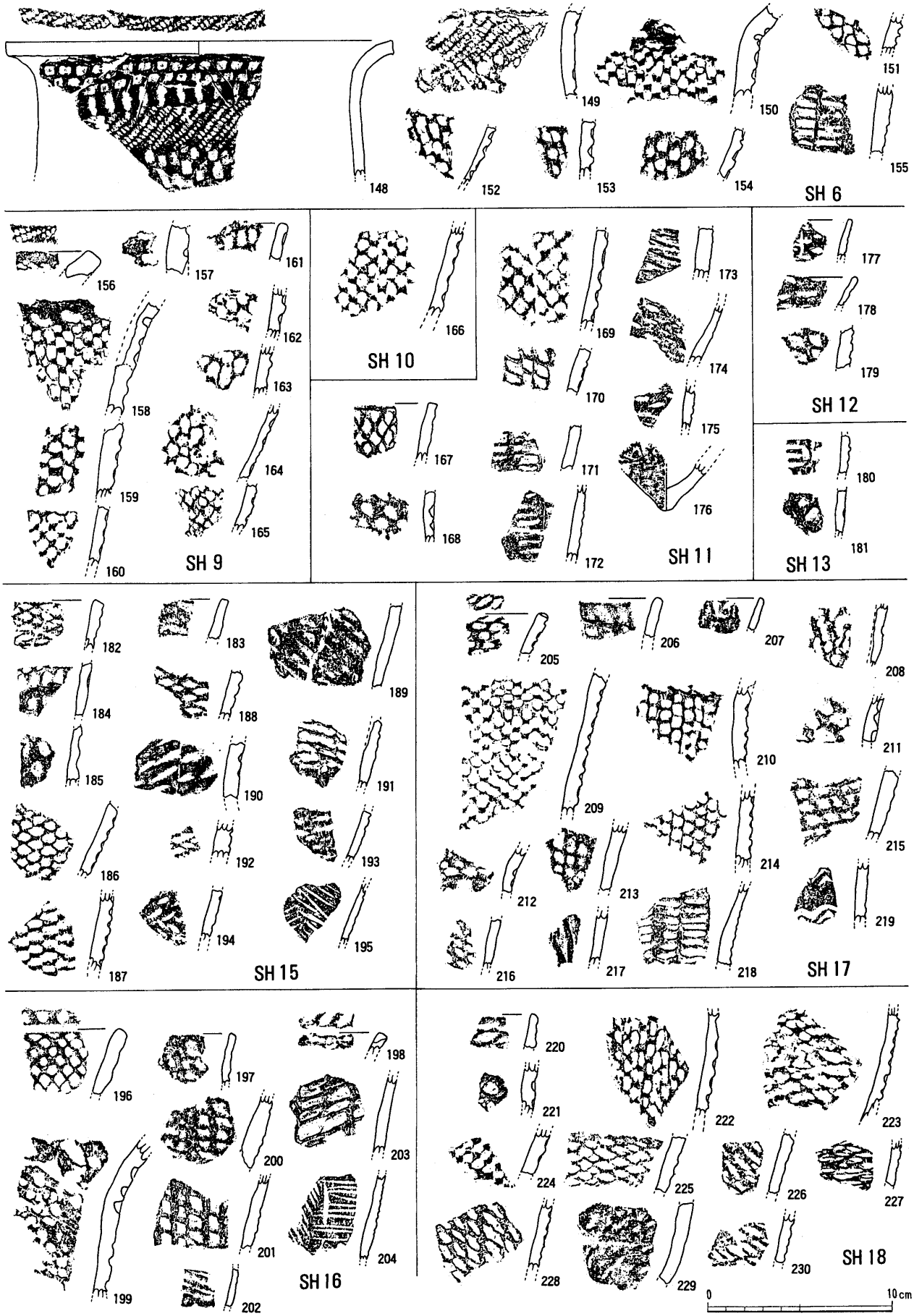




第11図　出土遺物(1)



第12図　出土遺物(2)


148
149
150
151
152
153
154
155
SH 6
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
SH 9
166
SH 10
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
SH 11
177
178
179
SH 12
180
181
SH 13
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
SH 15
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
SH 17
196
197
198
199
200
201
202
203
204
SH 16
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
SH 18
0
10cm

第13図　出土遺物(3)

ＳＨ９出土遺物（156～165）　縄の側面圧痕(156)や縄刺突(157～158)など大鼻式に特有のもので、市松文の胴部片もこれに矛盾しない。

ＳＨ10出土遺物(166)　市松文を施した胴部破片である。大鼻式ないしは大川式の古段階に比定できる。

ＳＨ11出土遺物（167～176）　縦長の菱形の市松文を口唇直下から横回転させる167は、167は口唇への施文がないなどイレギュラーな特徴ももつが、大川式に属しよう。同様に、頸部刺突文の168や胴部に市松文を縦施文する169も大川式である。一方、170以下の浅い施文の斜格子文やネガ楕円文は神宮寺式に含まれるものが多いと思われる。

ＳＨ12出土遺物（177～179）　177～178は口縁部片で、極めて薄い器壁にネガ楕円文を縦施文した神宮寺式である。

ＳＨ13出土遺物（180～181）　口縁部片はない。器壁は薄く、ネガ楕円文を施している。

ＳＨ15出土遺物（182～195）　大川式と神宮寺式の他、沈線文土器も混じる。押型文土器口縁部片のうち、182～183は口唇部に刻み等はなく、神宮寺式に含まれよう。棒状刺突による頸部文様帯がみられる184～185や、胴部に市松文を施す186や187は大川式に相当すると思われる。195は沈線文土器である。

ＳＨ16出土遺物（196～204）　本遺構も、大川式・神宮寺式・沈線文土器が混在している。口縁部・頸部片では、口唇刻みもしくは棒状刺突による頸部文様帯のある196・198～199が大川式、器壁が薄く小粒正格子文を施した197は神宮寺式であろう。204は沈線文土器である。

ＳＨ17出土遺物（205～219）　本遺構も、大川式と神宮寺式が混在状態で出土した。口唇部に刻みを入れる205や頸部に円棒状具による刺突の入る211などは大川式、細い印刻の正格子文をもつ薄手の218などは神宮寺式に相当しよう。また、219は、若干の無文部を空けて山形文を帯状に横施文している。

ＳＨ18出土遺物（220～230）　口縁小片である220は、口唇部の刻みをなくし、ネガ楕円文を縦施文する神宮寺式で、細身のネガ楕円文をもつ226以降も同様であろうが、221～225は大川式に含まれよう。

ＳＨ19出土遺物（231～242）　241や242などは神宮寺式の混入とみられるが、その他は大略、大川式に含まれよう。比較的大形の口縁部片である231は、短く外反する口縁部の口唇を刻み、口縁外面を無文として頸部に円棒状具による刺突を施す。胴部は、角の取れた市松文が目立つ。

ＳＨ20出土遺物（243～256）　神宮寺式に相当する遺物が主体であるが、244や255、250などの胴部市松文などは大川式に含まれよう。ただし、市松状に配するものであっても、粒の細かい254などは神宮寺式に含まれようか。

ＳＨ21出土遺物（257～260）　257と258は大川式、259と260は神宮寺式である。257は、口唇部を刻み、口縁外面に格子文を横回転させる。拓本下部にわずかに見えるのは、頸部文様帯の刺突文であろう。

ＳＨ23出土遺物（261～265）　器壁が薄く、細い正格子押型文の265は神宮寺式であろうが、他は大川式である。口縁破片である261は、口唇部を刻んで口縁外面を無文とし、頸部に円棒状具による刺突を二段に施し、胴部は個々の印刻が円形を呈する市松文を施している。

ＳＨ24出土遺物（266～274）　口唇部を刻む266をはじめ、大川式と神宮寺式のものが混在するが、274は本遺跡にしては珍しい器壁の薄いポジティブな楕円文で、黄島式併行期に比定できよう。

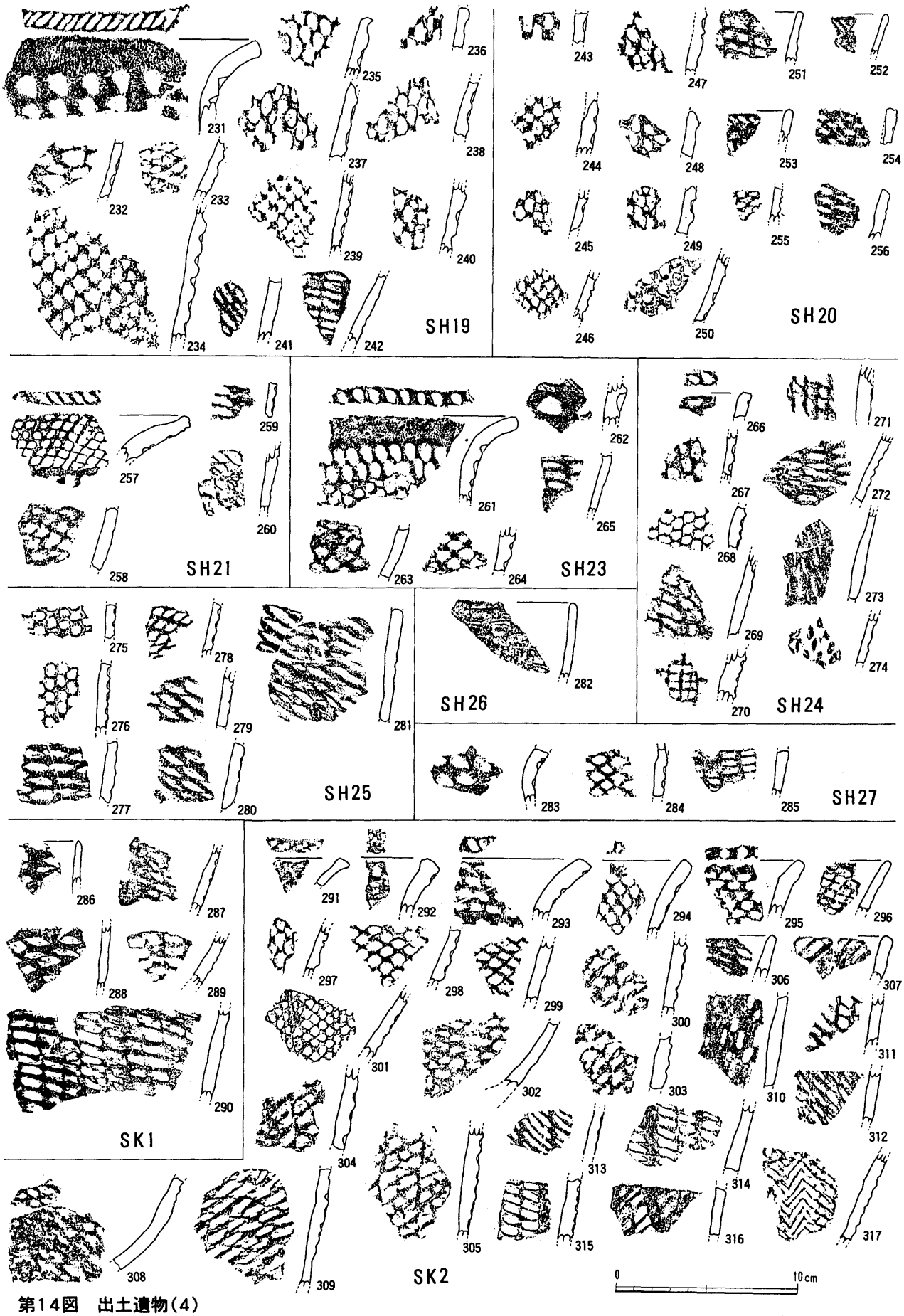
ＳＨ25出土遺物（275～281）　胴部破片ばかりである。市松文を配した275や276は大川式、ネガ楕円文を配した277以下は大川式の新しい段階から神宮寺式にかけてであろう。

ＳＨ26出土遺物（282）　口縁部から外反することなく砲弾状に窄まっていく器形を呈し、押型文は細長方形の格子文を口縁部より垂下させている。口縁部の刻みもなく、神宮寺式の新しい段階に比定できよう。

ＳＨ27出土遺物（283～285）　頸部刺突のある283と胴部市松文の284は大川式、細長正格子文の285は神宮寺式に含まれよう。

ＳＫ１出土遺物（286～290）　中世の土坑であるＳＫ１に混入状態で出土したもので、本来は包含層に一括すべきものである。器壁が薄く、口唇部への仕事のない口縁部片286を含め、ネガ楕円文ないしは格子文が施されている。全体として、神宮寺式に含まれようか。

ＳＫ２出土遺物（291～317）　口縁部には、口唇部


231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
SH19
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
SH20
257
258
259
260
SH21
261
262
263
264
265
SH23
266
267
268
269
270
271
272
273
274
SH24
275
276
277
278
279
280
281
SH25
282
SH26
283
284
285
SH27
286
287
288
289
290
SK1
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
310
311
312
313
314
315
316
317
308
309
SK2
0
10cm

第14図　出土遺物(4)

を縄回転する291～292、棒状具による刻みを施す293～295、口唇への仕事をしない296・306～307があり、それぞれ大鼻式、大川式、神宮寺式に比定できよう。胴部も、ほぼこれに対応して各段階のものを含む。このうち、特徴的なものについて述べれば、310は極めて粒の細いネガ楕円文を疎らに配する。大振りの山形文である317は、原体自体の幅が広い。

ＳＫ３出土遺物（318～322）　318は口唇部に縄回転を施し、口縁外面に縄？の先端刺突を施した大鼻式であろう。口唇部を刻み、口縁外面に印刻が円形となる市松文を横回転し、頸部に円棒状具による刺突文を三段に配して胴部に市松文を縦回転させる319は典型的な大川ａ式、口縁外斜面に刻みを入れて長い口縁部に市松文が崩れたようなネガ楕円文を施す320、同様にネガ楕円文を胴部縦回転させた321～322は神宮寺式に比定できよう。

ＳＫ４出土遺物（323～336）　口唇部に縄回転を施した大鼻式の可能性のある323や、頸部文様帯をもつ327などを除き、全般に神宮寺式が主体を占める。このうち、324～326は口縁外斜面に刻みを入れている。

ＳＫ５出土遺物（337～369）　口唇施文や頸部文様帯、明瞭な市松文をもつ337や338、343～346などは大川式に含まれようが、全体としては神宮寺式のものが多い。このうち、正格子文をもつ349と350は口縁部付近の破片で、外面だけでなく内面にも押型文の施文をもつことを特徴としている。

ＳＫ６出土遺物（370）　極めて細長のネガ楕円文を施した押型文土器である。神宮寺式に含まれよう。

ＳＫ７出土遺物（371～371）　口縁外面の市松文の横回転と頸部円棒刺突の残る371は大川式、ネガ楕円文を斜格子状に縦施文した371は神宮寺式であろう。

ＳＫ９出土遺物（373～375）　373と374はネガ楕円文を施した神宮寺式、375は沈線文状を呈するが、原体自体は押型による平行沈文の可能性がある。

ＳＫ10出土遺物（376～383）　口唇に刻みを施した378は大川式であるが、その他は神宮寺式に比定できる。このうち、口縁外斜面を刻み、長い口縁外面にネガ楕円文を横回転する376は神宮寺式でも古い段階に相当しよう。また、楔状の浅い刺突を口縁外面に疎らに施した珍しいものであるが、神宮寺式に含まれよう。

ＳＫ11出土遺物（384）　口縁外斜面に刻みを入れた神宮寺式である。

ＳＫ12出土遺物（385～390）　胴部に丸めの市松文を縦回転させた386～388は大川式、その他は神宮寺式であろう。385は口縁外斜面に刻みを入れ、その下にネガ楕円文を羽状に横回転させている。また、小破片のため明確にはわからないが、山形文を横回転させた389は下部に僅かながら無文部がみられる。

ＳＫ13出土遺物（391～396）　口唇に刻みを入れる391～392と胴部市松文の395は大川式、その他は神宮寺式である。393と394は、極小粒のネガ楕円文を疎らに縦施文する特徴的な押型で、396も細長いネガ楕円文が横に流れて平行沈文状の形状をとる。

ＳＫ14出土遺物（397～399）　397～398は大川式、399は撚糸文土器である。397は頸部に円棒状刺突を入れ、胴部市松文を施す。399の撚糸文は、密接施文である。

ＳＫ15出土遺物（400）　ネガ楕円文を縦回転した胴部片である。やや厚いが、神宮寺式に含まれようか。

ＳＫ17出土遺物（401～402）　口唇部に刻みを入れ、頸部に刺突を入れる401は大川式、口縁端部への施文がなく、細いネガ楕円文を引き下ろす402は神宮寺式である。

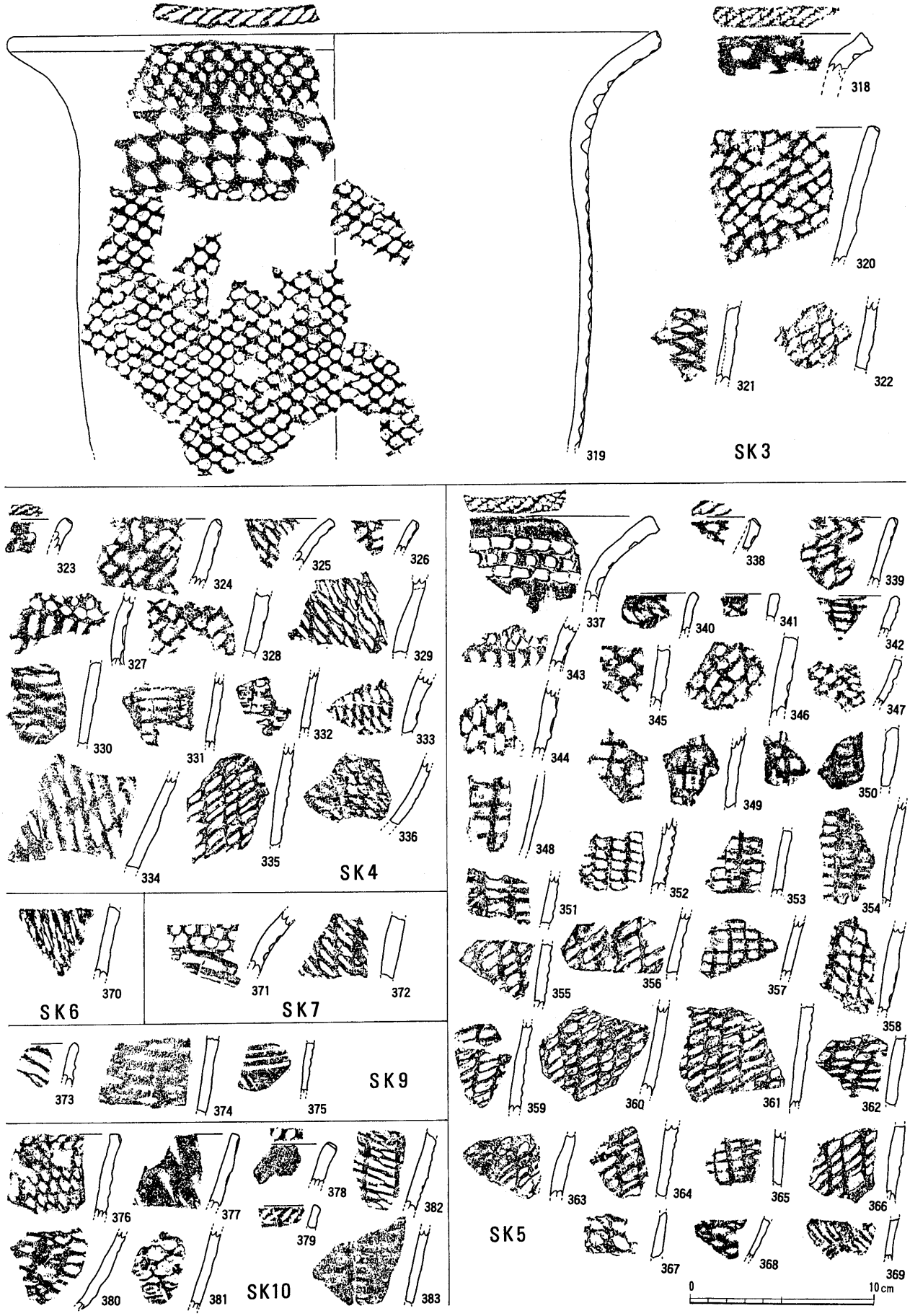
ＳＫ18出土遺物（403～406）　403は大川式の頸部片で、円棒状具を下から上へ突き上げたもので、器面に円棒状具先端の刺突圧痕が鮮やかに残る。404以下は神宮寺式で、口縁部片の404と406はともに口縁外斜面に刻みを入れている。

ＳＫ20出土遺物（407）　口唇部に刻み、口縁外面に市松文を横回転させた大川式である。

ＳＫ21出土遺物（408～410）　いずれも市松文を施した胴部片であるが、408は印刻された粒が縦長方形状を示すのに対し、409や410は粒の角が取れた形状を示す。この差異は、時間差を示す可能性がある。

ＳＫ23出土遺物（411～415）　細いネガ楕円文を施した胴部片415が神宮寺式である以外、市松文を施している。411はさらに縄の回転も加えられている。また、412は、配置自体は市松状であるが、印刻された粒自体はネガ楕円形状を示す。

ＳＫ24出土遺物（416～423）　416～420は大川式、421～423は神宮寺式にほぼ比定しえよう。口縁部片である416は、口縁部の屈曲が弱く、口頸部の長大化の


318
320
321
322
319
SK3
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
SK4
337
338
339
340
341
342
343
345
346
347
344
349
350
348
352
353
354
351
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
SK5
367
368
369
0
10cm
370
SK6
371
372
SK7
373
374
375
SK9
376
377
378
382
379
380
381
SK10
383

第15図　出土遺物(5)

特徴を示している。

ＳＫ25出土遺物（424～425）　ともに大川式の小片で、原体こそ異なるが胴部に市松文が施されている。

ＳＫ26出土遺物（426）　頸部に円棒状刺突を施した大川式である。

ＳＫ27出土遺物（427）　大振りの山形文を横回転させた土器である。

ＳＫ28出土遺物（428～429）　428は薄手の器壁に正格子文を縦回転させた口縁部片、429も横長の細かい格子文を縦回転させた胴部片で、ともに神宮寺式である。

ＳＫ29出土遺物（430～431）　ともに浅めの正格子文で、神宮寺式であろう。

ＳＫ30出土遺物（432～433）　ともに胴部片であるが、432は市松文を縦回転させた大川式、433は横長の細かい格子文を縦回転させた神宮寺式である。

ＳＫ31出土遺物（434～444）　434～437は大川式、438～442は神宮寺式である。434は、縦長のネガ楕円文を口縁外面に横回転させている。436は円棒状刺突を施した頸部片で、煤が付着している。

ＳＫ32出土遺物（445）　やや崩れているが、市松文を施した大川式の胴部片であろう。

ＳＫ33出土遺物（446～447）　446は大川式、447は神宮寺式の施文深度の極めて浅い格子文であろう。

ＳＫ35出土遺物（448）　正格子文を縦回転させた胴部片で、神宮寺式に含まれよう。

ＳＫ39出土遺物（452）　角の比較的整った市松文の縦回転で、施文が深い。大鼻式ないしは大川式の古い段階の胴部片であろう。

ＳＫ40出土遺物（453）　やや小粒の正格子文である。神宮寺式に含まれよう。

ＳＫ41出土遺物（454）　市松文を立て回転させた胴部片で、大川式に含まれようか。

ＳＫ42出土遺物（455）　細かいネガ楕円文の胴部片である。神宮寺式であろう。

ＳＫ43出土遺物（456）　ネガ楕円文を格子状に配した底部に近い胴部片である。神宮寺式であろう。

ＳＫ44出土遺物（457）　器壁が薄く、小粒の正格子文を疎らに配した押型文である。神宮寺式に含まれよう。

ＳＫ46出土遺物（458）　市松ないしは格子文で、厳密な時期比定はやや難しい。

ＳＫ47出土遺物（459）　薄い器壁で、ネガ楕円文ないしは格子文を縦施文した神宮寺式である。

ＳＫ48出土遺物（460～461）　460は口縁外面に格子文の横回転、頸部にヘラ状工具による刺突を一段施した大川式、461は口縁部が外反することなくネガ楕円文を縦に引き下ろした神宮寺式である。

ＳＫ49出土遺物（462）　浅いネガ楕円文？を施した口縁部片で、神宮寺式であろう。

２　黒色土（７層・黒褐色砂質土）出土縄文土器（463～924）

463～487は、小片のため確定しえないものも含むが、基本的に口頸部に縄の回転や側面圧痕、先端刺突などを多用した大鼻式である。このうち、463～465は、口唇に縄回転、口縁外面と頸部に縄の側面圧痕を施している。466は、口唇と短い口縁部の外面を縄回転とし、頸部に縄側面圧痕を施している。468と469は、やや浅めの器形を呈するもので、468は口唇に縄回転、口縁外面から頸部にかけて縄刺突を羽状に配し、胴部に市松押型文を縦回転する。469は、口唇と口縁外面をともに単節Ｌとし、頸部に原体不明の縄を刺突してさらにその下部にも縄を羽状に回転させている。

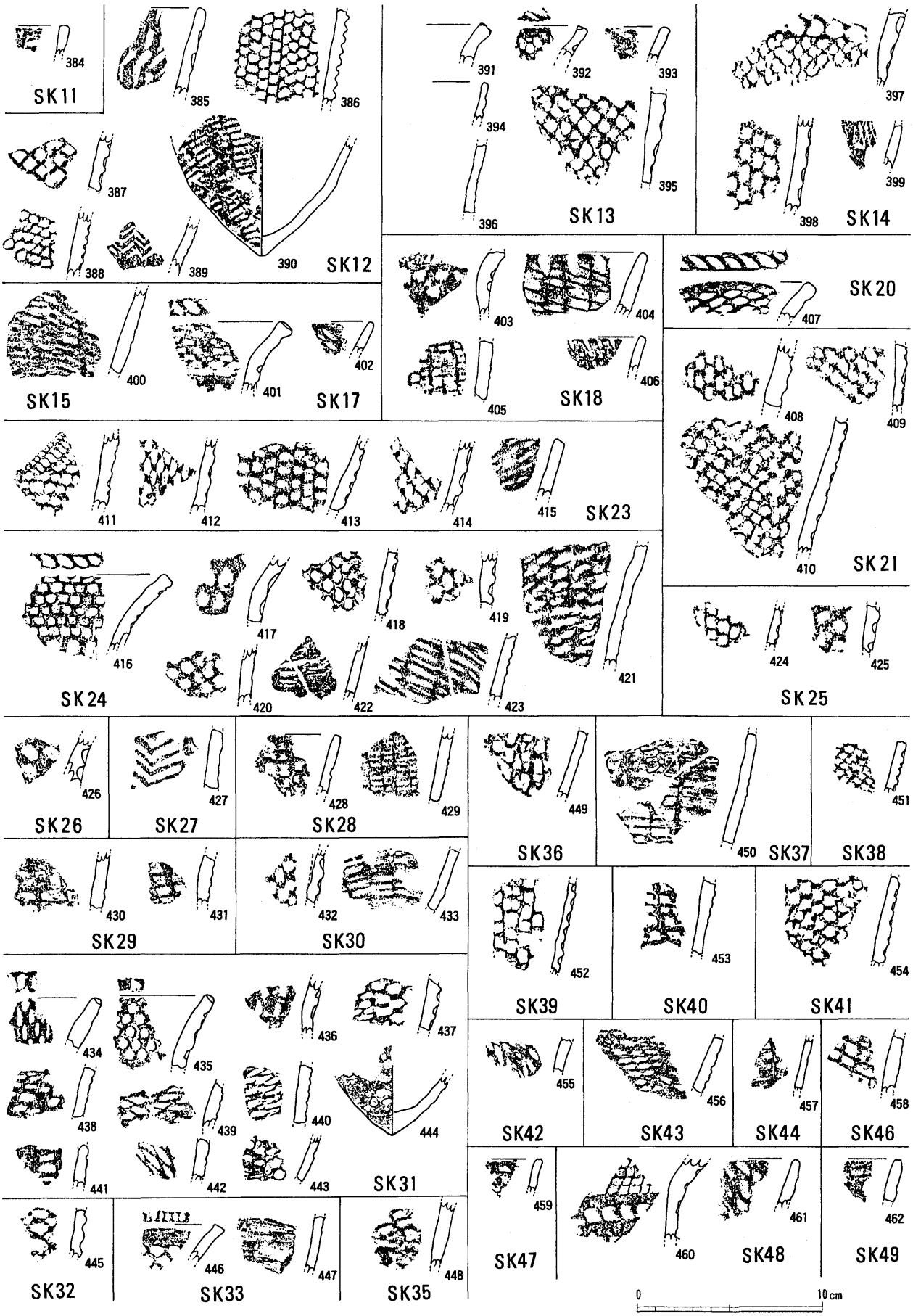
488～491は撚糸文土器である。いずれも、縦方向に密接施文する。

492～503は、口唇部に縄を回転させるが、口縁外面には市松押型文を横回転させた、縄と押型文併用の一群である。大鼻式から大川式への移行期に相当しよう。

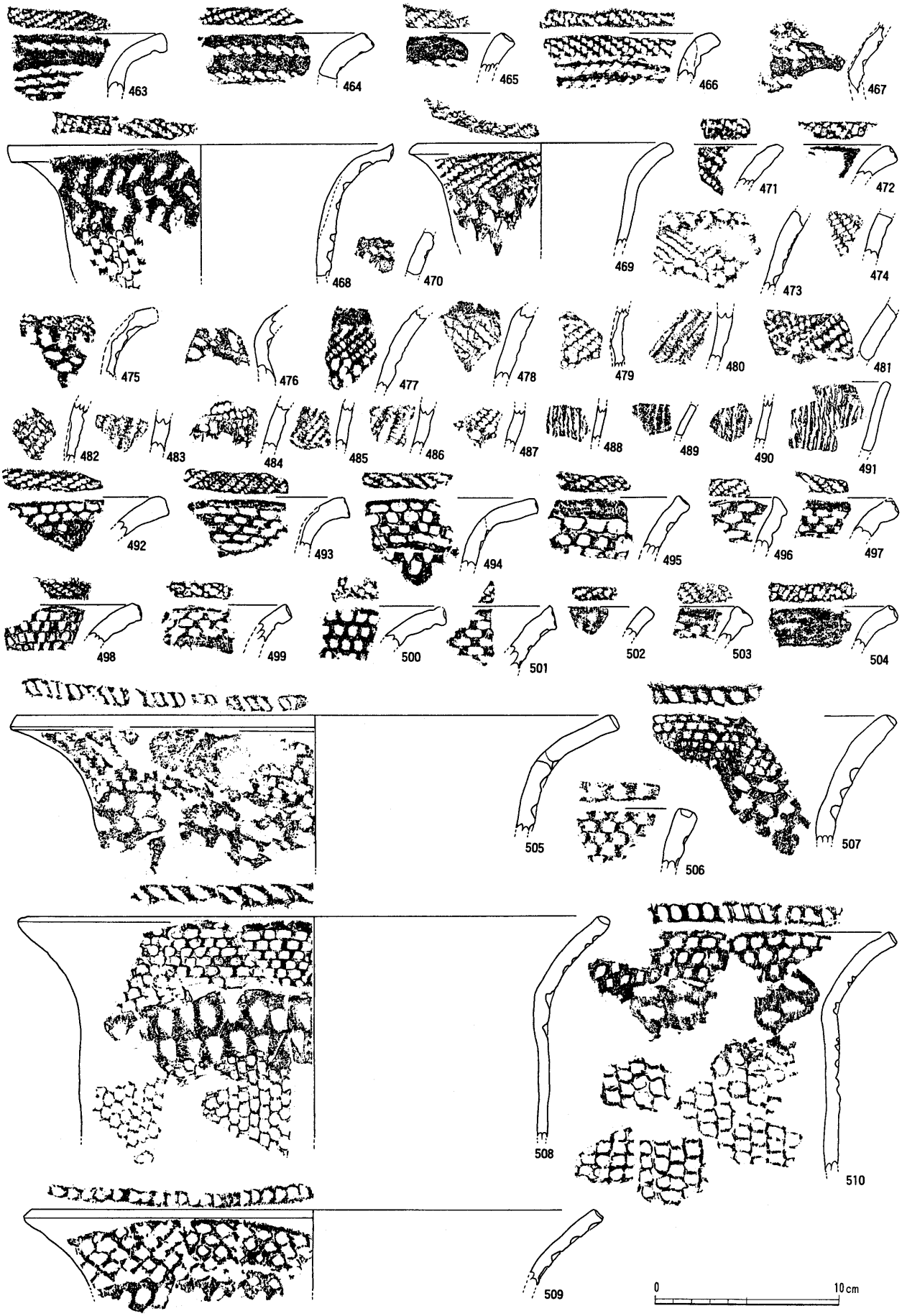
504は、口唇部に縄を回転させるが、口縁外面には市松文をナデ消した痕跡がある。

505～566は、口唇部に円棒状具ないしはヘラ状工具による刻みを施したり、山形文等の押型文を施した大川式土器である。口縁部の屈曲が大きく、かつ口縁部長の短いものが相対的に古相で、屈曲が弱く、かつ口縁部長の長いものが新相を示すことが既に指摘されており、前者は円棒状具、後者がヘラ状工具（口唇への施文は527などが典型）とより調和的となる。押型原体は、円形なししは角が取れてやや丸みを帯びた市松文や斜格子文、それに511のように丸みを持った縦長菱形文を市松風に配するものなどが主体で、552や559のような山形文をもつものは少ない。

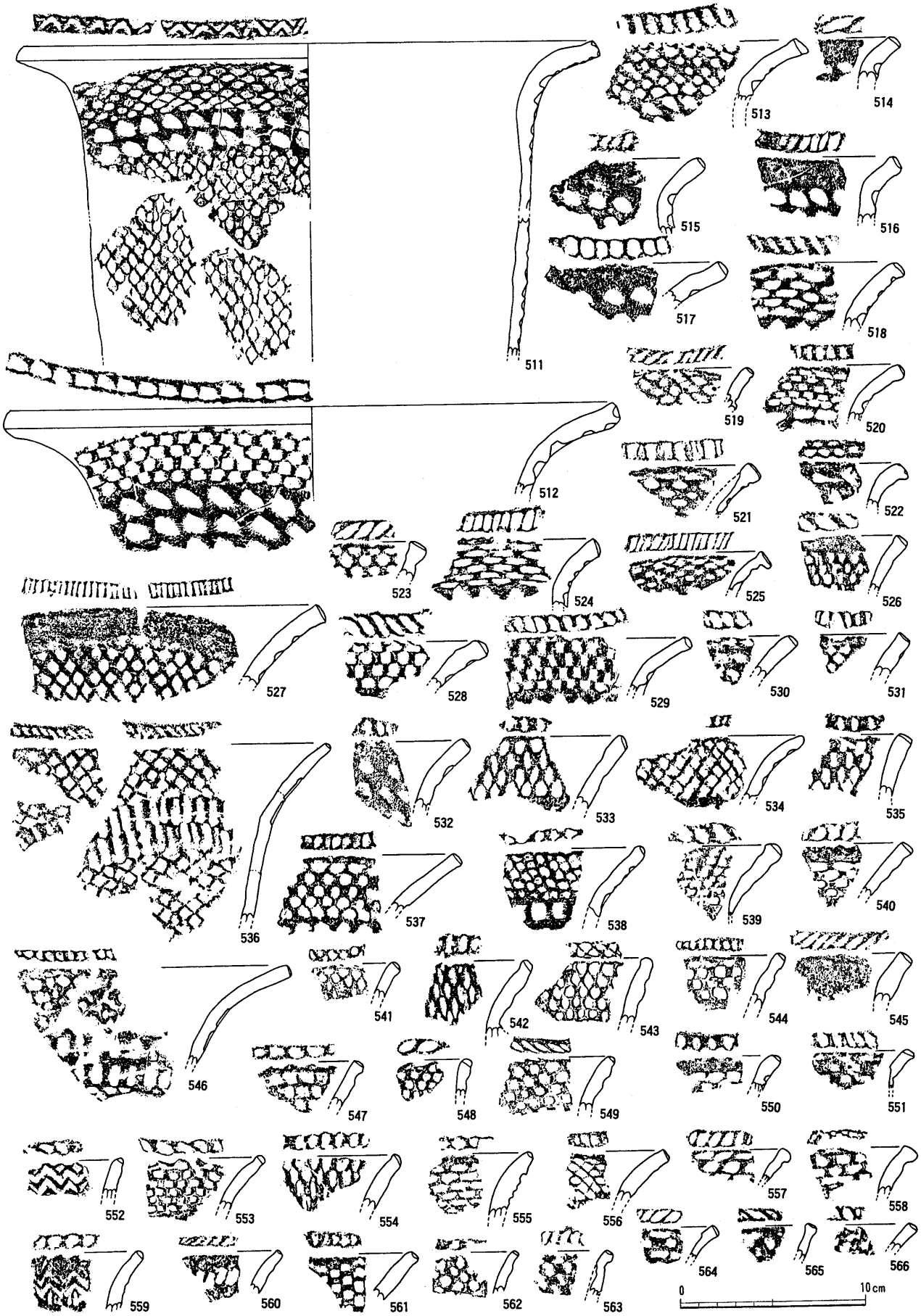
567～607は、大川式の口唇部は欠損するものの、口


SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK17
SK18
SK20
SK21
SK23
SK24
SK25
SK26
SK27
SK28
SK29
SK30
SK31
SK32
SK33
SK35
SK36
SK37
SK38
SK39
SK40
SK41
SK42
SK43
SK44
SK46
SK47
SK48
SK49
0
10cm

第16図　出土遺物(6)


463
464
465
466
467
468
470
469
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
510
509
0
10cm

第17図　出土遺物(7)


511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
0
10cm

第18図　出土遺物(8)

縁外面もしくは頸部を含む破片を一括した。このうち、569～571、574～577などは、円棒状具を右下から左上方へ突き上げた刺突列を頸部文様帯とし、一方、589～591などはヘラ状工具の刻みによる頸部文様帯をもつ。また、605～607は、小振りで振幅の少ない山形文を用いている。

608～690は、市松文や大振りの正格子文、斜格子文を縦回転した胴部片で、多くが大川式に含まれるものとみられる。市松状に配するものでも、大鼻式に多い施文深度が深くて角のあまり取れていない印刻をもつもの（例えば608や620など）から、個々の印刻粒自体は縦長のネガ楕円形状を示す569～669など多様性がある。

691は、市松文が施された底部破片で、大鼻式もしくは大川式に相当しよう。

692～742は、神宮寺式（一部その後続型式を含む可能性あり）の口縁部破片である。このうち、699～711、716などは口縁外斜面に刻みを施すもので、無いものに比べて相対的に古相を示していよう。699のように、口縁部から直に押型文を縦回転させるものが一般的だが、712のように横方向に回転させるものもある。また、726や740は施文間隔が疎らな小粒のネガ楕円文を施している。

743～790は、ネガ楕円文による押型文を施した神宮寺式の胴部破片である。押型原体の多様性を示すため、バリエーションを意識して配列した。このうち、746～748などは、印刻が小粒かつ施文間隔疎らな一群である。

791～870は、神宮寺式（一部その後続型式含む可能性あり）でも口縁部から底部へ縦回転される正格子文や斜格子文を中心に配置した。791～795は正格子文を施した口縁部片、827～836は斜格子文や横長で細い正格子文を施した口縁部片である。いずれも口縁部が外反することなく、底部に向かって砲弾状に窄まっていく。なお、870は、正格子文を内外面に施文している。

871～891は、神宮寺式及びそれ以降の山形文をもつ押型文土器で、うち871～873は口縁部片である。871は、口唇部と口縁外面に山形文を施した土器で、口唇施文ということでは大川式と共通するが、口縁部が縦施文であることからここに措定した。いずれにせよ、ややイレギュラーな土器で、ここにレイアウトするのは適当でないかもしれない。887～888は、口縁内面を横方向、外面を縦に施文するもので、波長の低い小振りの山形原体に特徴がある。一方、884は、波長が大きく深い施文をもつ。

892～909は、長大なネガ楕円文個々の境界が不明瞭となり、結果として平行沈文的な様相をもつに至ったものを一括した。口縁部は892のように尖ったり、893のようにやや角頭状を呈したりと規範性に欠ける。全体に、器壁の厚いものが多い。縦施文が一般的であり、908や909は土器の配置方向が異なるかもしれない。906は、上記とは原体の様相が異なるが、横長のネガ楕円文から派生した可能性を重視し、一括した。

910～911は、底部片である。911は大川式の新しい段階のものの可能性もあるが、他は神宮寺式に含まれようか。

3　包含層等出土縄文土器（925～985）

6層以上に包含されていたものと、表土や攪乱、中世以降のピット等に含まれていた縄文土器を一括したうえで、口縁部破片の代表的なものと特徴的なものを抽出し、配置した。

925～930は、口唇部と口縁外面、それに頸部に縄を多用するもので、大鼻式に含まれる一群である。

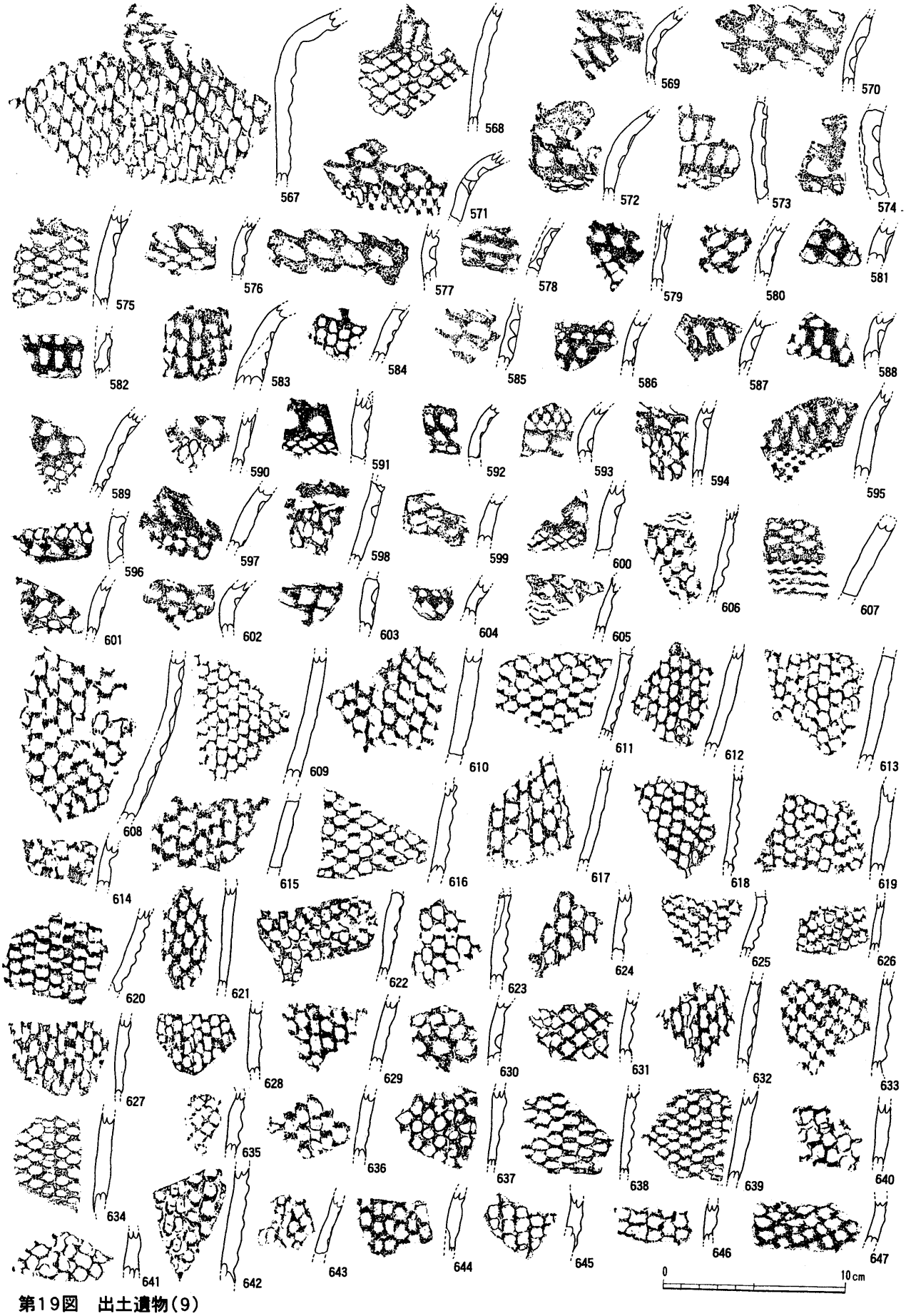
931～933は、口唇部もしくは頸部に縄を使用し、押型文と口縁部の施文を共有するものである。このうち、931は口唇部は円棒状具によるが、頸部に縄の刺突を施している。932と933は、ともに口唇部への縄回転である。縄を含んでいるとはいえ、口縁部の形状は大鼻式というより大川式に類似する。

934～953は大川式の口縁部片、954～956は頸部片である。このうち、954は頸部にヘラ状具による刻みを四段にわたって施すもので、頸部文様帯が非常に発達した状態を示す。

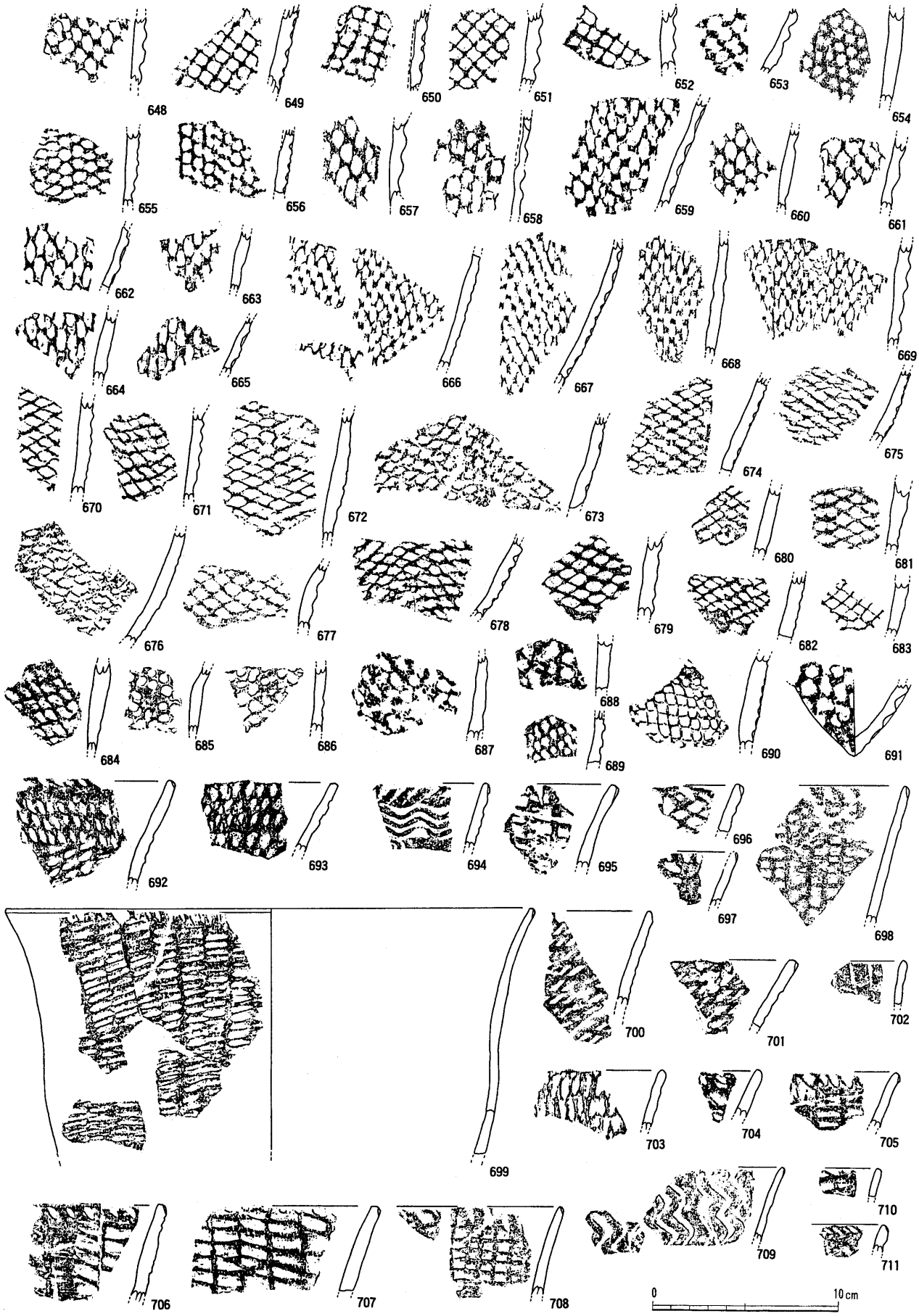
957～970・972は、神宮寺式の口縁部片である。このうち、972は正格子文を内外施文するもので、口唇部は欠損するが971も同じ特徴をもつ。

973～974は、細い沈線が格子状に交差するような押型文で、ポジティブ楕円文胎動の一端を示すものであろう。

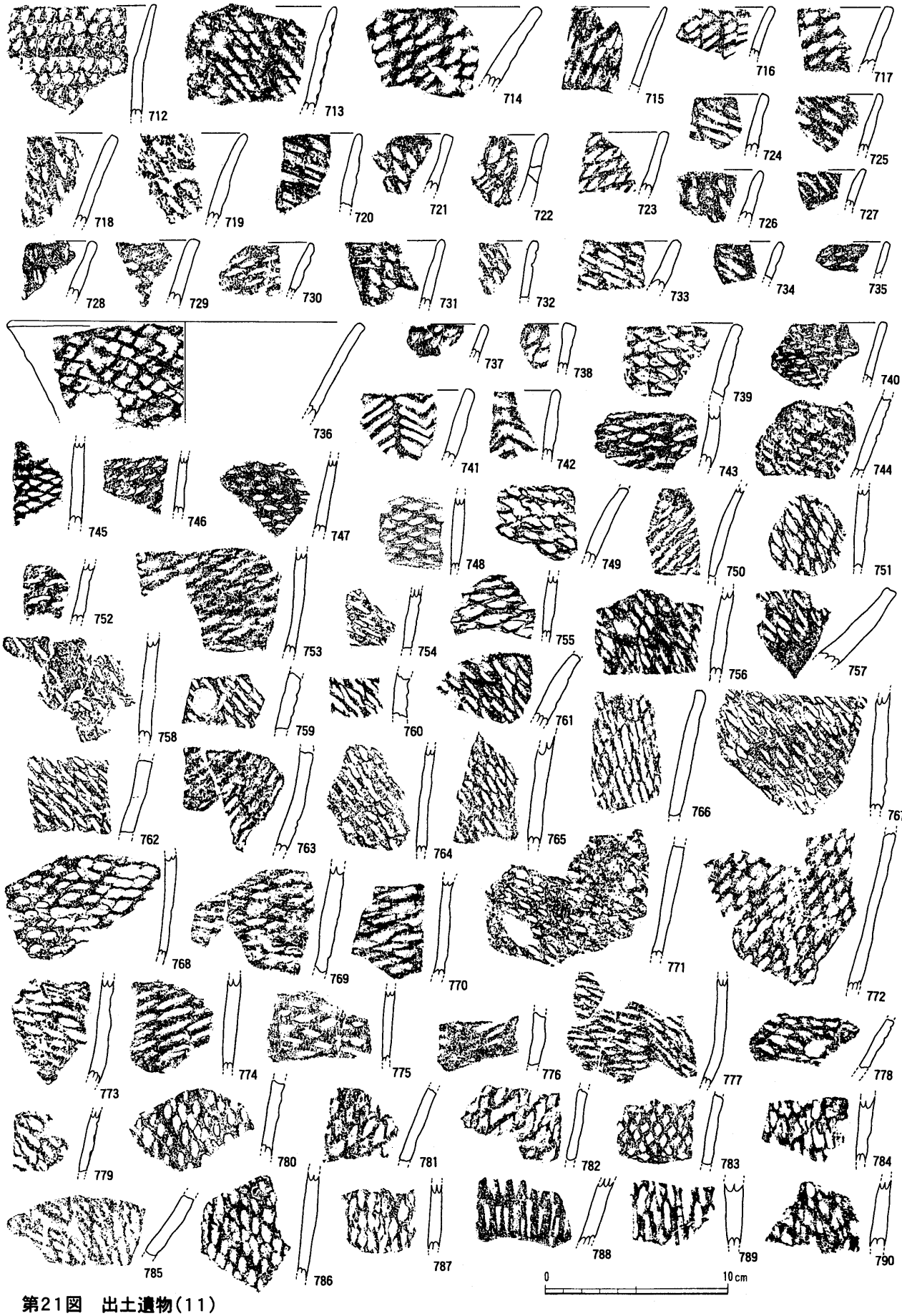
975～980は、低い山形文を施文したものであるが、やや大形の破片である975～977は異方向密接施文の特徴も示す。


567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
0
10cm

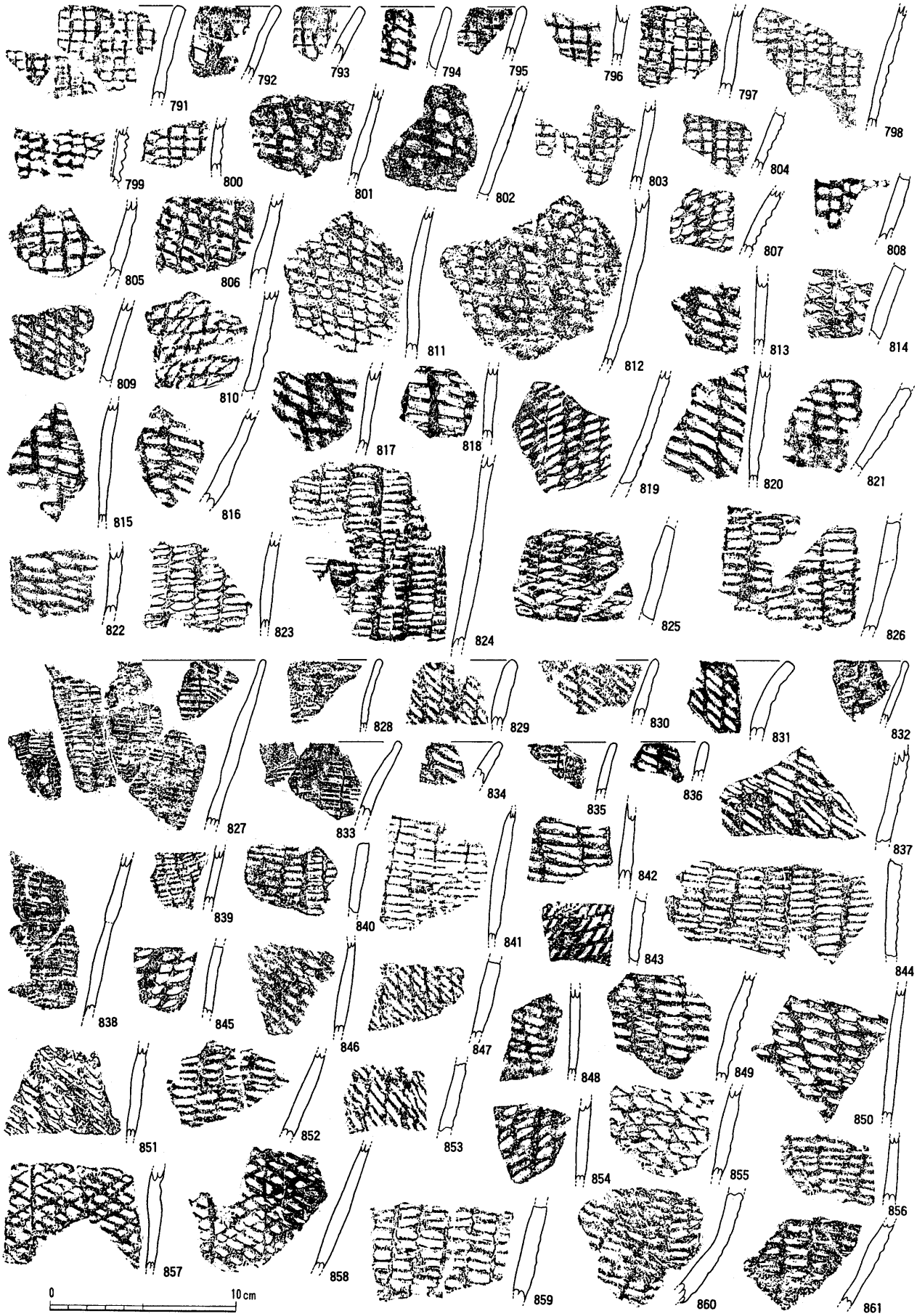
第19図　出土遺物(9)


648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
0
10cm

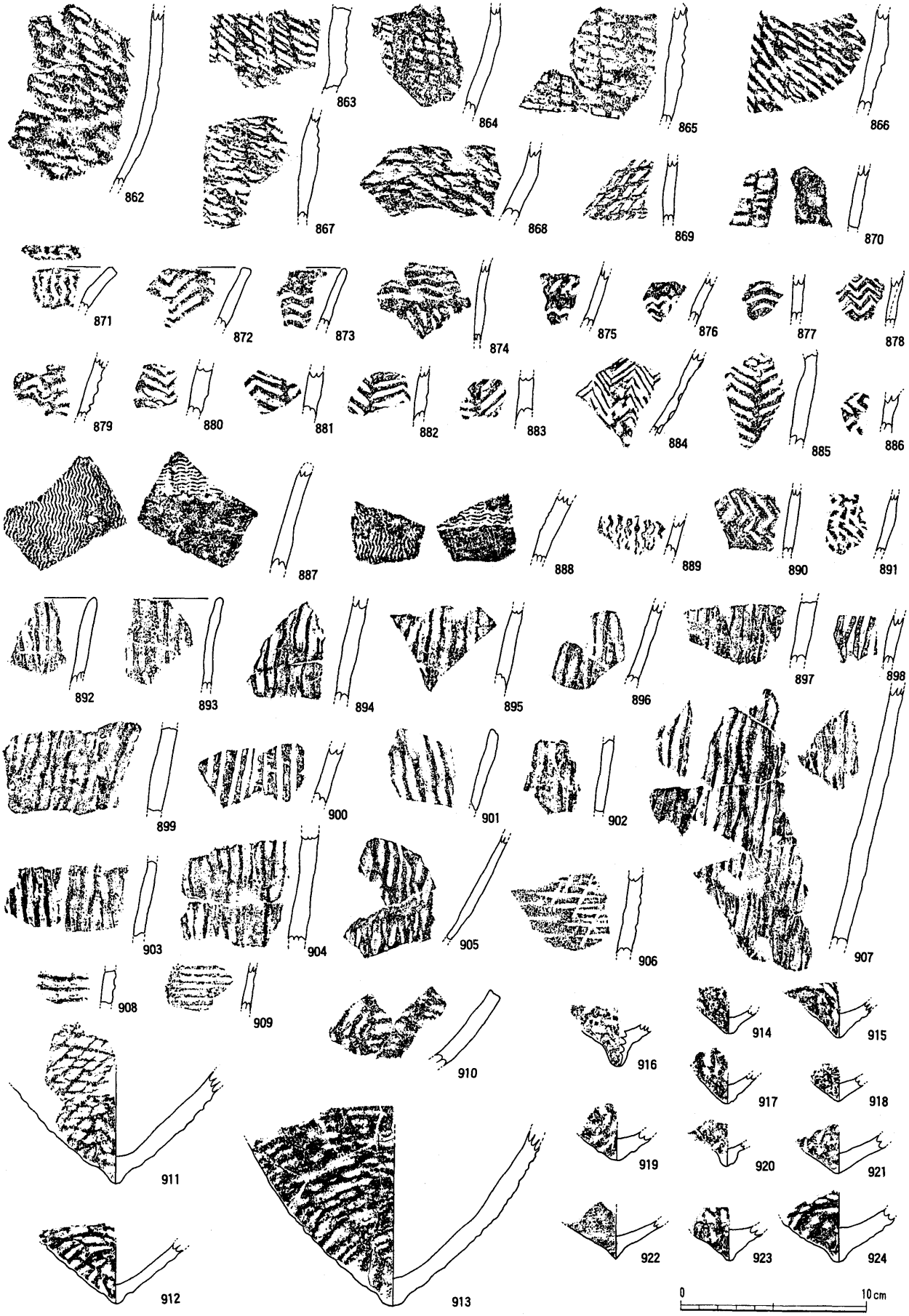
第20図　出土遺物(10)


712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
0
10cm

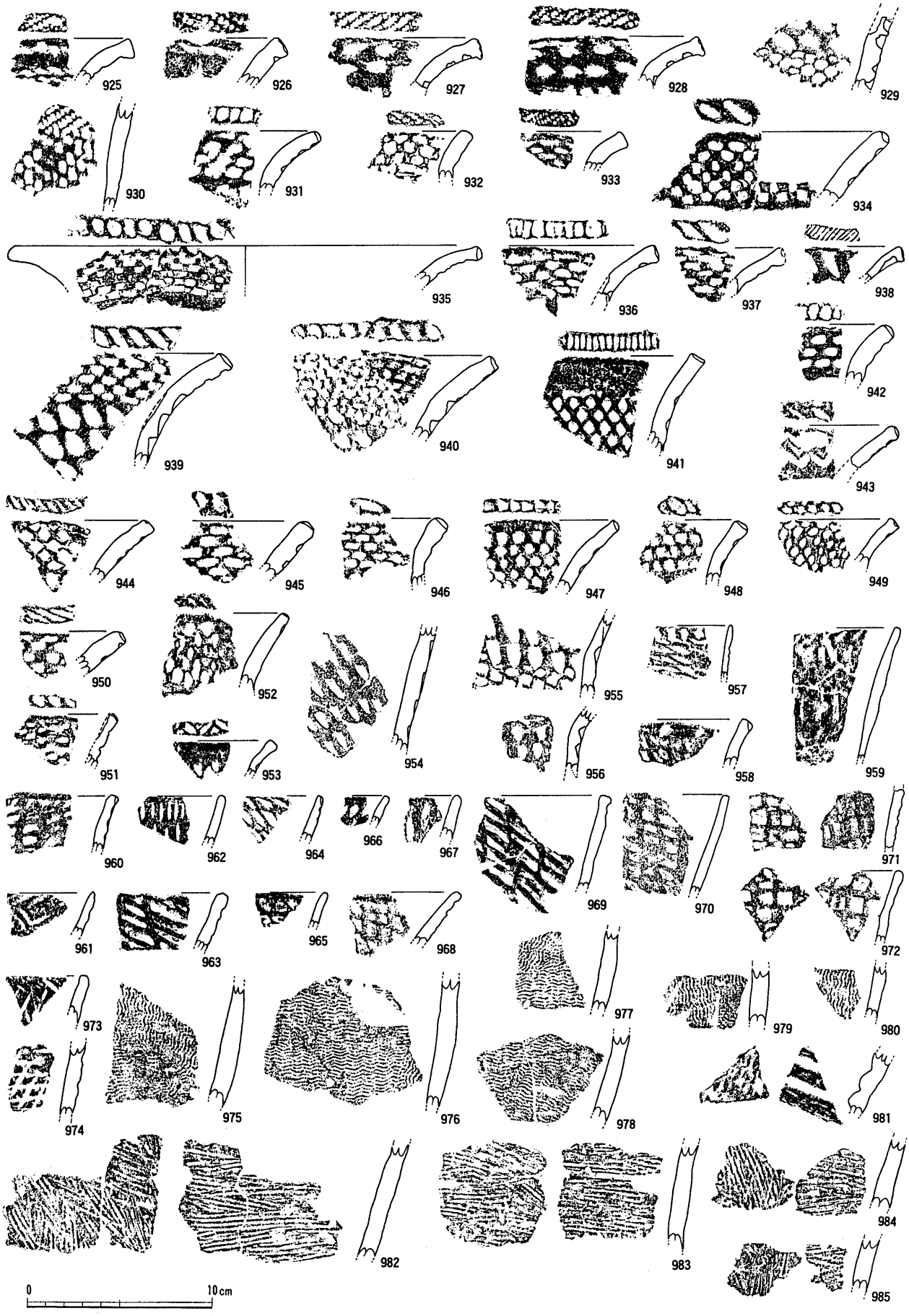
第21図　出土遺物(11)


791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
841
842
843
844
845
846
847
848
849
850
851
852
853
854
855
856
857
858
859
860
861
0
10cm

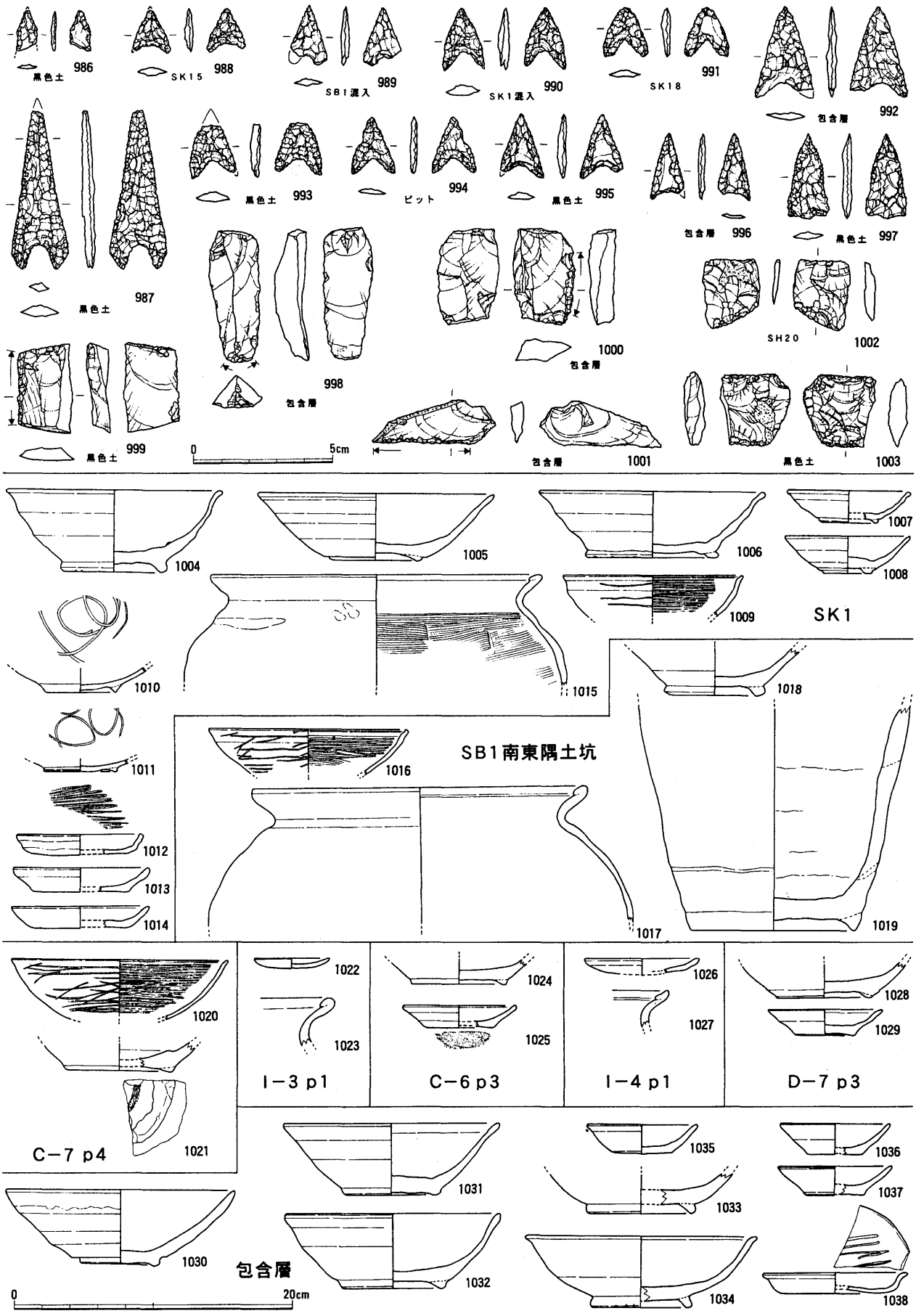
第22図　出土遺物(12)


862
863
864
865
866
867
868
869
870
871
872
873
874
875
876
877
878
879
880
881
882
883
884
885
886
887
888
889
890
891
892
893
894
895
896
897
898
899
900
901
902
903
904
905
906
907
908
909
910
911
912
913
914
915
916
917
918
919
920
921
922
923
924
0
10cm

第23図　出土遺物(13)


925
926
927
928
929
930
931
932
933
934
935
936
937
938
939
940
941
942
943
944
945
946
947
948
949
950
951
952
953
954
955
956
957
958
959
960
962
964
966
967
969
970
971
961
963
965
968
972
973
974
975
976
977
978
979
980
981
982
983
984
985
0
10cm

第24図　出土遺物(14)


黒色土
986
SK15
988
SB1混入
989
SK1混入
990
SK18
991
包含層
992
黒色土
993
ピット
994
黒色土
995
包含層
996
黒色土
997
987
黒色土
998
包含層
1000
包含層
SH20
1002
999
黒色土
0
5cm
包含層
1001
黒色土
1003
1004
1005
1006
1007
1008
1009
SK1
1010
1015
1018
SB1南東隅土坑
1011
1016
1012
1013
1014
1017
1019
1020
1022
1024
1026
1028
1023
1025
1027
1029
I−3 p1
C−6 p3
I−4 p1
D−7 p3
C−7 p4
1021
1031
1035
1036
1037
1030
包含層
1032
1033
1034
1038
0
20cm

第25図　出土遺物(15)

981は、内面に斜行沈線を施した高山寺式土器である。

982～985は、内外に二枚貝条痕を施したもので、相期末に比定できよう。

4　石器（986～1003）

石器に関しては、整理期間内で全体像を示すことができず、出土した石器のごく一部を抽出して掲載したにとどまる。西出遺跡出土石器に関する最終的な整理・報告に関しては、他日を期したい。

以下、器種別に簡単に解説を加える。

986～997は石鏃である。997がわずかに茎部を作出しているが、他はすべて無茎である。986は大鼻・大川式に共伴する長五角鏃の破片。987は身が著しく長く、脚部が丸みをを帯びる。飯南町足ヶ瀬遺跡[4]出土の円脚鏃の一群に類似する。990・991・993は両側縁が緩く張り、先端・脚部が鋭く尖る。992・995・996は二等辺三角形を呈し、神宮寺式との関連が強い。これらは先端部をさらに鋭く尖らせ、992・996・997の両側縁は鋸歯状をなす。989が下呂石の他は、すべてサヌカイト製である。

998は掻器である。縦長剥片の先端部を急角度に調整し、刃部を形成する。チャート製。

999～1001は削器である。999・1000は縦長剥片で、1001は寸詰まりの剥片の一辺にそれぞれ細かく二次調整を施している。いずれもサヌカイト製である。

1002～1003は楔形石器である。方形の剥片の上下二辺に集中的に調整痕が認められる。

5　中世遺物

ＳＫ１出土遺物（1004～1014）　山茶椀(1004～1006)・山皿(1007～1008)・瓦器椀(1009～1011)・山皿(1012)・土師器皿(1013～1014)・土師器鍋(1015)がある。山茶椀と瓦器、それに土師器の皿・鍋が共伴する良好な資料である。

ＳＢ１出土遺物（1016～1019）　すべて南東隅土坑からの出土である。瓦器椀(1016)・土師器鍋(1017)・山茶椀(1018)・陶器(1019)がある。鎌倉時代に属する。

ピット出土遺物（1020～1029）　個々の解説はしないが、それぞれ掘立柱建物を構成しない単独のピットから出土した。

包含層出土遺物（1030～1038）　山茶椀(1030～1034)・山皿(1035～1036)・瓦器皿(1038)を図示した。このうち1030は範囲確認調査での出土である。（穂積）

4　まとめ

西出遺跡の調査は、縄文時代早期前半に遡る数多くの遺構・遺物、若干の中世前期の遺構・遺物を確認して終了した。最後に、調査で判明した事実と課題を記して、まとめとしたい。

1　縄文時代早期の遺構認定について

ａ　７層上面「遺構群」　西出遺跡では、当初、7層（現地調査時に「黒色土」として取り上げた部分）上面で遺構検出を試み、「竪穴」状や「土坑」状に見えた検出面の色調のまとまりを遺構として捉えて調査を進めた。しかし、確かにその部分ではベースとなる黒色土層中よりも相対的に遺物出土の多い部分もあったが、検出面としての色調変化は漸移的で、はなはだ遺構としての実態は極めて不安定なものであった（本報告では、一応、調査時の遺構番号を踏襲している）。そして、それら７層上面「遺構」から出土した土器は、時期的な一括性が全くなく、多様な時期の押型文土器が混在状態で出土しており、ベースたる「黒色土」層中（7層）にも全く同じ土器相を示していた。

ここに至って結論を出すと、７層上面「遺構」群は、人為的な遺構としては全く認定しえないものということが明らかである。従って、７層上面で検出したもののうち、中世遺構であるＳＫ１とＳＢ１を除くＳＺ１～ＳＺ５とＳＫ２～21は、人為的な遺構としての実態はないものとして結論したい。従って、７層上面で付与した遺構番号は、自然形成の染みないしは落ち込みとして理解し、そこから出土した遺物はあくまで有意のものではないことを確認しておく。

ｂ　８層上面縄文早期遺構　一方、地山となる８層上面の縄文早期遺構群は、確認数で竪穴住居21基・土坑（焼土坑含む）30基を数えた。

これらも、出土遺物としては７層上面「遺構」群同様、押型文土器の各段階が混在状況で出土するものが大半で、遺物の一括性のあるものではなかった。しかし、上層よりも遺構としての安定性は認められ、床面が焼けた焼土坑３基を含む土坑群や、明瞭に壁柱穴を伴う竪穴住居など亀山市大鼻遺跡の縄文早期遺構群に

も対比すべき遺構群が確認された。

もっとも、大鼻遺跡の遺構が安定した粘質土上に形成されて安定した遺構掘り込みをもつのに対し、地山自体が砂層である西出遺跡では遺構残存の条件の点で劣ることは否めない。そのため、個々のプランの把握に関しては非常に困難を伴い、ライン誤認や検出不能に伴う複数遺構の一括掘削などを犯していることも恐れる。しかも、大鼻遺跡がほぼ大鼻式の単純相を示すのに対して、西出遺跡では大鼻式から大川式、神宮寺式、さらに量は少ないが高山寺式など後半期押型文土器まで出土するなど存続時期の広さ、それに伴う遺物量の多さは大鼻遺跡の比ではない。当然、それに見合うだけの遺構数も存在するであろう。今回の調査では、7層（「黒色土」層）として包含層扱いで掘削した部分においても、本来は遺構重複が激しいことによって個々の遺構認定ができなかった可能性も考慮しなくてはならない。

以上のような遺構認定に関わる不確定要素は、現状での砂質土上形成の遺構調査の課題を示すものではある。しかし、それらのいわば「確認できなかった」遺構存在を今後の出土遺物の詳細な検討から詰めていくことと共に、今回提示した遺構が、今後の研究の進展によってより有意なものとなっていくよう検証作業を繰り返していく必要がある。

最後に、西出遺跡で示された遺構に関わる知見を箇条書きで確認しておく。

- 竪穴住居プランは、楕円形・正円に近いもの・隅丸とはいえやや角をもつらしいものなど多様性が認められる
- 焼土坑は竪穴住居と離れていたり、重複関係にはなるが、同時存在として竪穴住居内に明確に共存するものはない
- 一方で、浅い土坑状の施設を住居床面に掘り込んで形成したと思われる例（ＳＨ25等）はある
- 基本的には壁柱をもつものであるが、主柱穴をもつらしい例（ＳＨ10）も存在する

2　押型文土器について

西出遺跡から出土した押型文土器はこれまで三重県で確認された縄文早期遺跡のなかでは最大量である。このことは、西出遺跡の存続していた期間が、大鼻式から大川式、神宮寺式の時期を中心に、さらに確認量はごく僅かであるが高山寺式などの後半期押型文土器の時期まで及ぶためである。

今回、本報告においても、西出遺跡出土の押型文土器の実態がより伝わるよう、器形や文様のバリエーションに配慮しつつ、できる限りの掲載に努めた。今後の研究のための基礎資料となることを期待したい。

以下、ここでは詳細な土器の検討は行わないが、最後に若干の確認点を記すにとどめる。

三重県における前半期押型文土器の変遷過程は、山田猛氏によって詳細に検討され[5]、大鼻式－大川ａ式－大川ｂ式－神宮寺式へと至る序列が提示されている。ここでは、この型式観に従いつつ、西出遺跡出土資料の特徴を箇条書きで簡単に確認し、まとめに代えたい。

大鼻式について　大鼻式における縄使用のバリエーションの一端や、やや浅めの器形の存在が明らかとなった。黒色土出土の496など縄の実態を知る上で貴重な情報を提供していると評価しえよう。なお、西出遺跡では、大鼻遺跡でみられたような「表裏縄文」は確認できなかった。

大鼻式→大川ａ式への移行　口縁部と頸部に縄を多用しつつ、市松文等の押型文も併用するという大鼻式－大川ａ式移行期の資料（492～503など）が一定量確認できた。大鼻遺跡の大鼻式土器では、頸部から上部は基本的に縄を使用していることが判明しており、押型手法の定着と共に、縄の使用が減少していく過程を示すものとして、今後の型式内容の深化へ資する資料ということができよう。

大川式のバリエーション　大川ａ式を中心に、西出遺跡では豊富な大川式土器が出土している。これらは、器形・文様手法・頸部文様帯の実態など、今後の大川式の細分や型式内容の深化のための基礎資料となろう。また、大鼻式も含め、印刻された市松文の多様性は、一定程度の時期的な変遷の存在を予想させる。大きくは、方形→円形へと角がなくなっていく過程と捉えられようが、口縁部や頸部文様帯など器形との関連を詰めることによって、文様レベルでも型式内容深化の接近を図りうる資料として、注目しておきたい。

神宮寺式土器について　西出遺跡から出土した神宮寺式土器は、口縁外斜面の刻みを無くし、口縁部ヨコ・体部タテの押型文「Ｔ」字施文の原則も崩れて口縁部から底部までを一気に縦施文する、山田氏によっ

て神宮寺式でも新しいとされる一群が主体を占めており、今後、神宮寺式の型式内容を明らかにしていくうえでも重要な資料になるものと思われる。

また、ネガ楕円文や正・斜格子文の豊富な資料は、大鼻式－大川式での市松文同様、原体を復元し、文様レベルでも変遷過程を検討していく必要性を提起している。

神宮寺式後続型式への連続性　西出遺跡では、ネガティブな押型文ではあるが、神宮寺式の範疇に包含しきれない土器が少数ながら出土している（973～978など）。これらは、三重県内においてもさほど充実した資料が確認されているわけではなく、今後の調査に注意を喚しておきたい。

3　土器型式にみる集落の盛衰

前述のように、西出遺跡の遺構（8層上面のもの）は、重複などによると考えられる土器型式の混在が多く、遺構の時期の確定は難しいものが多かった。そのため、集落の盛衰を単純に追うには、時期別（型式別）の出土量の多寡にある程度は表出されていると考えられる（もちろん、調査範囲外の情報がないためある程度の目安にすぎない）。

定量的な分析を行ったわけではないが、大鼻遺跡では、大川ａ式が最も多く、ついで神宮寺式（新しい様相）が続く。土器型式からみた場合、西出遺跡は大鼻式の段階に出現し、次の大川ａ式期で一気に最盛期を迎え、大川ｂ式から神宮寺式の古い段階はやや衰えるものの、神宮寺式の新段階で再び活況を呈する、という変遷を辿れる。

ただし、調査区外に遺構の存在が予想されるとはいえ、西出遺跡の現況の出土量をもってして、「大規模な定住集落」とまでは評価することは難しい。１住居単位で保有した土器量がどれほどのもので、またそのうちのどれだけが現在まで遺存していたかを見極めることが難しいからである。むしろ、ここでは、ほど同一地点において、大鼻式から神宮寺式、さらにそれ以降の資料まで、一定期間、連続して確認できることこそ重視しておきたい。少なくとも、土器型式上では、型式によって資料の増減はありつつも、ほぼ絶えることなく大鼻式から神宮寺式の新段階までは存在する。

この時期の遺跡には、存続時期幅が限定される遺跡が多いなか、ほぼ押型文土器の前半期を通して存続する西出遺跡は、縄文時代早期の本地域においてはやや特異なあり方を示す集落であったということがいえるのではなかろうか。

以上のように、西出遺跡の調査は多くの成果のみならず、多くの課題も提起している。出土石器の全貌の紹介も含めて今回提示しきれなかった課題も多いが、本書によって、当地域の縄文時代早期の諸問題が少しでも明らかになることを期待したい。　（穂積）

註

(1)　以下、大鼻遺跡についての所見は、下記文献による。梅澤裕・山田猛『一般国道１号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅲ　大鼻（二～三次）・山城（三次）遺跡』三重県教育委員会　1987

(2)　大鼻遺跡でも確認されているが、より良好なものが多気郡多気町坂倉遺跡で確認されている。1974年三重県教育委員会調査

(3)　以下、押型文土器の編年観は、下記文献に従った。ただし、本書記述の同定や記述は筆者に責がある。山田猛「押型文土器群の型式学的再検討－三重県下の前半期を中心として－」『三重県史研究』第４号　三重県　1988

(4)　奥義次「原始」『飯南町史』飯南町史編さん委員会　1984、なお、西出遺跡出土石器に関しては、奥義次氏の全面的なご教示を得た。

(5)　前掲註(3)文献に同じ

遺構名	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	備考	遺構名	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	備考
SZ1	4.15	3.23	−	7面上面・遺構実体なし	SK13	(2.5)	2.7		7面上面・遺構実体なし
2	3.60	2.90	−	〃	14	(1.3)	1.3	−	〃
3	3.55	3.20	−	〃	15	(1.7)	2.7	−	〃
4	4.05	3.30	−	〃	16	欠番			〃
5	4.10	(3.10)	−	〃	17	(3.2)	(0.9)	−	〃
SH6	4.30	3.20	12	SH6→SK22	18	(3.4)	(1.6)	−	〃
7				重複のため規模不明、SH7→SH6	19	欠番			〃
8				重複のため規模不明、SH8→SH6	20	(1.5)	(1.0)	−	〃
9	3.30	3.10	14	SH9→SK6・7、SK23・24	21	(1.3)	3.0	−	〃
10	(2.90)	2.66	6	プラン外周に柱穴群、SH10→SH6・7	22	1.5	0.8	13	焼土坑
11	3.10	2.90	22	SK44と切り合い不明	23	(1.0)	0.7	10	
12	2.80	2.60	13	SH11と切り合い不明	24	1.2	0.8	23	
13	(1.40)	2.80	6	壁柱穴明瞭	25	不明	不明	不明	SH19に重複
14	欠番				26	0.9	0.8	22	
15	3.00	2.90	11	SH26→SH15	27	0.9	0.5	18	
16	2.90	2.70	13	SH16→SK28・41・47	28	1.0	1.0	15	SK41→28→46
17	2.80	2.50	13	SH17→SH16	29	0.9	0.7	14	
18	3.00	2.20	16	SH17との切り合い不明	30	1.2	0.9	15	
19	2.90	(1.90)	9	SH19→SK27	31	1.2	0.9	27	
20	(2.20)	(2.30)	13	壁柱穴	32	0.9	0.8	13	SK32→SK33
21	(2.20)	(2.00)	6	一部残	33	(1.2)	1.0	15	
22	3.00	(1.50)	9	一部残	34	0.7	0.4	29	
23	3.20	(1.50)	13		35	0.6	0.6	22	SH18→SK35
24	3.20	2.50	10	床面に土坑状	36	0.9	0.7	14	SH18に重複
25	3.60	2.90	8	壁柱穴明瞭	37	0.7	0.5	31	
26	(2.00)	2.10	11	壁柱穴明瞭	38	0.5	0.3	19	
27	(1.60)	2.00	6	プラン外周に柱穴群？	39	0.6	0.5	12	
SK1	4.0	2.2		中世遺構	40				SH16にほとんど重複
2	(3.8)	(1.5)		7面上面・遺構実体なし	41	(1.0)	0.4	9	
3	(1.8)	1.9		〃	42	0.7	0.7	15	SK43との切り合い不明
4	(3.1)	(1.8)		〃	43	1.0	1.1	16	
5	(3.2)	(0.8)		〃	44	0.8	0.5	21	
6	(2.2)	(1.2)		〃	45	0.9	0.5	32	
7	1.5	0.6		〃	46	0.3	0.3	18	
8	1.0	0.8		〃	47	0.5	0.4	19	
9	2.0	1.5		〃	48	1.6	0.9	17	
10	(3.2)	2.8		〃	49	0.9	0.7	10	
11	(3.1)	(2.5)		〃	50	(0.3)	0.5	7	焼土坑
12	(3.0)	(2.3)		〃	51	1.8	1.3	15	焼土坑

第1表　西出遺跡遺構計測表

Ⅱ　一志郡嬉野町　井之広遺跡

1．　位置と環境

歴史的環境

中勢地域を代表する河川である雲出川の支流、中村川は、高須ノ峰に端を発し、嬉野町井之上で伊勢平野の穀倉地帯へ流れ出る。この中村川は、山間部の谷筋を流れる間、蛇行を繰り返し、結果として河岸段丘と沖積低地を形成した。このうち沖積低地は、谷筋という制約もあって決して広くはないが、これら沖積低地や河岸段丘上には縄文時代以来、多くの遺跡が形成されることとなった。

このうち、縄文時代の遺跡には、代表的なものとして上流から下沖遺跡(3)、東野Ｂ遺跡(5)、天白遺跡(6)、弥五郎垣内遺跡(7)、前期の拠点遺跡と目される[(1)]井之上遺跡(8)があり、さらに中村川へ流れ込む古田川に沿う遺跡として釜生田遺跡(2)と今回報告する井之広遺跡(1)がある。これら遺跡は、多くが早期と中後期に時期的な主体を置き、谷筋を転々と移動しながら集落形成を行った様子が窺える。

一方、平野側の沖積部でも縄文時代の遺跡は認められ、代表的なものとして、当地としては比較的珍しい中期中葉の土器が多数出土した針箱遺跡(19)や中後期の堀之内遺跡(14)などを挙げることができる。

弥生時代になると、遺跡形成の中心は谷筋から平野側へ移るが、それでも蛇行する中村川の流路防御面側の小さな沖積低地を利用した中期集落の存在がいくつか知られている。

古墳時代になると、嬉野町域は天花寺丘陵を中心に、前期の前方後方墳をはじめとして、多数の有力古墳が多数営まれる地域として伊勢でも特異な地位を占める。中村川流域の狭隘部でも、前中期古墳こそ見られないものの、後期の群集墳は活発に形成される。特に、釜生田古墳群として把握される古墳時代後期の群集墳は、短い羨道と幅広の玄室、持ち送りの強い天井によって特徴づけられる個性の強い横穴式石室を内部主体とし、極めて注目されている。

古代に入ると、本地域は天花寺廃寺や上野廃寺など伊勢でも古代寺院の建立密度の濃い地域として注目される。そして、中村川流域の狭隘部では、中村川に迫る丘陵を利用して、辻垣内瓦窯跡群が営まれた。この瓦窯からは、日本最大の鴟尾が出土し、供給予定先は不明ながら、本地域における寺院群の格式の一端を示すものとなった。

このように、中村川流域地域は縄文時代以来、多数の遺跡が営まれ、井之広遺跡を包含する谷筋の狭隘部においても古来より特徴ある遺跡や古墳が時代を超えて多数営まれたことは注目に値しよう。

遺跡立地と周辺地形

井之広遺跡は、かつて「鹿伏遺跡」として呼称されていた遺跡で、標高33～34m程度の低い台地上に立地する。この台地は、西・南・東の三方を小河川である古田川に囲まれ、北側はそのまま緩やかに高くなった後、北側丘陵部に取り込まれていく。つまり、井之広遺跡は、北側丘陵から続く台地上に立地し、開けた南側に小河川を臨む。そして、今回のほ場整備によって地形が改変される以前は、西北側から東南に向かって緩やかに低くなっていく地形を呈していた。南に開けたこうした立地は、特に縄文時代の集落としてまことにふさわしいあり方を示すものといえよう。

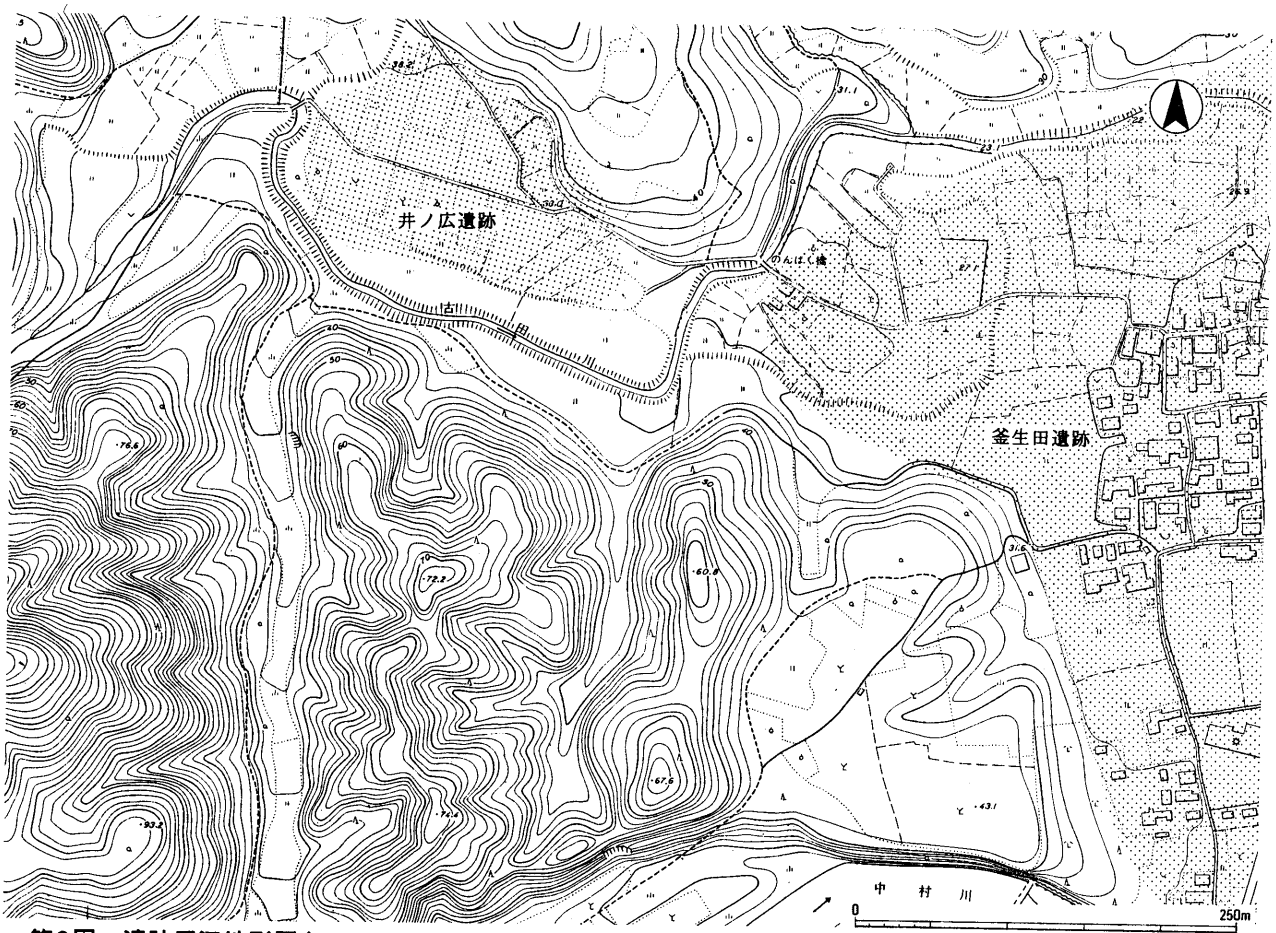
さて、古田川は、この台地を長方形状に回り込むように東側へ流れ、釜生田遺跡脇を通り抜けた後、中村川に合流する。井之広遺跡から中村川までは、直線距離で800m程である。これは、東野Ｂ遺跡や天白遺跡など中村川に面する遺跡に比べれば、やや奥まった位置に立地していることになる。そういう意味では、井之広遺跡の場合、古田川、ひいては中村川という河川の存在とともに、背後の丘陵との関係を重視した遺跡立地として評価することもできるだろう。

このように、井之広遺跡は、決して大規模な遺跡ではなかったが、小河川に囲まれた完結性の高い遺跡であったということができよう。

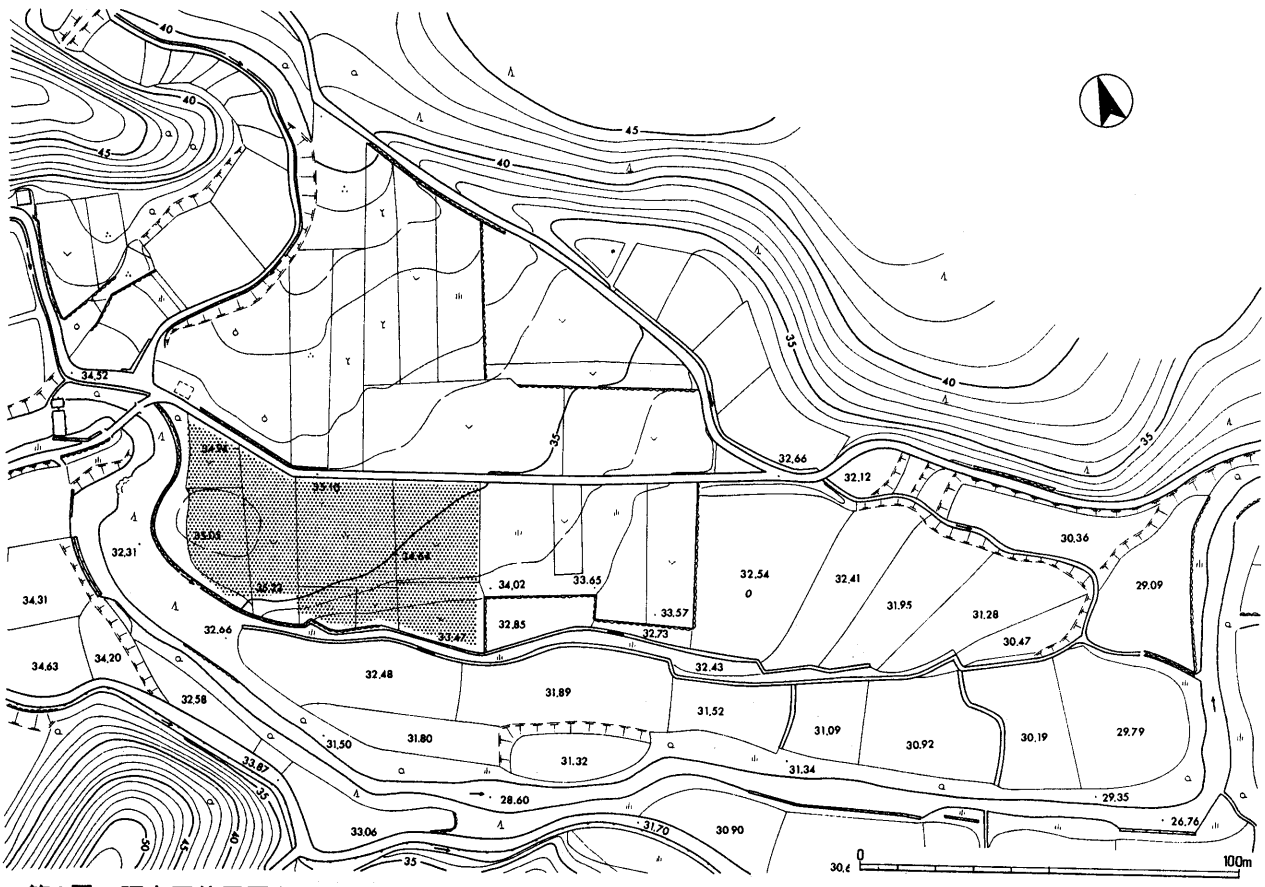
註(1)　奥義次氏のご教示による。

1 井之広遺跡
2 釜生田遺跡
3 下沖遺跡
4 大垣内遺跡
5 東野B遺跡
6 天白遺跡
7 弥五郎垣内遺跡
8 井之上遺跡
9 上野垣内遺跡
10 島田遺跡
11 蛇亀橋遺跡
12 焼野遺跡
13 天保遺跡
14 堀之内遺跡
15 中尾垣内遺跡
16 上野廃寺(下層)
17 嬉野遺跡
18 下之庄東方遺跡
19 針箱遺跡
20 片野遺跡
21 馬ノ瀬遺跡
22 清水谷遺跡
23 野田遺跡
24 庵ノ門遺跡
25 新田遺跡
26 藪ノ下遺跡
27 鳥戸遺跡
28 伊勢寺遺跡
29 堂ノ後遺跡

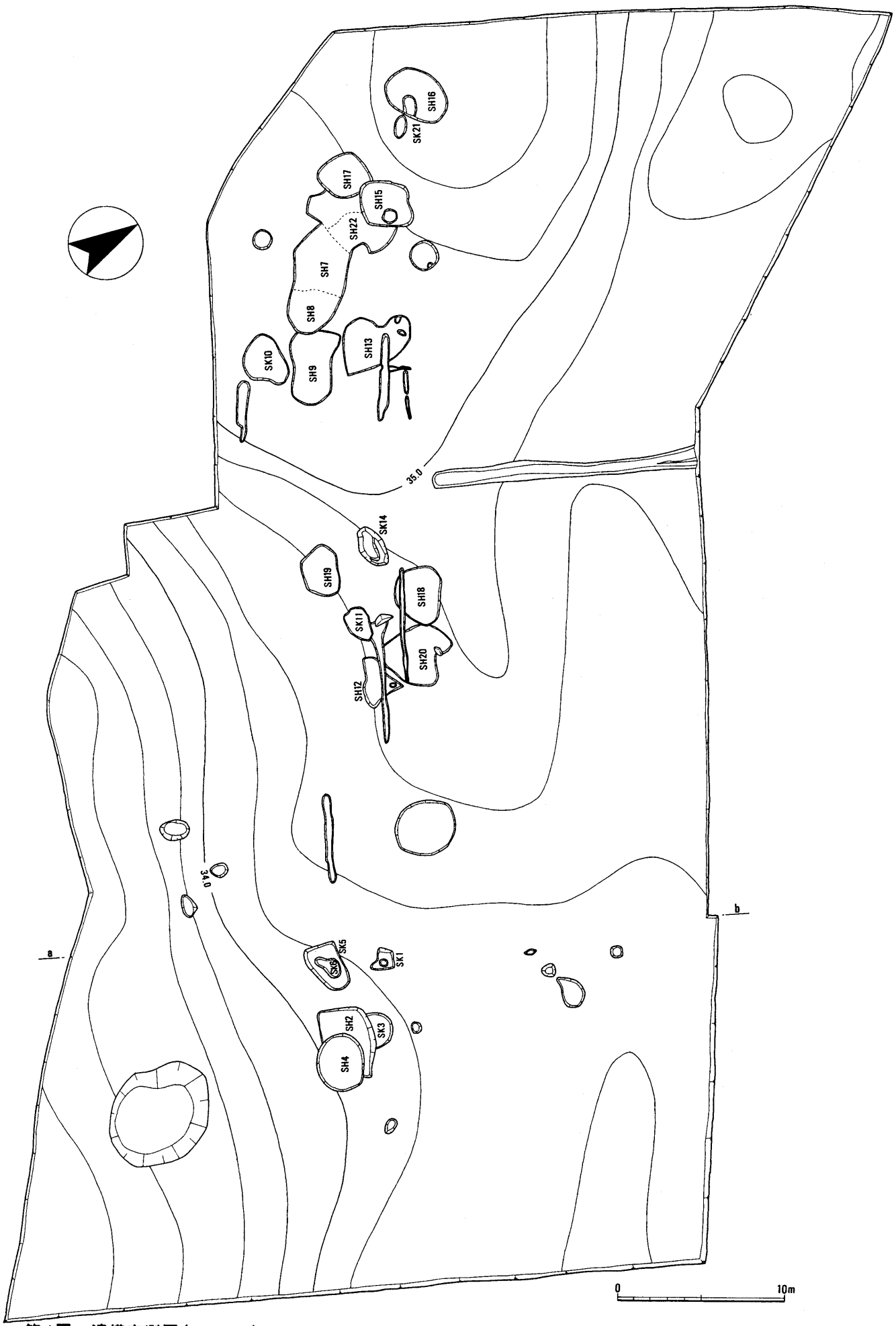
第1図　遺跡位置図(1:50,000・縄文遺物確認遺跡で構成)　[国土地理院1:25,000「大仰」「大河内」より]



第2図　遺跡周辺地形図(1:5,000)



第3図　調査区位置図(1:2,000)



第4図　遺構実測図(1:300)

2　遺構

1　基本層序

調査区の基本層序は、第５図に示したように１層から地山となる９層までに分層できたが、調査区の南側（土層作成ラインのａ点）へ行くに従って土層の流出が激しくなり、耕土の下に不安定な土層（５～８の各層）のうちのひとつを挟んですぐ地山面が現れた。従って、井之広遺跡の場合、明瞭な土層の堆積というものは認められず、北側のやや厚い部分にしても、畑耕作用に整えられた客土が中心と判断される。

つまり、井之広遺跡においては、遺構はすべて地山である赤褐色シルトを掘り込むかたちで形成されたが、堆積層としての「包含層」は厳密には存在しない。「包含層」として取り上げた遺物は、耕作の過程で遺構上面が削られ、そのために上位層序に混じりこんだ遺物であり、これらが結果として「包含層」状を呈することとなったものと判断される。

	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)
SK1	1.3	1.4	22
SH2	3.0	4.1	10
SK3	2.0	(1.2)	17
SH4	2.8	3.4	10
SK5	2.0	2.9	17
SK6	0.9	1.7	10
SH7	3.1	(3.1)	12
SH8	3.0	(2.7)	15
SH9	2.4	4.4	7
SK10	2.3	3.1	12
SK11	2.7	4.2	8
SH12	2.4	2.9	14
SH13	3.1	4.0	8
SK14	1.5	2.6	75
SH15	2.8	2.9	12
SH16	2.7	3.9	8
SH17	2.6	2.7	7
SH18	2.7	3.5	10
SH19	1.4	2.1	6
SH20	(2.9)	3.5	10
SK21	0.7	1.4	10
SH22	(2.1)	(3.0)	16

第１表　井之広遺跡遺構計測表

地山(検出面)である赤褐色シルトは、亀山市大鼻遺跡の縄文時代早期遺構面ほど安定したものではないが、本書で報告した美里村西出遺跡の検出面よりは安定性が高い。従って、遺構として認定した遺構群は、個々に付与した遺構名称（土坑や竪穴住居という性格)が実態に即しているかどうかはともかく、全体に流出が激しいために残りとしては浅いものであるが、相応の実体性はあるものと判断している。

2　遺構各説

現地調査段階の遺構認定は、埋土に縄文時代の遺物を出土するもののうち、多少歪んだプランであってもある程度の広さを有して床面が平坦なものについては竪穴住居（この場合、歪み部分は後世の耕作に伴う削平や自然流出の可能性を考える)、小規模で床面が一定しないものは土坑として捉え、遺物が極めて少ないものであっても上記遺構と同一の埋土特性をもつものは縄文時代に措定したものがある。

以下、簡単に個別の説明を加えておく。個々の規模等は、遺構一覧表を参照願いたい。

ＳＫ１　掘り込みとして認識できたが、図示しうるほどの遺物もなく、性格は不明である。

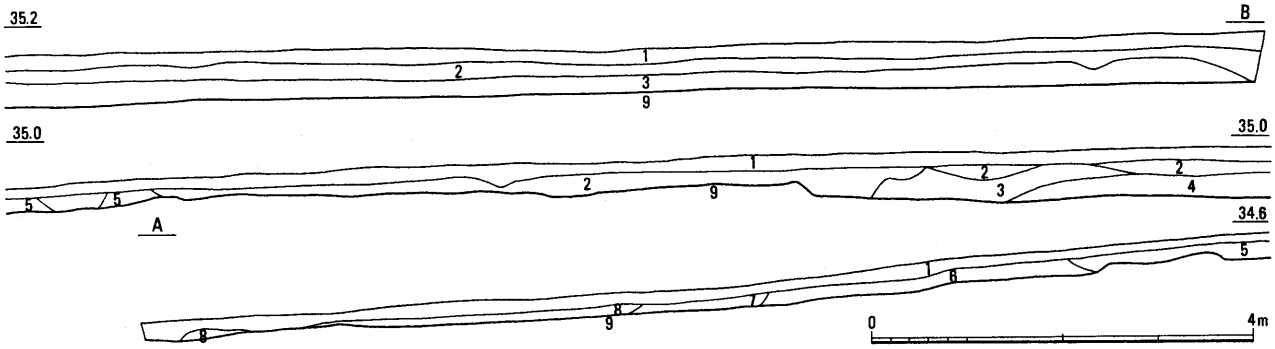
ＳＨ２・４　重複するふたつの遺構で、ＳＨ４は楕円形、ＳＨ２は略方形を呈し、竪穴住居であったと思われる。焼土等は確認できなかった。ともにごく少量の押型文土器が出土している。

ＳＫ３　ＳＨ２に切られ、南半を欠く円形の土坑である。図示しうるほどの遺物はない。

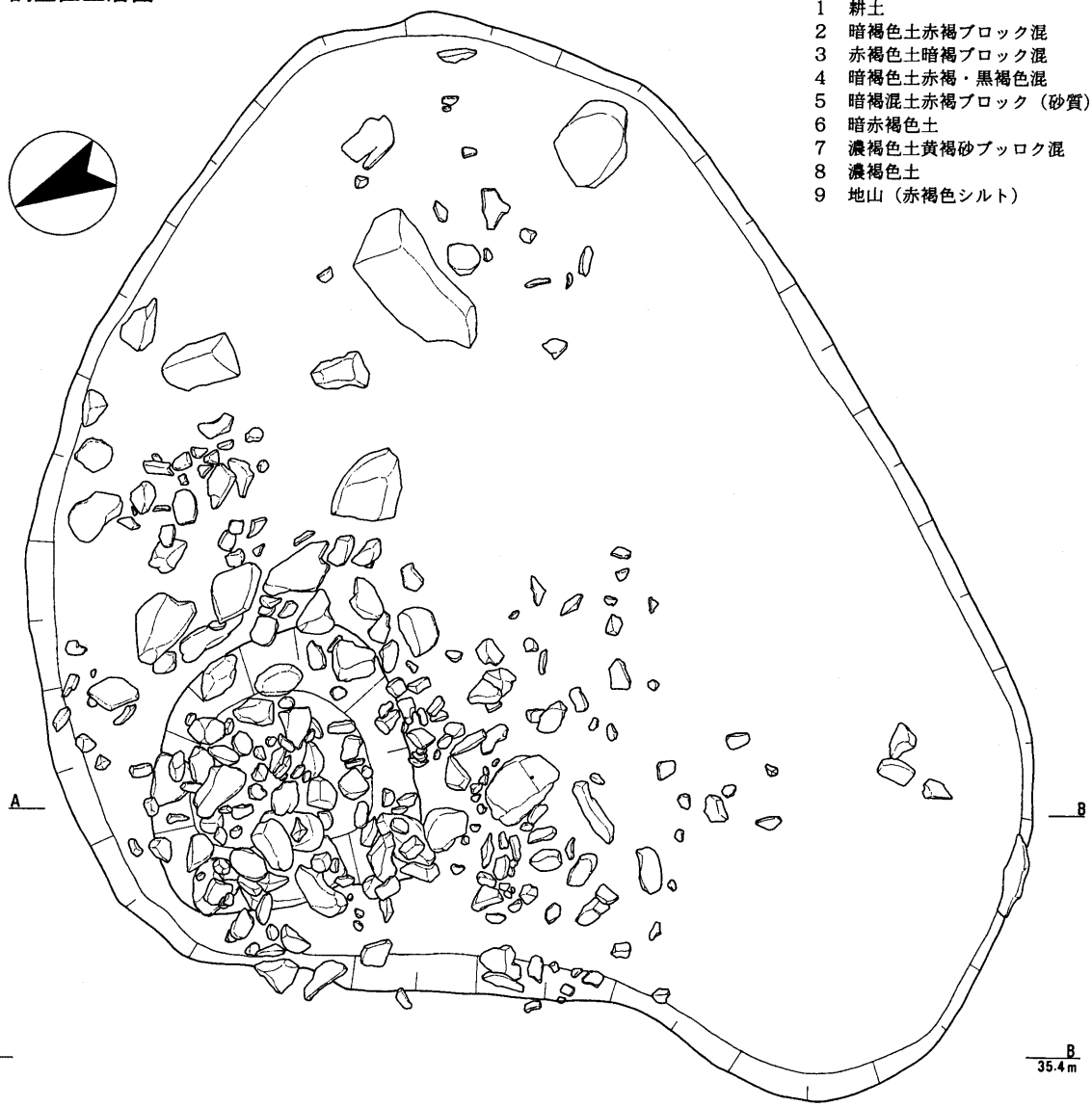
ＳＫ５・６　ＳＫ5埋土から後期の中津式、ＳＫ６埋土から中期末葉の縄文土器が出土している。

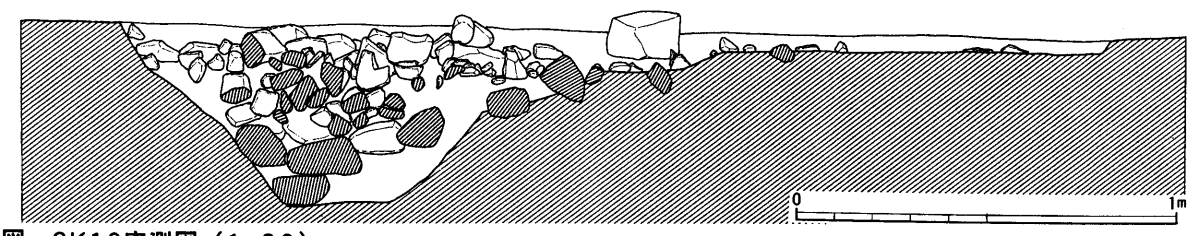
ＳＨ７～９・15・17・22　相互に重複する遺構群である。残存深度が乏しいことから本来の形状や切り合いによる前後関係は不明であるが、規模や形状等から竪穴住居の可能性が大きいと判断された。平面形が隅丸方形を呈するＳＨ15は、東壁際の床に焼土がみられた。ＳＨ17・22では図示しうるほどの遺物は出土していないが、他の住居からは量の多寡はともかく、押型文土器が出土している。

ＳＫ10　現地調査段階で、屋外炉とされた遺構である。埋土に礫の入った不定形状の土坑で、南西隅

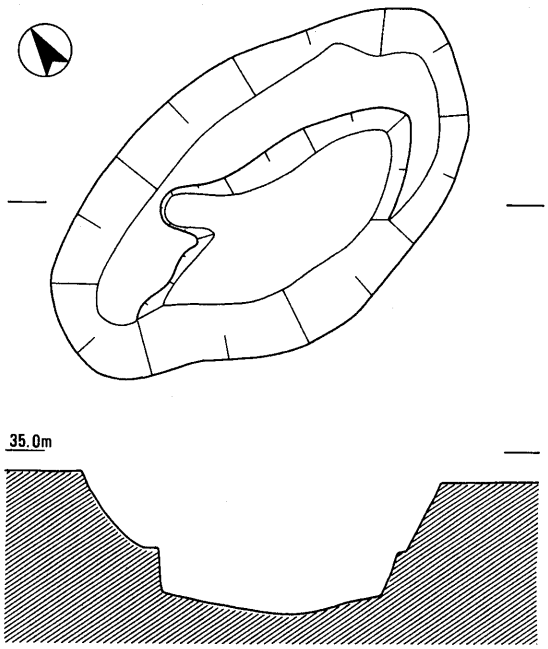


第5図　調査区土層図

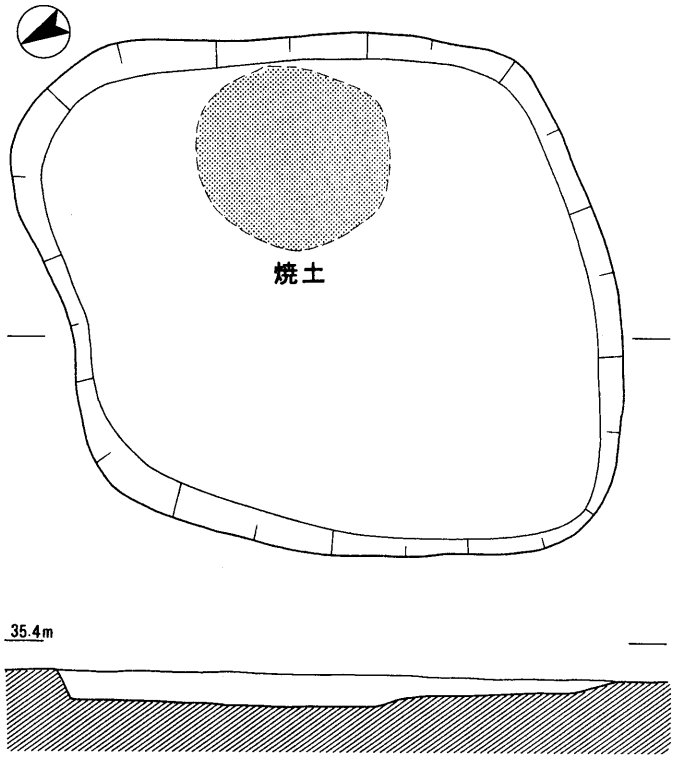




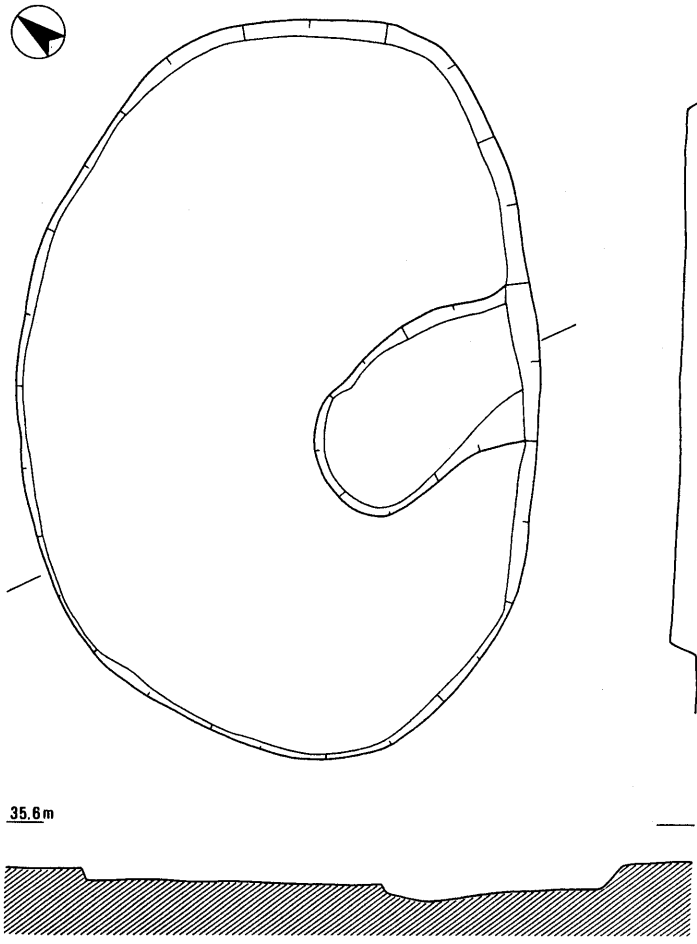
第6図　SK10実測図（1:20）



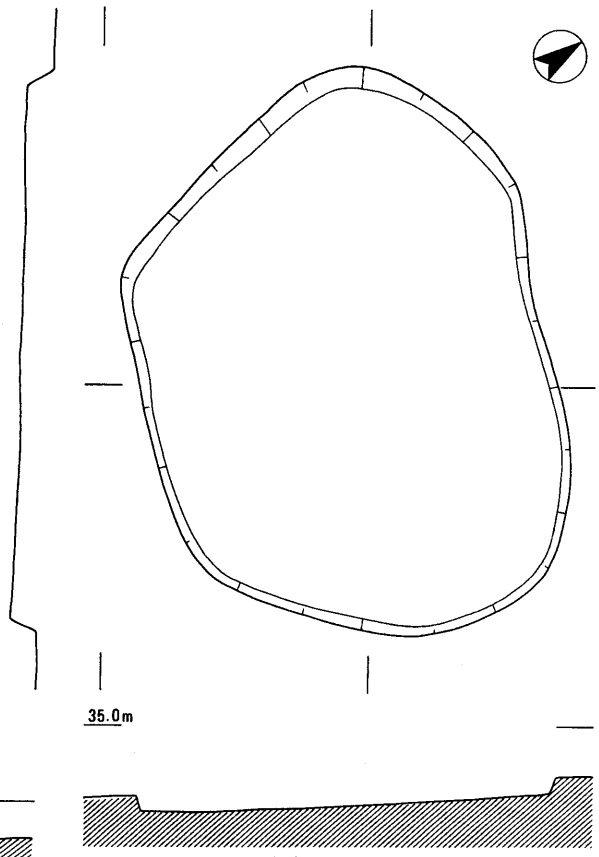
第7図　SK14実測図(1:40)



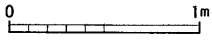
第8図　SH15実測図(1:40)



第9図　SH16実測図(1:40)



第10図　SH19実測図(1:40)



がわずかに外側へ突出した形状を呈する。床面の1ヶ所が掘り込められ、礫が詰まっているが、その部分に焼けた痕跡があり、炉的な機能が想定される。いわゆる礫群に類するものと推定されるが、礫の大きさにはばらつきが大きい。縄文時代後期と思われる土器が微量混じるが、出土遺物は基本的には押型文土器で構成されている。なお、炉は床面から35cmの深さを有している。

ＳＫ11　不定形状の土坑で、性格は不明である。押型文土器と縄文後期の土器が出土して安定に欠き、遺構としては疑わしい。

ＳＨ12　埋土流出のためやや歪なプランをとるが、本来的には竪穴住居であった可能性がある。残された埋土から押型文土器が出土している。

ＳＨ13　埋土流出のためやや歪なプランをとるが、竪穴住居であろう。押型文土器が出土している。

ＳＫ14　平面形は楕円形を呈して二段に掘り込まれた深い土坑で、他の遺構が流出や削平のために検出面から10cm内外の深さしか残さないのに対して、75cmの深さをもつ。床面はほぼフラットである。縄文時代後期の中津式土器も含むが、基本的に押型文土器が出土している。有茎尖頭器(161)の出土もあることから、陥穴の可能性もある。

ＳＨ16　東西に長軸をもつ楕円形を呈しており、南側の壁際に浅い土坑状の掘り込みを有する。竪穴住居の残欠と思われる。縄文時代中期末葉もしくは後期初頭の土器が出土しており、この時期の所産であろう。なお、最上面から須恵器杯身が出土したが、埋土下部は縄文土器で占められており、須恵器は混入と思われる。

ＳＨ18　本来的には竪穴住居であったものが、削平や流出のため隅丸台形の歪な平面形を呈するようになったものと判断している。1点のみであるが、押型文土器の破片を図示した。

ＳＨ19　本遺構も、台形状の形状を取るが、本来は楕円形状の竪穴住居であったと推定される。

ＳＨ20　流出・削平のほか、耕作溝などの重複を受けたりしているが、本遺構も竪穴住居の残欠とみられる。埋土より押型文土器が出土している。

ＳＫ21　ＳＨ16の南側に存在する楕円形の土坑である。縄文時代中期末葉の土器が出土している。

3　遺物

井之広遺跡出土の遺物は、ほとんどが縄文土器である。このうち、最も出土量が多いのが早期の神宮寺式主体の押型文土器で、次いで後期の中津式土器がある。さらに、量は少ないが前期前葉及び中期末葉と思われる土器や、縄文時代の石器・石製品、ごく少量の歴史時代遺物がある。以下、個別にみていこう。

1　縄文土器

ＳＨ２出土遺物（１～２）　押型文土器の胴部片である。いずれも斜格子文の縦施文である。

ＳＨ４出土遺物（３）　押型文土器の口縁部片である。ネガティブな楕円文（以下、「ネガ楕円文」と略）が施されている。

ＳＫ５出土遺物（４～５）　いわゆる磨消縄文である。後期初頭の中津式土器に比定できる。

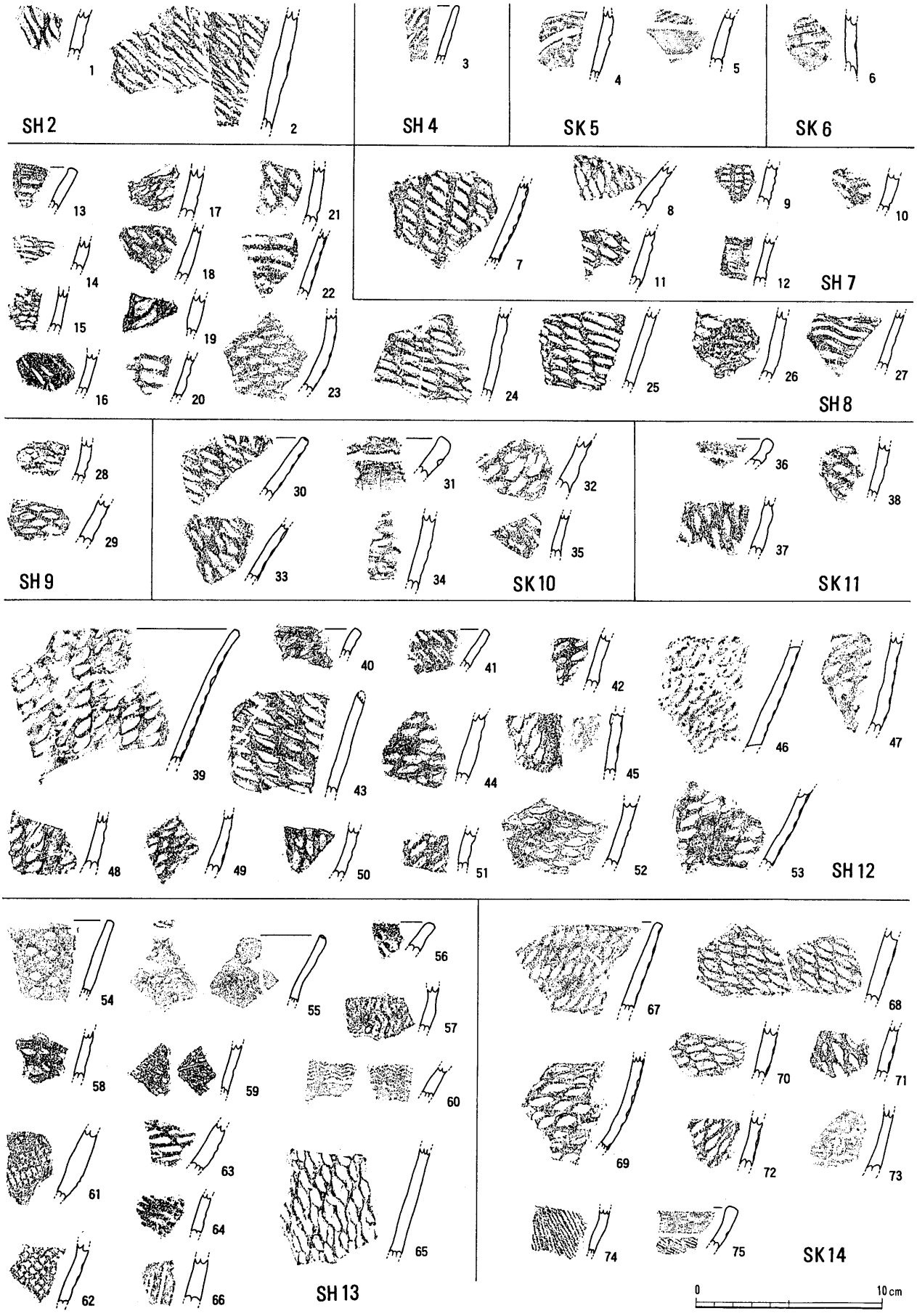
ＳＫ６出土遺物（６）　巻貝の螺殻を押し引きした沈線文で、中期末葉に則する可能性がある。

ＳＨ７出土遺物（７～12）　いずれも神宮寺式押型文土器の胴部片である。斜格子文(７・11)やネガ楕円文の他、小粒の正格子文(9)などがある。

ＳＨ８出土遺物（13～27）　13が口縁部片以外は、すべて胴部片である。特徴的なものでは、13は非常に細長の正格子文を縦回転したもの、15は小粒の格子文、16は極めて細いネガ楕円文である。また、27は山形文を横施文したものであろう。17や18、23、26などはネガ楕円文で、23はそれを市松風に配している。19～22・24～25は粒の単位で見るとネガ楕円文との境界が流動的なものもあるが、大略は斜格子文ないしは正格子文である。

ＳＨ９出土遺物（28～29）　いずれもネガ楕円文の胴部片である。浅い施文である。

ＳＫ10出土遺物（30～35・97）　混入と思われる31の他はすべて押型文土器である。30は、本遺跡の神宮寺式にしては珍しく、口唇外斜面に刻み列を残す。32～35はネガ楕円文を施した胴部破片である。31も刻まれた印刻の個々はネガ楕円文であるが、そ



第11図　出土遺物(1)

れが斜格子状に配されている。97は、図版作成上の手違いでレイアウト上、包含層遺物の部分に入れてしまったが、ＳＫ10出土の遺物である。ネガ楕円文を縦回転させた典型的な神宮寺式の口縁部破片である。

ＳＫ11出土遺物（36～38）　口縁部片の小片である36は後期の土器の可能性があるが、37～38は押型文土器の胴部片である。

ＳＨ12出土遺物（39～53）　39は本遺跡出土押型文土器の口縁部破片のなかでは最も大形の破片で、角頭状の口縁端部をもち、ネガ楕円文を斜格子状に縦施文している。40～41も口縁部片で、43も口唇こそ欠損するものの、口縁部である。残りはすべて胴部片で、いずれもネガ楕円文が施されているが、46のように印刻の重複が激しいものは、広い口縁部から縦に施文されてきた押型原体が、底部付近に至ってスペースがなくなり重複を重ねたためであろう。神宮寺式の新相を示す良好な資料となろう。

ＳＨ13出土遺物（54～65）　間隔の疎らなネガ楕円文（54・58）や、口縁の表裏に施文した疎らで極めて小粒な格子文（55・59）、同じく表裏に横施文した山形文（60、口縁部に近い部分か）、小粒格子文の斜格子状施文（61）や市松状施文（62）など、本遺跡の押型文土器のなかではややイレギュラーなものが集中する一群である。ネガ楕円文（63～64）も印刻単位が細い。55は、口唇部にも施文があるが、大鼻－大川－神宮寺と口唇外面施文から外斜面刻みへと変化する流れには乗らない様相である。さらに56は、外面をナデ調整し、内面にのみ押型文がみられるもので（第11図掲載の56番拓影は内面部分）、しかもその押型原体は、本遺跡で唯一となるポジティブな楕円文を施している。このことも含めて、ＳＨ13出土遺物は全体として、ＳＨ12出土遺物に比べて新しい様相を示すと捉えられようか。なお、66は縄文時代後期に属する沈線文土器で、明らかな混入とすべきであろう。

ＳＨ14出土遺物（67～75）　明らかな後期中津式の混入である75を除けば、押型文土器（67～73）と撚糸文土器（74）がある。角頭状の口縁部をもつ67がネガ楕円文の横施文、68以下は斜格子文ないしはネガ楕円文を縦施文した胴部片、73は山形文のヨコ回転である。74の撚糸文は密接に施されている。

ＳＨ15出土遺物（76）　極く薄手の口縁部片である。一見、山形押型文のようにも見えるが、縄文前期の北白川下層式系の太いＣ字爪形の連続刺突文とするのが妥当であろう。

ＳＨ16出土遺物（77～78）　埋土全体に含まれるのは後期の土器で、そのうち2点を図示した。いずれも胴部片で、77は条線文、78は沈線により文様を表出させている。なお、上面より須恵器が出土しているが、これは後述する。

ＳＨ18出土遺物（79）　正格子文による押型文土器の胴部片で、個々の印刻はやや小粒である。

ＳＨ19出土遺物（80）　小粒のネガ楕円文による押型文土器の胴部片である。

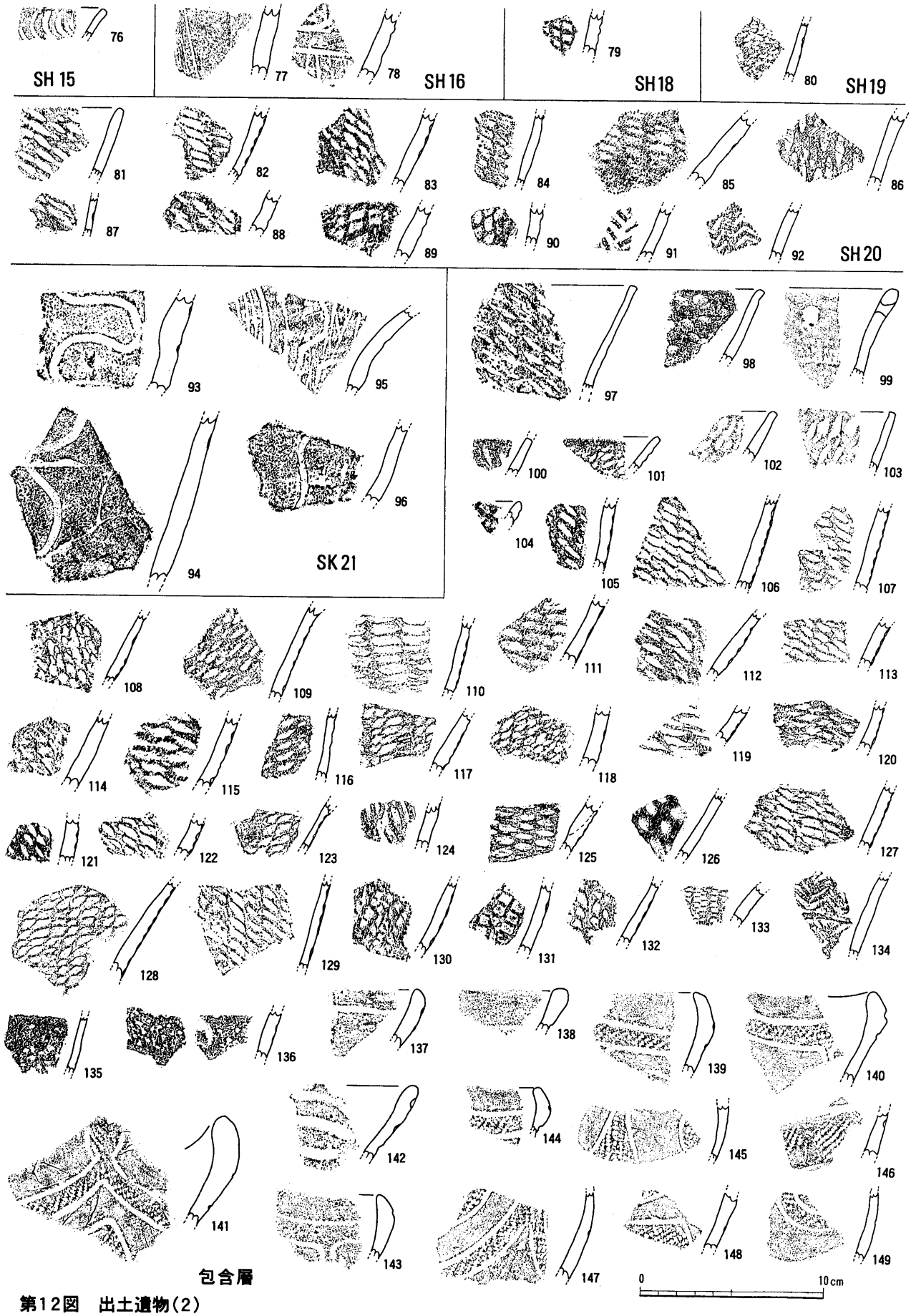
ＳＨ20出土遺物（81）　すべて押型文土器である。唯一の口縁部片である81は、ネガ楕円文を斜格子状に口縁端部から縦施文で引き下ろす。胴部片には、斜格子文（82・84）と正格子文（85・89、85はやや崩れ）、ネガ楕円文（83・86～88・90）、山形文（91～92）がある。ＳＨ12出土遺物同様、ほぼ神宮寺式新相を示していよう。

ＳＫ21出土遺物（93～96）　口縁部片はないが、胴部に蛇行沈線を引き下ろした厚手の土器で、条線地の95も含めて中期末葉に比定できよう。

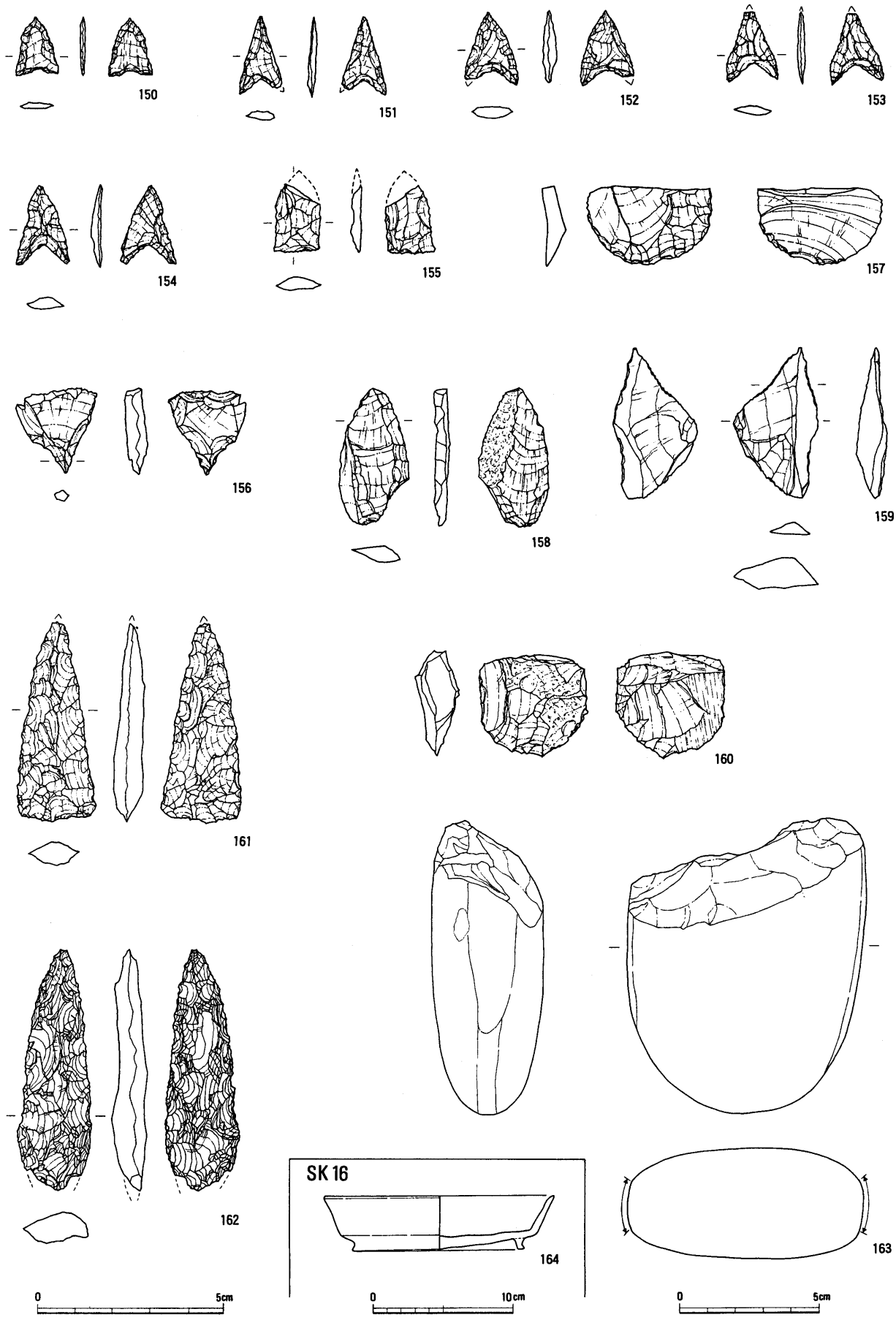
包含層出土縄文土器（98～149）　前述のように、97はＳＫ10出土のため、除外する。早期押型文土器（98～136）と後期磨消縄文土器（137～149）がある。

押型文土器は、角頭状の口縁部からあまり屈曲をもたず砲弾状に底部に至る器形を呈してネガ楕円文、斜格子文、正格子文、山形文などを施したもので、基本的には遺構出土のものと同様の特徴を示す。こうしたなか、口縁端部から無文部を置いて小粒の正格子文を横施文した99は、一種「帯状施文」的な様相をとり、口縁部も他のものに比してやや厚い。また、134は、胴部に山形文を二段に施すが、上下反転させて回転したため、対向した山形文になるよう施文されている。135と136は、極めて小粒かつ疎らな格子文で、136は内外に施文している。

137～149は、基本的に単節ＬＲによる磨消縄文土器であるが、142のみは沈線幅が厚く、縄文も確認しづらいため、中期末葉の土器の可能性もある。こ



第12図　出土遺物(2)



第13図　出土遺物(3)　(163は1:2、164は1:4、その他2:3)

れ以外の口縁部破片である137～141・143～144はいずれも口縁部がやや肥厚し、口縁部文様帯の枠状区画も崩れていることから、中津式でも新相に含まれるものと思われる。

2　石器・石製品

量が少ないので、遺物図版へのレイアウトは器種別に行ったが、記述は遺構毎に行う。

ＳＨ４出土石器（153）　サヌカイト製の石鏃で、脚部がやや丸みを帯び、端部は鋭く尖る。

ＳＨ13出土石器（162）　基部両端に折損の痕跡があり、柳葉形に近い尖頭器と推定される。表裏両面に丹念に二次調整が加えられる。両側縁が左右非対称となるのが特徴的である。チャート製。

ＳＫ14出土石器（157・159・161）　掻器(157)・削器（159)・有茎尖頭器(161)がある。掻器はサヌカイト製で、寸詰まりの楔状の剥片を素材とし、その先端部に弧状の刃部を形成する。削器はチャート製で、側縁に細かな二次調整もしくは使用痕が認められる一方、先端部も鋭く尖るように調整されており、錐としての機能も考えられる。有茎尖頭器はサヌカイト製で、茎部の作出は痕跡的に残る程度で明確でない。平面形は先端部が僅かに曲がり、左右非対称となる。

ＳＨ20出土石器・石製品（151・163）　サヌカイト製の石鏃(151)と砂岩製の礫器(163)がある。石鏃は、先端・基部とも鋭く尖り、二等辺三角形に近い形状を呈するが、脚部片側を少し欠く。礫器は、両側面に明瞭な面を形成するほど研磨痕を留めており、磨石を転用した礫器と思われる。磨石を分割後、その部分に片面のみ粗い階段状剥離を施している。

包含層出土石器　石鏃(150・152・154～155)、削器(158)・楔形石器(160)・石錐(156)があり、いずれもサヌカイト製である。

石鏃はいずれも無茎のもので、150と155が長五角形、152と154は両側縁がやや丸みを帯びて先端・基部とも鋭く尖る二等辺三角形に近い形状を呈する。削器は、楔状の剥片を素材とし、右側縁に二次調整を施す。石錐は、短小な剥片の一端のみを集中的に尖らせたものである。

3　歴史時代遺物

ＳＨ16混入遺物（161）　ほぼ完形の奈良時代の須恵器杯身である。

4　まとめ

1　遺構群の存続時期とその遺構

井之広遺跡の縄文時代遺構は、所属時期が以下のように分けられる。

早期（神宮寺式期）　ＳＨ２・４・７～９・12～14・18～20、ＳＫ３・10・11・14

前期　ＳＨ15

中期末葉　ＳＫ６・21

後期（中津式期）　ＳＫ５・16

不明　ＳＫ１・ＳＨ22

井之広遺跡では、以上のように、前期と中期末、後期の遺構が少量含まれるとはいえ、遺構の所属時期の主体が縄文時代早期前半、しかも神宮寺式期にあることは明らかである。遺構の多くは、掘り込みの規模などから竪穴住居になるものと思われ、屋外炉（ＳＫ10）と考えられる遺構も伴っている。

2　井之広遺跡出土の神宮寺式土器について

井之広遺跡の早期遺構を構成する資料は、神宮寺式[1]で占められており、かなり限定した時期幅に限定しうる。このことは、所属型式こそ異なるものの、大鼻式に属する多気町坂倉遺跡[2]や亀山市大鼻遺跡[3]と通じ、本書掲載の美里村西出遺跡とは様相を異にする。つまり、井之広遺跡の神宮寺式土器は、量的にはさほど多くないが、他時期の混入の心配が限定でき、資料的に高い純粋性を保つものとして、今後の当該土器研究に資する部分が大きいもとと評価できよう。

さて、井之広遺跡の神宮寺式土器の特徴についてまとめると、以下のようになる。

- 口頸部と胴部の境界があいまいで、押型文を口縁部ヨコ・体部タテと「Ｔ」字状に回転させることなく、口縁直下から底部に向かって一気に引き下ろすものを原則としている
- 口縁端部は、外斜面に刻みを施すものと、施さないものがある。前者においても、押型文は縦回転のみを原則とする
- 押型原体は、ネガ楕円文と斜格子文、横長格

子文が主体を占め、それに山形文や極めて小粒（点状）で間隔疎らな正格子文がある。

以上の特徴は、神宮寺式のなかでも、新しい様相を示すものとして捉えられよう。

ところで、井之広遺跡における神宮寺式期の遺構出土土器のなかで、やや特異なあり方を示すものがＳＨ13出土遺物である。これは、既に事実報告の部分でも概説したように、山形文(60)や極めて小粒の間隔疎らな格子押型文(55･59)を表裏に施文したり、本遺跡押型文土器で唯一のポジティブ楕円文(56)を含むなど、特徴的な一群である。54のような間隔が疎らな丸めのネガ楕円文や、小粒格子文の市松状配置の62なども特徴的である。こうした特徴をもつ土器は、包含層出土のもの(98・135～136等)を除けば他に例がなく、他の遺構出土遺物と明らかに区分可能な一群である。

これらＳＨ13出土土器は、内面施文も多用されるという特徴、それに内面施文のポジティブ楕円文の存在などから、井之広遺跡出土の神宮寺式のなかでも新しい様相を示すと考えれば、押型文土器の型式変遷のなかで無理なく理解できそうである（逆に、井之広遺跡出土神宮寺式のなかでも古いものと捉えれば、大川ｂ式から神宮寺式に至る変遷過程のなかで浮いた存在になる)。

以上のことから、井之広遺跡出土の神宮寺式土器は、神宮寺式土器でも新しい特徴をもつと把握できるとともに、ＳＨ13出土土器についてはそのなかでもさらに新しい様相を示すと捉えられよう。

ＳＨ13出土土器をはじめとする井之広遺跡出土押型文土器を介して、今後、本地域の神宮寺式土器の型式細分や型式概念の整備が進み、さらに神宮寺式に後続する押型文土器への連接を研究するうえでも本資料が型式変遷上の定点を占める資料として活用されていくことを期待したい。

３　中村川流域の縄文時代早期遺跡群

井之広遺跡が所在する中村川流域は、県内でも有数の縄文時代早期（押型文期）集落の集中分布地域で、特に井之広遺跡の周辺では、古田川を挟んだ対岸に所在する釜生田遺跡[4]と、1㎞ほど東側の中村川左岸に所在する東野Ｂ遺跡[5]がある。

このうち、東野Ｂ遺跡は、井之広遺跡同様、神宮寺式が主体を占め、少量の大川式が混じる。一方、釜生田遺跡では、少量の神宮寺式と思われるネガティブ系押型文土器と、黄島式併行期と思われるポジティブ系押型文土器が出土している。

つまり、土器型式のうえでは、まず東野Ｂ遺跡の大川式の段階があり、次いでやや断絶があるかもしれないが井之広遺跡と東野Ｂ遺跡、釜生田遺跡の神宮寺式の段階が続き、そこからやや断絶があって、最後に釜生田遺跡の黄島式併行期の段階がある。従って、現況の資料に拠る限り、古田川と中村川が合流する付近では、三遺跡のすべてで神宮寺式が出土していることから、神宮寺式の時期に最も人間活動が盛んであったことを示している。

この時期の生業活動は、当然中村川や古田川での漁撈活動や丘陵部での植物質食料の獲得が想定できる他、井之広遺跡では石鏃や2点の尖頭器（この尖頭器自体、退化した形態を示し、明らかに神宮寺式に伴うものとして尖頭器の変遷過程を考える上で貴重な情報を提供している)が出土していることから、相応の狩猟活動が行われたことも示される。

今回の井之広遺跡の調査によって、狭い地域に拠点を築き、生活していた縄文人の生活の一端が明らかとなった。これら遺跡群が神宮寺式という土器型式の存続期間内にどのような関係にあったのかは不明であるが、今後、周辺地域のさらなる知見が確認された段階で、改めて考えていきたい。　（穂積）

註

(1)　神宮寺式を含め、本報告における押型文土器の型式名・編変観・型式概念は下記文献に従っている。山田猛「押型文土器群の型式学的再検討－三重県下の前半期を中心として－」『三重県史研究』第4号　三重県　1988

(2)　1974年、三重県教育委員会調査

(3)　梅澤裕・山田猛『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅲ　大鼻（二～三次)・山城（三次）遺跡』三重県教育委員会　1987

(4)　三重県教育委員会『釜生田遺跡』（現地説明会資料）1988

(5)　三重県教育委員会『東野Ｂ遺跡』（現地説明会資料）1987

写 真 図 版

遺跡遠景（南から）

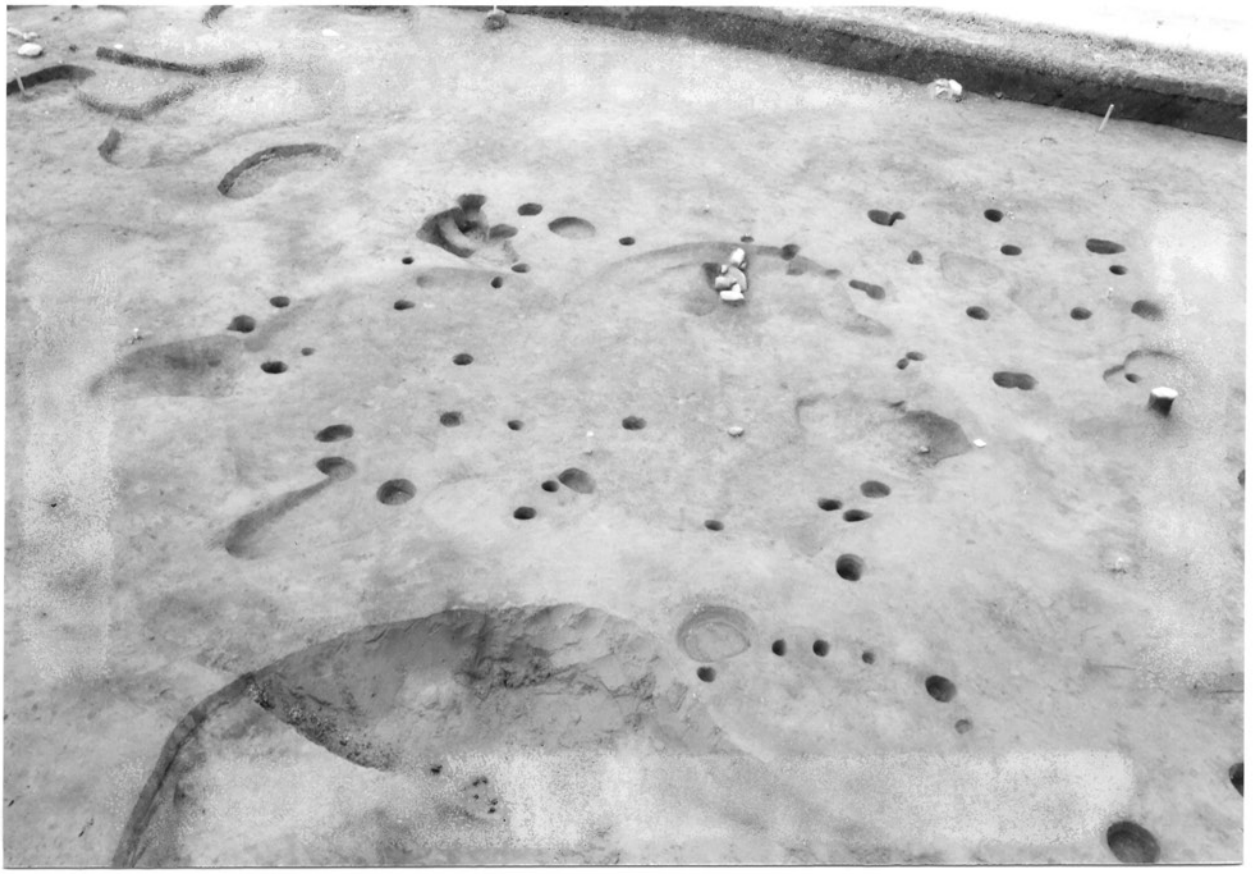
調査区全景（北から）

調査区全景（完掘後、西から）

調査風景

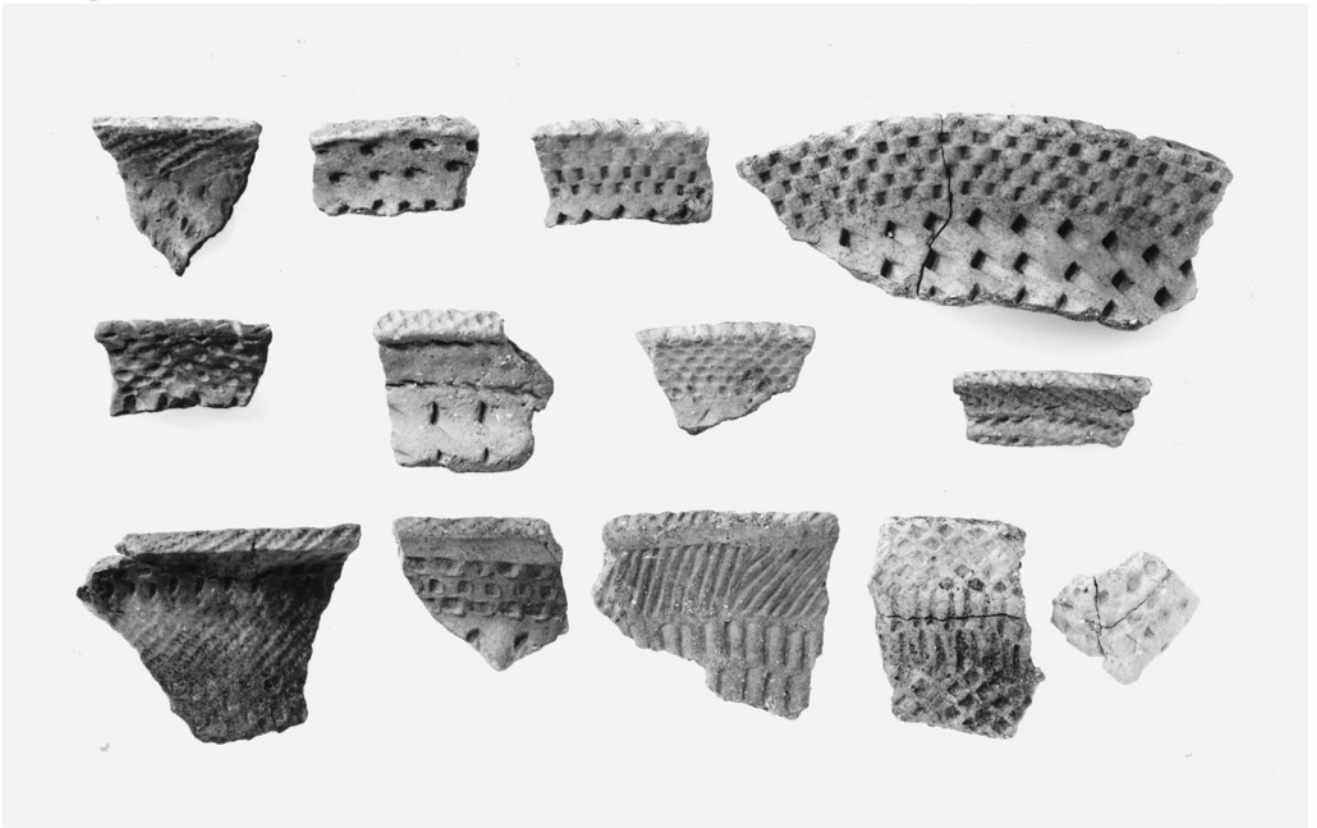
SH11・12（北から）

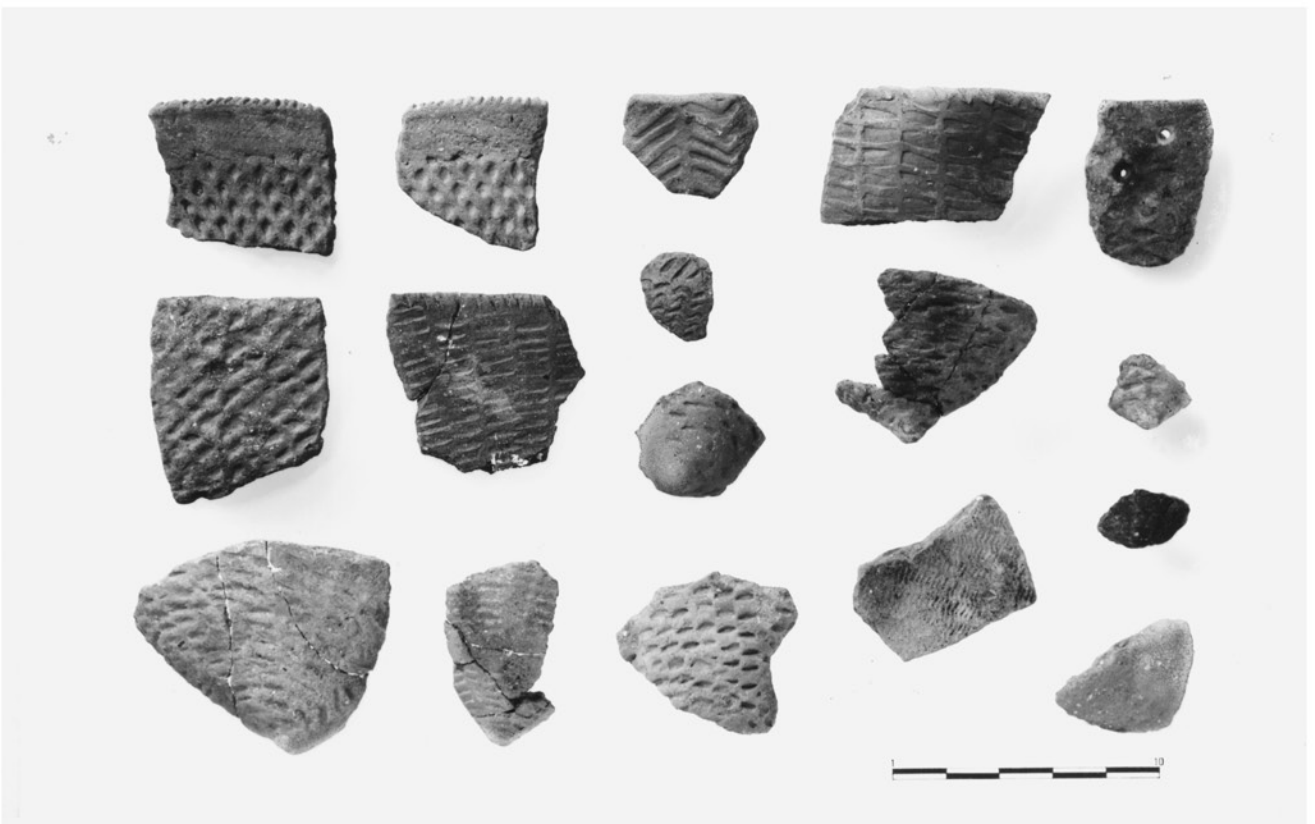
SB1（北から）



SH5～8（北から）

SH11・12（東から）





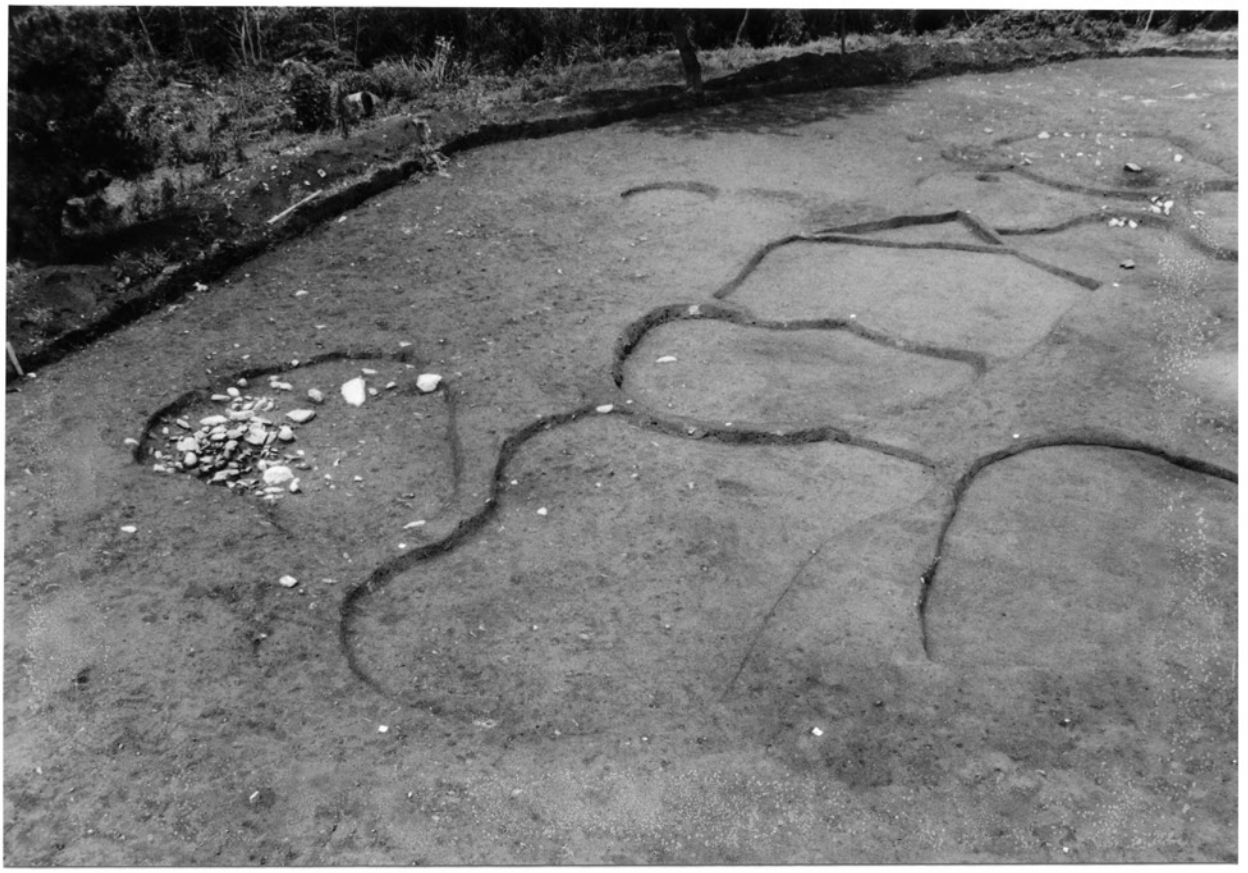
出土遺物

遺跡の立地（東から）

完掘状況（東から）

SH2・4、SK3（東から）

SK1・5・6（北から）



SK10（左）とSH9他（東から）

SK10（北東から）

SH16（南から）

SH18・20、SK14・19（東から）

平成2(1990)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年3月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 92-4

西出遺跡　井之広遺跡

１９９０年３月発行

編集発行　　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　　光出版印刷株式会社